ЧАЙКА

——喜劇　四幕——

アントン・チェーホフ　Anton Chekhov

神西清訳

-------------------------------------------------------

【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ

（例）灌木《かんぼく》

｜：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）退職｜中尉《ちゅうい》

［＃］：入力者注　主に外字の説明や、傍点の位置の指定

　　　（数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数）

（例）※［＃疑問符感嘆符、1-8-77］

-------------------------------------------------------

人物

アルカージナ（イリーナ・ニコラーエヴナ）　とつぎ先の姓はトレープレヴァ、女優

トレープレフ（コンスタンチン・ガヴリーロヴィチ）　その息子、青年

ソーリン（ピョートル・ニコラーエヴィチ）　アルカージナの兄

ニーナ（ミハイロヴナ・ザレーチナヤ）　若い処女、裕福な地主の娘

シャムラーエフ（イリヤー・アファナーシエヴィチ）　退職｜中尉《ちゅうい》、ソーリン家の支配人

ポリーナ（アンドレーエヴナ）　その妻

マーシャ　その娘

トリゴーリン（ボリース・アレクセーエヴィチ）　文士

ドールン（エヴゲーニイ・セルゲーエヴィチ）　医師

メドヴェージェンコ（セミョーン・セミョーノヴィチ）　教員

ヤーコフ　下男

料理人

小間使

ソーリン家の田舎屋敷でのこと。——三幕と四幕のあいだに二年間が経過

［＃改ページ］

［＃５字下げ］第一幕［＃「第一幕」は中見出し］

［＃ここから３字下げ］

ソーリン家の領地内の廃園の一部。広い並木道が、観客席から庭の奥のほうへ走って、湖に通じているのだが、家庭劇のため急設された仮舞台にふさがれて、湖はまったく見えない。仮舞台の左右に灌木《かんぼく》の茂み。椅子《いす》が数脚、小テーブルが一つ。

日がいま沈んだばかり。幕のおりている仮舞台の上には、ヤーコフほか下男たちがいて、咳《せき》ばらいや槌《つち》音が聞える。散歩がえりのマーシャとメドヴェージェンコ、左手から登場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

メドヴェージェンコ　あなたは、いつ見ても黒い服ですね。どう
　　　　　　　　　　いうわけです？

マーシャ　　　　　　わが人生の喪服なの。あたし、不仕合せな
　　　　　　　　　　女ですもの。

メドヴェージェンコ　なぜです？　（考えこんで）わからんです
　　　　　　　　　　なあ。……あなたは健康だし、お父さんに
　　　　　　　　　　したって金持じゃないまでも、暮しに不自
　　　　　　　　　　由はないし。僕なんか、あなたに比べたら
　　　　　　　　　　、ずっと生活は辛《つら》いですよ。月に
　　　　　　　　　　二十三ルーブリしか貰《もら》ってないの
　　　　　　　　　　に、そのなかから、退職積立金を天引きさ
　　　　　　　　　　れるんですからね。それだって僕は、喪服
　　　　　　　　　　なんか着ませんぜ。（ふたり腰をおろす）

マーシャ　　　　　　お金のことじゃないの。貧乏人だって、仕
　　　　　　　　　　合せにはなれるわ。

メドヴェージェンコ　そりゃ、理論ではね。だが実際となると、
　　　　　　　　　　そうは行かない。僕に、おふくろ、妹がふ
　　　　　　　　　　たり、それに小さい弟——それで月給がた
　　　　　　　　　　だの二十三ルーブリ。まさか食わず飲まず
　　　　　　　　　　でもいられない。お茶も砂糖もいりますね
　　　　　　　　　　。タバコもいる。そこでキリキリ舞いにな
　　　　　　　　　　る。

マーシャ　　　　　　（仮舞台のほうを振向いて）もうじき幕が
　　　　　　　　　　あくのね。

メドヴェージェンコ　そう。出演はニーナ嬢で、脚本はトレープ
　　　　　　　　　　レフ君の書きおろし。ふたりは恋仲なんだ
　　　　　　　　　　から、今日はふたりの魂が融合して、同じ
　　　　　　　　　　一つの芸術的イメージを、ひたすら表現し
　　　　　　　　　　ようという寸法でさ。ところが僕とあなた
　　　　　　　　　　の魂には、共通の接点がない。僕はあなた
　　　　　　　　　　を想《おも》っています。恋しさに家《う
　　　　　　　　　　ち》にじっとしていられず、毎日一里半の
　　　　　　　　　　道を、てくてくやって来ては、また一里半
　　　　　　　　　　帰っていく。その反対給付といえば、あな
　　　　　　　　　　たのそっけない顔つきだけです。それも無
　　　　　　　　　　理はない。僕には財産もなし、家族は大ぜ
　　　　　　　　　　いときてますからね。食うや食わずの男と
　　　　　　　　　　、誰が好きこのんで結婚なんかするものか
　　　　　　　　　　？

マーシャ　　　　　　つまらないことを。（かぎタバコをかぐ）
　　　　　　　　　　お気持はありがたいと思うけれど、それに
　　　　　　　　　　お応《こた》えできないの。それだけのこ
　　　　　　　　　　とよ。（タバコ入れを差出して）いかが？

メドヴェージェンコ　欲しくないです。（間）

マーシャ　　　　　　蒸し蒸しすること。晩《おそ》くなって、
　　　　　　　　　　ごろごろザーッときそうね。あなたはしょ
　　　　　　　　　　っちゅう、理屈をこねるか、お金の話か、
　　　　　　　　　　そのどっちかなのね。あなたに言わせると
　　　　　　　　　　、貧乏ほど不仕合せなものはないみたいだ
　　　　　　　　　　けれど、あたしなんか、ボロを着て乞食《
　　　　　　　　　　こじき》ぐらしをしたほうが、どんなに気
　　　　　　　　　　楽だか知れやしないわ。……あなたには、
　　　　　　　　　　わかってもらえそうもないけど……

［＃ここから３字下げ］

右手から、ソーリンとトレープレフ登場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ソーリン　　　　　　（ステッキにもたれながら）わたしはどう
　　　　　　　　　　も、田舎《いなか》が苦手でな、この分じ
　　　　　　　　　　ゃてっきり、一生この土地には馴染《なじ
　　　　　　　　　　》めまいよ。ゆうべは十時に床へはいって
　　　　　　　　　　、けさ九時に目がさめたが、あんまり寝す
　　　　　　　　　　ぎたもんで、脳みそが頭蓋骨《ずがいこつ
　　　　　　　　　　》に、べったりくっついたような気がした
　　　　　　　　　　——とまあいった次第でな（笑う）。とこ
　　　　　　　　　　ろが昼めしのあとで、ついまた寝こんじま
　　　　　　　　　　って、今じゃ全身へとへと、夢にうなされ
　　　　　　　　　　てるみたいな気持さ、早い話がね……

トレープレフ　　　　そりゃもちろん、伯父さんは都会に住む人
　　　　　　　　　　ですよ。（マーシャとメドヴェージェンコ
　　　　　　　　　　を見て）皆さん、始まる時には呼びますよ
　　　　　　　　　　。今ここにいられちゃ困るな。暫時《ざん
　　　　　　　　　　じ》ご退場を願います。

ソーリン　　　　　　（マーシャに）ちょいとマーシャさん、あ
　　　　　　　　　　の犬の鎖を解いてやるように、ひとつパパ
　　　　　　　　　　にお願いしてみてはくださらんか。やけに
　　　　　　　　　　吠《ほ》えるでなあ。おかげで妹は、夜っ
　　　　　　　　　　ぴてまた寝られなかった。

マーシャ　　　　　　ご自分で父におっしゃってくださいまし、
　　　　　　　　　　あたしはご免こうむります。あしからず。
　　　　　　　　　　（メドヴェージェンコに）さ、行きましょ
　　　　　　　　　　う！

メドヴェージェンコ　（トレープレフに）じゃ、始まる前に、知
　　　　　　　　　　らせによこしてください。

［＃ここから３字下げ］

ふたり退場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ソーリン　　　　　　すると、夜どおしまた、吠えられるのか。
　　　　　　　　　　さあ、事だぞ。わたしは田舎へ来て、思う
　　　　　　　　　　通りの暮しのできた例《ため》しがない。
　　　　　　　　　　前にゃよく、二十八日の休暇を取っちゃ、
　　　　　　　　　　ここへやって来たもんだ。骨休めや何やら
　　　　　　　　　　——とまあいった次第でな。ところが、く
　　　　　　　　　　だらんことに責め立てられて、着いたその
　　　　　　　　　　日から、逃げ出したくなったよ（笑う）。
　　　　　　　　　　引揚げる時にゃ、やれやれと思ったもんだ
　　　　　　　　　　。……だが今じゃ、役を退《ひ》いてしま
　　　　　　　　　　って、ほかに居場所がない——早い話がね
　　　　　　　　　　。いやでも、ここに釘《くぎ》づけだ……

ヤーコフ　　　　　　（トレープレフに）若旦那《わかだんな》
　　　　　　　　　　、〔わっしら〕ちょいと一浴びしてきます
　　　　　　　　　　。

トレープレフ　　　　いいとも。だが十分したら、みんな持ち場
　　　　　　　　　　にいてくれよ。（時計を見て）もうじき始
　　　　　　　　　　まりだからな。

ヤーコフ　　　　　　承知しやした。（退場）

トレープレフ　　　　（仮舞台を見やりながら）さあ、これが僕
　　　　　　　　　　の劇場だ。カーテン、袖《そで》が一つ、
　　　　　　　　　　袖がもう一つ——その先は、がらんどうだ
　　　　　　　　　　。書割りなんか、一つもない。いきなりパ
　　　　　　　　　　ッと、湖と地平線の眺めが開けるんだ。幕
　　　　　　　　　　あきは、きっかり八時半。ちょうど月の出
　　　　　　　　　　を目がけてやる。

ソーリン　　　　　　結構だな。

トレープレフ　　　　万一ニーナさんが遅刻しようもんなら、舞
　　　　　　　　　　台効果は吹っ飛んじまう。もうくる時分だ
　　　　　　　　　　がなあ。あのひとは、お父さんやまま母の
　　　　　　　　　　見張りがきびしいもんで、家《うち》を抜
　　　　　　　　　　け出すのは、牢《ろう》破りも同様、むず
　　　　　　　　　　かしいんですよ。（伯父のネクタイを直し
　　　　　　　　　　てやる）伯父さんは、頭も髯《ひげ》もも
　　　　　　　　　　じゃもじゃだなあ。ひとつ、刈らせるんで
　　　　　　　　　　すね。……

ソーリン　　　　　　（髯をしごきながら）これで一生、たたら
　　　　　　　　　　れたよ。わたしは若い時分から、飲んだく
　　　　　　　　　　れそっくりの風采《ふうさい》——とまあ
　　　　　　　　　　いった次第でな。ついぞ女にもてた例《た
　　　　　　　　　　め》しがない。（腰かけながら）妹のやつ
　　　　　　　　　　、なぜああ、おかんむりなんだろう？

トレープレフ　　　　なぜかって？　淋《さび》しいんですよ。
　　　　　　　　　　（ならんで腰をおろしながら）妬《や》け
　　　　　　　　　　るんでさ。おっ母《か》さんはてんからも
　　　　　　　　　　う、この僕にも、今日の芝居にも、僕の脚
　　　　　　　　　　本にも、反感を持ってるんだ。というのも
　　　　　　　　　　、演《や》るのが自分じゃなくて、あのニ
　　　　　　　　　　ーナさんだからなんです。僕の脚本も見な
　　　　　　　　　　い先から、眼の敵《かたき》にしてるんだ
　　　　　　　　　　。

ソーリン　　　　　　（笑う）まさか、そう気を回さんでも……

トレープレフ　　　　おっ母さんはね、この小っぽけな舞台で喝
　　　　　　　　　　采《かっさい》を浴びるのが、あのニーナ
　　　　　　　　　　さんで、自分じゃないのが、癪《しゃく》
　　　　　　　　　　のたねなんですよ。（時計を見て）ちょい
　　　　　　　　　　と心理的な変り種でね——おっ母さんは。
　　　　　　　　　　そりゃ才能もある、頭もいい、小説本を読
　　　　　　　　　　みながら、めそめそ泣くのも得意だし、ネ
　　　　　　　　　　クラーソフの詩だって、即座に残らず暗誦
　　　　　　　　　　《あんしょう》できるし、病人の世話をさ
　　　　　　　　　　せたら——エンジェルもはだしですよ。と
　　　　　　　　　　ころが、例しにあの人の前で、エレオノラ
　　　　　　　　　　・ドゥーゼでも褒《ほ》めてごらんなさい
　　　　　　　　　　。事ですぜ！　褒めるなら、あのひとのこ
　　　　　　　　　　とだけでなくてはならん。劇評も、あの人
　　　　　　　　　　のことだけ書けばいい。『椿姫《つばきひ
　　　　　　　　　　め》』だの『人生の毒気』（［＃割り注］
　　　　　　　　　　訳注　ロシア十九世紀の傾向的作家マルケ
　　　　　　　　　　ーヴィチの戯曲［＃割り注終わり］）だの
　　　　　　　　　　をやる時のあの人の名演技を、わいわい騒
　　　　　　　　　　ぎ立てたり、感激したりしなくてはならん
　　　　　　　　　　。ところが、この田舎にゃ、そういう麻酔
　　　　　　　　　　剤がない。そこで、淋しいもんだから苛々
　　　　　　　　　　《いらいら》する。われわれがみんな悪者
　　　　　　　　　　で、親のカタキだということになる。おま
　　　　　　　　　　けに、あの人は御幣《ごへい》かつぎで、
　　　　　　　　　　三本｜蝋燭《ろうそく》（［＃割り注］訳
　　　　　　　　　　注　死人のほとりを照らす習慣［＃割り注
　　　　　　　　　　終わり］）をこわがる、十三日と聞くと顔
　　　　　　　　　　いろを変える。しかも、けちんぼときてい
　　　　　　　　　　る。オデッサの銀行に、七万も預けてある
　　　　　　　　　　ことは——僕ちゃんと知ってるんだ。だの
　　　　　　　　　　に、ちょいと貸してとでも言おうもんなら
　　　　　　　　　　、めそめそ泣きだす始末だ。

ソーリン　　　　　　お前さんは、自分の脚本がおっ母さんの気
　　　　　　　　　　に入らんものと、頭から決めこんで、しき
　　　　　　　　　　りにむしゃくしゃ——とまあいった次第だ
　　　　　　　　　　がな。案じることはないさ——おっ母さん
　　　　　　　　　　は、君を崇拝しているよ。

トレープレフ　　　　（小さな花の弁をむしりながら）好き——
　　　　　　　　　　嫌《きら》い、好き——嫌い、好き——嫌
　　　　　　　　　　い。（笑う）そうらね、おっ母さんは僕が
　　　　　　　　　　嫌いだ。あたり前さ！　あの人は生きたい
　　　　　　　　　　、恋がしたい、派手な着物が着たい。とこ
　　　　　　　　　　ろがこの僕が、もう二十五にもなるもんだ
　　　　　　　　　　から、おっ母さんは厭《いや》でも、自分
　　　　　　　　　　の年を思い出さざるを得ない。僕がいなけ
　　　　　　　　　　りゃ、あの人は三十二でいられるが、僕が
　　　　　　　　　　いると、とたんに四十三になっちまう。だ
　　　　　　　　　　から僕が苦手なんですよ。それにあの人は
　　　　　　　　　　、僕が劇場否定論者だということも知って
　　　　　　　　　　いる。あの人は劇場が大好きで、あっぱれ
　　　　　　　　　　自分が、人類だの神聖な芸術だのに、奉仕
　　　　　　　　　　しているつもりなんだ。ところが僕に言わ
　　　　　　　　　　せると、当世の劇場というやつは、型には
　　　　　　　　　　まった因襲にすぎない。こう幕があがると
　　　　　　　　　　、晩がたの照明に照らされた三方壁の部屋
　　　　　　　　　　のなかで、神聖な芸術の申し子みたいな名
　　　　　　　　　　優たちが、人間の食ったり飲んだり、惚《
　　　　　　　　　　ほ》れたり歩いたり、背広を着たりする有
　　　　　　　　　　様を、演じてみせる。ところで見物は、そ
　　　　　　　　　　んな俗悪な場面やセリフから、なんとかし
　　　　　　　　　　てモラルをつかみ出そうと血まなこだ。モ
　　　　　　　　　　ラルと言っても、ちっぽけな、手っとり早
　　　　　　　　　　い、ご家庭にあって調法——といった代物
　　　　　　　　　　《しろもの》ばかりさ。そいつが手を変え
　　　　　　　　　　品を変えて、百ぺん千べん、いつ見ても種
　　　　　　　　　　は一つことの繰返しだ。そいつを見ると僕
　　　　　　　　　　は、モーパッサンみたいに、ワッと逃げ出
　　　　　　　　　　すんです。エッフェル塔の俗悪さがやりき
　　　　　　　　　　れなくなって、命からがら逃げ出したモー
　　　　　　　　　　パッサン（［＃割り注］訳注　その小説『
　　　　　　　　　　さすらい』参照［＃割り注終わり］）みた
　　　　　　　　　　いにね。

ソーリン　　　　　　劇場がないじゃ、話になるまい。

トレープレフ　　　　だから、新しい形式が必要なんですよ。新
　　　　　　　　　　形式がいるんで、もしそれがないんなら、
　　　　　　　　　　いっそ何にもないほうがいい。（時計を見
　　　　　　　　　　る）僕は、おっ母さんが好きです、とても
　　　　　　　　　　好きです。だが、あの人の生活は、なんぼ
　　　　　　　　　　なんでも酷《ひど》すぎる。しょっちゅう
　　　　　　　　　　、あの小説家のやつとべたべたしちゃ、の
　　　　　　　　　　べつ新聞に浮名をながしている。これにゃ
　　　　　　　　　　まったく閉口ですよ。時によると、人間の
　　　　　　　　　　悲しさで、僕だって人なみのエゴイズムが
　　　　　　　　　　、むらむらっと起きることもある。つまり
　　　　　　　　　　、うちのおっ母さんが有名な女優なのが、
　　　　　　　　　　くやしくなるんです。もし普通の女でいて
　　　　　　　　　　くれたら、僕もちっとは幸福だったろうに
　　　　　　　　　　な、ってね。ね伯父さん、これほど情けな
　　　　　　　　　　い、ばかげた境遇があるもんでしょうか。
　　　　　　　　　　おっ母さんの客間には、よく天下のお歴々
　　　　　　　　　　がずらり顔をならべたもんです——役者と
　　　　　　　　　　か、文士とかね。そのなかで僕一人だけが
　　　　　　　　　　、名も何もない雑魚《ざこ》なんだ。同席
　　　　　　　　　　を許してもらえるのも、僕があの人の息子
　　　　　　　　　　《むすこ》だからというだけのことに過ぎ
　　　　　　　　　　ん。僕は一体誰だ？　どこの何者だ？　大
　　　　　　　　　　学を三年で飛び出した。理由は、新聞や雑
　　　　　　　　　　誌の社告によくある、例の「さる外部事情
　　　　　　　　　　のため」（［＃割り注］訳注　当時の雑誌
　　　　　　　　　　などが、思想の弾圧のため発禁になった時
　　　　　　　　　　に使う慣用句［＃割り注終わり］）って奴
　　　　　　　　　　《やつ》でさ。しかも、これっぱかりの才
　　　　　　　　　　能もなし、一文だって金はなし、おまけに
　　　　　　　　　　旅券にゃ——キーエフの町人と書いてある
　　　　　　　　　　。なるほどうちの親父《おやじ》は、有名
　　　　　　　　　　な役者じゃあったが、元をただせばキーエ
　　　　　　　　　　フの町人に違いない。といったわけで、お
　　　　　　　　　　っ母さんの客間で、天下の名優や大作家れ
　　　　　　　　　　んが、仁慈の眼《まなこ》を僕にそそいで
　　　　　　　　　　くれるごとに、僕はまるで、相手の視線で
　　　　　　　　　　こっちの小っぽけさ加減を、計られてるみ
　　　　　　　　　　たいな気がした、——向うの気持を推量し
　　　　　　　　　　て、肩身の狭い思いをしたもんですよ……

ソーリン　　　　　　事のついでに、ちょっと聞かしてもらうが
　　　　　　　　　　、あの小説家は全体何者かね？　どうも得
　　　　　　　　　　体の知れん男だ。むっつり黙りこんでてな
　　　　　　　　　　。

トレープレフ　　　　あれは、頭のいい、さばさばした、それに
　　　　　　　　　　ちょいとその、メランコリックな男ですよ
　　　　　　　　　　。なかなかりっぱな人物でさ。まだ四十に
　　　　　　　　　　は間《ま》があるのに、その名は天下にと
　　　　　　　　　　どろいて、何から何まで結構ずくめのご身
　　　　　　　　　　分だ。……書くものはどうかと言うと……
　　　　　　　　　　さあ、なんと言ったらいいかなあ？　人好
　　　　　　　　　　きのする才筆じゃあるけれど……が、しか
　　　　　　　　　　し……トルストイやゾラが出たあと、トリ
　　　　　　　　　　ゴーリンを読む気にゃどうもね。

ソーリン　　　　　　ところでわたしは、文士というものが好き
　　　　　　　　　　でな。むかしはこれでも、あこがれの的が
　　　　　　　　　　二つあった。女房をもらうことと、文士に
　　　　　　　　　　なることなんだが、どっちも結局だめだっ
　　　　　　　　　　たな。そう。小っちゃな文士だっても、な
　　　　　　　　　　れりゃ面白かろうて、早い話がな。

トレープレフ　　　　（耳をすます）足音が聞える。……（伯父
　　　　　　　　　　を抱いて）僕は、あの人なしじゃ生きられ
　　　　　　　　　　ない。……あの足音までがすばらしい。…
　　　　　　　　　　…僕は、めちゃめちゃに幸福だ！　（足早
　　　　　　　　　　に、ニーナを迎えに行く。彼女登場）さあ
　　　　　　　　　　、可愛《かわい》い魔女が来た、僕の夢が
　　　　　　　　　　……

ニーナ　　　　　　　（興奮のていで）あたし、遅れなかったわ
　　　　　　　　　　ね。……ね、遅れやしないでしょう。……

トレープレフ　　　　（女の両手にキスしながら）ええ、大丈夫
　　　　　　　　　　、大丈夫……

ニーナ　　　　　　　一日じゅう心配だった、どきどきするくら
　　　　　　　　　　い！　父が出してはくれまいと、気が気じ
　　　　　　　　　　ゃなかったわ。……でも父は、今しがた継
　　　　　　　　　　母《はは》といっしょに出かけたの。空が
　　　　　　　　　　赤くって、月がもう出そうでしょう。で、
　　　　　　　　　　あたし、一生けんめい馬を追い立てて来た
　　　　　　　　　　の。（笑う）でも、嬉《うれ》しいわ。（
　　　　　　　　　　ソーリンの手を握りしめる）

ソーリン　　　　　　（笑って）どうやらお目《めめ》を、泣き
　　　　　　　　　　はらしてござる。……ほらほら！　悪い子
　　　　　　　　　　だ！

ニーナ　　　　　　　ううん、ちょっと。……だって、ほら、こ
　　　　　　　　　　んなに息がはずんでるんですもの。三十分
　　　　　　　　　　したら、あたし帰るわ、大急ぎなの。後生
　　　　　　　　　　だから引きとめないでね。ここへ来たこと
　　　　　　　　　　、父には内緒なの。

トレープレフ　　　　ほんとに、もう始める時刻だ。みんなを呼
　　　　　　　　　　んでこなくちゃ。

ソーリン　　　　　　では、わたしがちょっくら、とまあいった
　　　　　　　　　　次第でな。はいはい、ただ今。（右手へ行
　　　　　　　　　　きながら歌う）「フランスをさして帰る、
　　　　　　　　　　兵士のふたりづれ」（［＃割り注］訳注
　　　　　　　　　　ハイネの『ふたりの擲弾兵』より［＃割り
　　　　　　　　　　注終わり］）……（振返って）いつぞや、
　　　　　　　　　　まあこういった具合に歌いだしたらな、あ
　　　　　　　　　　る検事補のやつめが、こう言いおった——
　　　　　　　　　　「いや閣下、なかなか大した喉《のど》で
　　　　　　　　　　すな」……そこで先生、ちょいと考えて、
　　　　　　　　　　こう付け足したよ——「しかし……厭《い
　　　　　　　　　　や》なお声で」（笑って退場）

［＃ハイネ詩、シューマン曲『二人の擲弾兵』の楽譜（fig51860\_01.png、横490×縦109）入る］

ニーナ　　　　　　　父も継母《はは》も、あたしがここへくる
　　　　　　　　　　のは反対なの。ここは、ボヘミアンの巣窟
　　　　　　　　　　《そうくつ》だって……あたしが女優にで
　　　　　　　　　　もなりゃしまいかと、心配なのね。でもあ
　　　　　　　　　　たしは、ここの湖に惹《ひ》きつけられる
　　　　　　　　　　の、かもめみたいにね。……胸のなかは、
　　　　　　　　　　あなたのことでいっぱい。（あたりを見回
　　　　　　　　　　す）

トレープレフ　　　　僕たちきりですよ。

ニーナ　　　　　　　誰かいるみたいだわ……

トレープレフ　　　　いやしない。（接吻《せっぷん》）

ニーナ　　　　　　　これ、なんの木？

トレープレフ　　　　にれ［＃「にれ」に傍点］の木。

ニーナ　　　　　　　どうして、あんなに黒いのかしら？

トレープレフ　　　　もう晩だから、物がみんな黒く見えるので
　　　　　　　　　　す。そう急いで帰らないでください、後生
　　　　　　　　　　だから。

ニーナ　　　　　　　だめよ。

トレープレフ　　　　じゃ、僕のほうから行ったらどう、ニーナ
　　　　　　　　　　？　僕は夜どおし庭に立って、あなたの部
　　　　　　　　　　屋の窓を見てるんだ。

ニーナ　　　　　　　だめ、番人にみつかるわ。それにトレゾー
　　　　　　　　　　ル《うちのいぬ》は、まだお馴染《なじみ
　　　　　　　　　　》じゃないから、きっと吠えてよ。

トレープレフ　　　　僕は君が好きだ。

ニーナ　　　　　　　シーッ。

トレープレフ　　　　（足音を耳にして）誰だ？　ヤーコフ、お
　　　　　　　　　　前か？

ヤーコフ　　　　　　（仮舞台のかげで）へえ、さようで。

トレープレフ　　　　みんな持ち場についてくれ。時刻だ。月は
　　　　　　　　　　出たかい？

ヤーコフ　　　　　　へえ、さようで。

トレープレフ　　　　アルコールの用意はいいね？　硫黄《いお
　　　　　　　　　　う》もあるね？　紅い目玉が出たら、硫黄
　　　　　　　　　　の臭《にお》いをさせるんだ。（ニーナに
　　　　　　　　　　）さ、いらっしゃい、支度はすっかりでき
　　　　　　　　　　ています。……興奮《あが》ってますね？
　　　　　　　　　　……

ニーナ　　　　　　　ええ、とても。あなたのママは——平気で
　　　　　　　　　　すわ、こわくなんかない。でも、トリゴー
　　　　　　　　　　リンが来てるでしょう。……あの人の前で
　　　　　　　　　　芝居をするのは、あたしこわいの、恥ずか
　　　　　　　　　　しいの。……有名な作家ですもの。……若
　　　　　　　　　　いかた？

トレープレフ　　　　ええ。

ニーナ　　　　　　　あの人の小説、すばらしいわ！

トレープレフ　　　　（冷やかに）知らないな、読んでないから
　　　　　　　　　　。

ニーナ　　　　　　　あなたの戯曲、なんだか演《や》りにくい
　　　　　　　　　　わ。生きた人間がいないんだもの。

トレープレフ　　　　生きた人間か！　人生を描くには、あるが
　　　　　　　　　　ままでもいけない、かくあるべき姿でもい
　　　　　　　　　　けない。自由な空想にあらわれる形でなく
　　　　　　　　　　ちゃ。

ニーナ　　　　　　　あなたの戯曲は、動きが少なくて、読むだ
　　　　　　　　　　けなんですもの。戯曲というものは、やっ
　　　　　　　　　　ぱり恋愛がなくちゃいけないと、あたしは
　　　　　　　　　　思うわ……（ふたり、仮舞台のかげへ去る
　　　　　　　　　　）

［＃ここから３字下げ］

ポリーナとドールン登場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ポリーナ　　　　　　しめっぽくなってきたわ。引返して、オー
　　　　　　　　　　バーシューズをはいてらしたら？

ドールン　　　　　　僕は暑いんです。

ポリーナ　　　　　　それが、医者の不養生よ。頑固《がんこ》
　　　　　　　　　　というものよ。職掌がら、しめっぽい空気
　　　　　　　　　　がご自分に毒なことぐらい、百も承知でい
　　　　　　　　　　らっしゃるくせに、まだ私をやきもきさせ
　　　　　　　　　　たいのねえ。ゆうべだって、わざと一晩じ
　　　　　　　　　　ゅう、テラスに出てらしたり……

ドールン　　　　　　（口ずさむ）「言うなかれ、君、青春を失
　　　　　　　　　　いしと」（［＃割り注］訳注　ネクラーソ
　　　　　　　　　　フの詩の一節［＃割り注終わり］）

ポリーナ　　　　　　あなたは、アルカージナさんと話に身が入
　　　　　　　　　　りすぎて……つい寒いのも忘れてらしたの
　　　　　　　　　　ね。白状なさい、あのひと、お好きなのね
　　　　　　　　　　……

ドールン　　　　　　僕は五十五ですよ。

ポリーナ　　　　　　そんなこと——男の場合、年寄りのうちに
　　　　　　　　　　、はいらないわ。まだそのとおりの男前な
　　　　　　　　　　んだから、結構おんなに持てますわ。

ドールン　　　　　　そこで、どうしろとおっしゃる？

ポリーナ　　　　　　相手が女優さんだと、いつだって平｜蜘蛛
　　　　　　　　　　《ぐも》みたい。いつだってね！

ドールン　　　　　　（口ずさむ）「われふたたび、おんみの前
　　　　　　　　　　に、恍惚《こうこつ》として立つ」（［＃
　　　　　　　　　　割り注］訳注　ネクラーソフの詩の一節［
　　　　　　　　　　＃割り注終わり］）……よしんば世間が、
　　　　　　　　　　役者をひいきにして、商人なんかと別扱い
　　　　　　　　　　にするとしても、まあ理の当然ですな。そ
　　　　　　　　　　れが——理想主義というもので。

ポリーナ　　　　　　女のひとが、いつもあなたに惚れこんで、
　　　　　　　　　　首っ玉にぶらさがってきた。これもその、
　　　　　　　　　　理想主義ですの？

ドールン　　　　　　（肩をすくめて）へえね？　婦人がたは、
　　　　　　　　　　結構僕を尊重してくれましたよ。それも主
　　　　　　　　　　として、腕のいい医者としてでしたな。十
　　　　　　　　　　年、十五年まえには、ご承知のとおりこの
　　　　　　　　　　僕も、郡内でたった一人の、産科医らしい
　　　　　　　　　　産科医でしたからね。それに僕は、実直な
　　　　　　　　　　男だったし。

ポリーナ　　　　　　（男の手をとらえる）ねえ、あなた！

ドールン　　　　　　シッ、ひとが来ます。

［＃ここから３字下げ］

アルカージナがソーリンと腕を組んで、つづいてトリゴーリン、シャムラーエフ、メドヴェージェンコ、マーシャが登場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

シャムラーエフ　　　〔一八〕七三年のポルタヴァの定期市《い
　　　　　　　　　　ち》で、あの女優はすばらしい芸を見せま
　　　　　　　　　　したっけ。ただ驚嘆の一語に尽きます！
　　　　　　　　　　名人芸でしたな！　それから、これも次手
　　　　　　　　　　《ついで》に伺いたいですが、喜劇役者の
　　　　　　　　　　チャージン——あのパーヴェル・セミョー
　　　　　　　　　　ヌィチですが、あれは今どこにいますかな
　　　　　　　　　　？　ラスプリューエフ（［＃割り注］訳注
　　　　　　　　　　　スホーヴォ・コブイリンの喜劇『クレチ
　　　　　　　　　　ンスキイの結婚』中の人物［＃割り注終わ
　　　　　　　　　　り］）を演《や》らせたら天下無類でね、
　　　　　　　　　　サドーフスキイ（［＃割り注］訳注　モス
　　　　　　　　　　クワ小劇場の名優、一八七二年死［＃割り
　　　　　　　　　　注終わり］）より上でしたな。いやまった
　　　　　　　　　　くですよ、奥さん。あわれ彼、今いずくに
　　　　　　　　　　か在る？

アルカージナ　　　　あなたはいつも、大昔の人のことばかりお
　　　　　　　　　　訊《き》きになるのね。わたしが知るもん
　　　　　　　　　　ですか！　（腰をおろす）

シャムラーエフ　　　（ふーっとため息をして）パーシカ・チャ
　　　　　　　　　　ージン！　今じゃあんな役者はいない。舞
　　　　　　　　　　台の下落ですな、アルカージナさん！　昔
　　　　　　　　　　は亭々《ていてい》たる大木ぞろいだった
　　　　　　　　　　ものだが、今はもう切株ばかしでね。

ドールン　　　　　　いかにも、光輝さんぜんたる名優は少なく
　　　　　　　　　　なった。だがその代り、中どころの役者は
　　　　　　　　　　、ずっとよくなったです。

シャムラーエフ　　　お説には賛成しかねますな。もっとも、こ
　　　　　　　　　　れは趣味の問題で。｜De gustib
　　　　　　　　　　us aut bene, aut ni
　　　　　　　　　　hil《みるひとのこころごころに》 で
　　　　　　　　　　すて。（［＃割り注］訳注　この引用句は
　　　　　　　　　　、ラテンのことわざを二つ、つきまぜたお
　　　　　　　　　　かしみがある［＃割り注終わり］）

［＃ここから３字下げ］

トレープレフ、仮舞台のかげから登場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

アルカージナ　　　　（息子に）ねえ、うちの坊っちゃん、一体
　　　　　　　　　　いつ幕があくの？

トレープレフ　　　　もうすぐです。ざんじご猶予《ゆうよ》。

アルカージナ　　　　（『ハムレット』のセリフで）おお、ハム
　　　　　　　　　　レット、もう何も言うてたもるな！　そな
　　　　　　　　　　たの語《ことば》で初めて見たこの魂のむ
　　　　　　　　　　さくろしさ。何《なん》ぼうしても落ちぬ
　　　　　　　　　　程《ほど》に、黒々と沁込《しみこ》んだ
　　　　　　　　　　心の穢《けが》れ！　（［＃割り注］訳注
　　　　　　　　　　　第三幕第四場逍遥の訳による［＃割り注
　　　　　　　　　　終わり］）

トレープレフ　　　　（『ハムレット』のセリフで）いや、膏《
　　　　　　　　　　あぶら》ぎった汗臭い臥床《ふしど》に寝
　　　　　　　　　　《まろ》びたり、豕《いのこ》同然の彼奴
　　　　　　　　　　《あいつ》と睦言《むつごと》……（［＃
　　　　　　　　　　割り注］訳注　おなじく。ただしこのくだ
　　　　　　　　　　り、チェーホフはかなり上品に言い直され
　　　　　　　　　　たロシア訳を踏襲している。いま訳者は、
　　　　　　　　　　シェイクスピアの原意に近い逍遥訳を採っ
　　　　　　　　　　た［＃割り注終わり］）

［＃ここから３字下げ］

仮舞台のかげで角笛の音。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

トレープレフ　　　　さあ皆さん、始まります。静粛にねがいま
　　　　　　　　　　す。（間）では、まず私から。（細身の杖
　　　　　　　　　　《つえ》を突き鳴らし、大声で）おお、な
　　　　　　　　　　んじら、年ふりし由緒《ゆいしょ》ある影
　　　　　　　　　　たちよ。夜ともなれば、この湖の上をさま
　　　　　　　　　　よう影たちよ。わたしたちを寝入らせてく
　　　　　　　　　　れ。そして、二十万年のちの有様を、夢に
　　　　　　　　　　見させてくれ！

ソーリン　　　　　　二十万年したら、なんにもないさ。

トレープレフ　　　　だから、そのないところを見させるんです
　　　　　　　　　　よ。

アルカージナ　　　　どうともご随意に。わたしたちは寝るから
　　　　　　　　　　。

［＃ここから３字下げ］

幕があがって、湖の景がひらける。月は地平線をはなれ、水に反映している。大きな岩の上に、全身白衣のニーナが坐《すわ》っている。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ニーナ　　　　　　　人も、ライオンも、鷲《わし》も、雷鳥も
　　　　　　　　　　、角を生《は》やした鹿《しか》も、鵞鳥
　　　　　　　　　　《がちょう》も、蜘蛛《くも》も、水に棲
　　　　　　　　　　《す》む無言の魚《さかな》も、海に棲む
　　　　　　　　　　ヒトデも、人の眼に見えなかった微生物も
　　　　　　　　　　、——つまりは一切の生き物、生きとし生
　　　　　　　　　　けるものは、悲しい循環《めぐり》をおえ
　　　　　　　　　　て、消え失《う》せた。……もう、何千世
　　　　　　　　　　紀というもの、地球は一つとして生き物を
　　　　　　　　　　乗せず、あの哀れな月だけが、むなしく灯
　　　　　　　　　　火《あかり》をともしている。今は牧場《
　　　　　　　　　　まきば》に、寝ざめの鶴《つる》の啼《な
　　　　　　　　　　》く音《ね》も絶えた。菩提樹《ぼだいじ
　　　　　　　　　　ゅ》の林に、こがね虫の音《ね》ずれもな
　　　　　　　　　　い。寒い、寒い、寒い。うつろだ、うつろ
　　　　　　　　　　だ、うつろだ。不気味だ、不気味だ、不気
　　　　　　　　　　味だ。（間）あらゆる生き物のからだは、
　　　　　　　　　　灰となって消え失せた。永遠の物質が、そ
　　　　　　　　　　れを石に、水に、雲に、変えてしまったが
　　　　　　　　　　、生き物の霊魂だけは、溶《と》け合わさ
　　　　　　　　　　って一つになった。世界に遍在する一つの
　　　　　　　　　　霊魂——それがわたしだ……このわたしだ
　　　　　　　　　　。……わたしの中には、アレクサンドル大
　　　　　　　　　　王の魂もある。シーザーのも、シェイクス
　　　　　　　　　　ピアのも、ナポレオンのも、最後に生き残
　　　　　　　　　　った蛭《ひる》のたましいも、のこらずあ
　　　　　　　　　　るのだ。わたしの中には、人間の意識が、
　　　　　　　　　　動物の本能と溶け合っている。で、わたし
　　　　　　　　　　は、何もかも、残らずみんな、覚えている
　　　　　　　　　　。わたしは一つ一つの生活を、また新しく
　　　　　　　　　　生き直している。

［＃ここから３字下げ］

鬼火があらわれる。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

アルカージナ　　　　（小声で）なんだかデカダンじみてるね。

トレープレフ　　　　（哀願に非難をまじえて）お母さん！

ニーナ　　　　　　　わたしは孤独だ。百年に一度、わたしは口
　　　　　　　　　　をあけて物を言う。そしてわたしの声は、
　　　　　　　　　　この空虚《うつろ》のなかに、わびしくひ
　　　　　　　　　　びくが、誰ひとり聞く者はない。……お前
　　　　　　　　　　たち、青い鬼火も、聞いてはくれない。…
　　　　　　　　　　…夜あけ前、沼の毒気から生れたお前たち
　　　　　　　　　　は、朝日のさすまでさまよい歩くが、思想
　　　　　　　　　　もなければ意志もない、生命のそよぎもあ
　　　　　　　　　　りはしない。お前のなかに、命の目ざめる
　　　　　　　　　　のを恐れて、永遠の物質の父なる悪魔は、
　　　　　　　　　　分秒の休みもなしに、石や水のなかと同じ
　　　　　　　　　　く、お前のなかにも、原子の入れ換えをし
　　　　　　　　　　ている。だからお前は、絶えず流転《るて
　　　　　　　　　　ん》をかさねている。宇宙のなかで、常住
　　　　　　　　　　不変のものがあれば、それはただ霊魂だけ
　　　　　　　　　　だ。（間）うつろな深い井戸へ投げこまれ
　　　　　　　　　　た囚《とら》われびとのように、わたしは
　　　　　　　　　　居場所も知らず、行く末のことも知らない
　　　　　　　　　　。わたしにわかっているのは、ただ、物質
　　　　　　　　　　の力の本源たる悪魔を相手の、たゆまぬ激
　　　　　　　　　　しい戦いで、結局わたしが勝つことになっ
　　　　　　　　　　て、やがて物質と霊魂とが美しい調和のな
　　　　　　　　　　かに溶け合わさって、世界を統《す》べる
　　　　　　　　　　一つの意志の王国が出現する、ということ
　　　　　　　　　　だけだ。しかもそれは、千年また千年と、
　　　　　　　　　　永い永い歳《とし》つきが次第に流れて、
　　　　　　　　　　あの月も、きららかなシリウスも、この地
　　　　　　　　　　球も、すべて塵《ちり》と化したあとのこ
　　　　　　　　　　とだ。……その時がくるまでは、怖《おそ
　　　　　　　　　　》ろしいことばかりだ。……（間。湖の奥
　　　　　　　　　　に、紅《あか》い点が二つあらわれる）そ
　　　　　　　　　　ら、やって来た、わたしの強敵が、悪魔が
　　　　　　　　　　。見るも怖ろしい、あの火のような二つの
　　　　　　　　　　目……

アルカージナ　　　　硫黄の臭《にお》いがするわね。こんな必
　　　　　　　　　　要があるの？

トレープレフ　　　　ええ。

アルカージナ　　　　（笑って）なるほど、効果だね。

トレープレフ　　　　お母さん！

ニーナ　　　　　　　人間がいないので、退屈なのだ……

ポリーナ　　　　　　（ドールンに）まあまあ、帽子をぬいで！
　　　　　　　　　　　さあさ、おかぶりなさい、風邪《かぜ》
　　　　　　　　　　を引きますよ。

アルカージナ　　　　それはね、ドクトルが、永遠の物質の父な
　　　　　　　　　　る悪魔に、脱帽なすったのさ。

トレープレフ　　　　（カッとなって、大声で）芝居はやめだ！
　　　　　　　　　　　沢山だ！　幕をおろせ！

アルカージナ　　　　お前、何を怒るのさ？

トレープレフ　　　　沢山です！　幕だ！　幕をおろせったら！
　　　　　　　　　　　（とんと足ぶみして）幕だ！　（幕おり
　　　　　　　　　　る）失礼しました！　芝居を書いたり、上
　　　　　　　　　　演したりするのは、少数の選ばれた人たち
　　　　　　　　　　のすることだということを、つい忘れてい
　　　　　　　　　　たもんで。僕はひとの畠《はたけ》を荒し
　　　　　　　　　　たんだ！　僕が……いや、僕なんか……（
　　　　　　　　　　まだ何か言いたいが、片手を振って、左手
　　　　　　　　　　へ退場）

アルカージナ　　　　どうしたんだろう、あの子は？

ソーリン　　　　　　なあ、おっ母さん、こりゃいけないよ。若
　　　　　　　　　　い者の自尊心は、大事にしてやらなけりゃ
　　　　　　　　　　。

アルカージナ　　　　わたし、あの子に何を言ったかしら？

ソーリン　　　　　　だって、恥をかかしたじゃないか。

アルカージナ　　　　あの子は、これはほんの茶番劇でと、自分
　　　　　　　　　　で前触れしていましたよ。だからこっちも
　　　　　　　　　　、茶番のつもりでいたんだけれど。

ソーリン　　　　　　まあさ、それにしたって……

アルカージナ　　　　ところが、いざ蓋《ふた》をあけてみたら
　　　　　　　　　　、大層な力作だったわけなのね！　やれや
　　　　　　　　　　れ！　あの子が、今夜の芝居を仕組んで、
　　　　　　　　　　硫黄の臭いをぷんぷんさせたのも、茶番ど
　　　　　　　　　　ころか、一大デモンストレーションだった
　　　　　　　　　　。……あの子はわたしたちに、戯曲の作り
　　　　　　　　　　方や演《や》り方を、教えてくれる気だっ
　　　　　　　　　　たんだわ。早い話が、ま、うんざりします
　　　　　　　　　　よ。何かといえば、一々わたしに突っかか
　　　　　　　　　　ったり、当てこすったり、そりゃまああの
　　　　　　　　　　子の勝手だけれど、これじゃ誰にしたって
　　　　　　　　　　オクビが出るでしょうよ！　わがままな、
　　　　　　　　　　自惚《うぬぼ》れの強い子だこと。

ソーリン　　　　　　あの子は、お前のつれづれを慰めようと思
　　　　　　　　　　ったんだよ。

アルカージナ　　　　おや、そう？　そんなら、何か当り前の芝
　　　　　　　　　　居を出せばいいのに、なぜ選《よ》りに選
　　　　　　　　　　って、あんなデカダンのタワ言を聴《き》
　　　　　　　　　　かせようとしたんだろう。茶番のつもりな
　　　　　　　　　　ら、タワ言でもなんでも聴いてやりましょ
　　　　　　　　　　うけれど、あれじゃ野心満々、——芸術に
　　　　　　　　　　新形式をもたらそうとか、一新紀元を画そ
　　　　　　　　　　うとか、大した意気ごみじゃありませんか
　　　　　　　　　　。わたしに言わせれば、あんなもの、新形
　　　　　　　　　　式でもなんでもありゃしない。ただ根性ま
　　　　　　　　　　がりなだけですよ。

トリゴーリン　　　　人間誰しも、書きたいことを、書けるよう
　　　　　　　　　　に書く。

アルカージナ　　　　そんなら勝手に、書きたいことを、書ける
　　　　　　　　　　ように書くがいいわ。ただ、わたしには、
　　　　　　　　　　さわらずにおいてもらいたいのよ。

ドールン　　　　　　ジュピターよ、なんじは怒《いか》れり、
　　　　　　　　　　か……（［＃割り注］訳注　つづいて「さ
　　　　　　　　　　れば非はなんじにあり」というラテンのこ
　　　　　　　　　　とわざ。ドールンはこの句で、暗にアルカ
　　　　　　　　　　ージナを諷したのであろうが、彼女は気づ
　　　　　　　　　　かずに——［＃割り注終わり］）

アルカージナ　　　　わたしはジュピターじゃない、女ですよ。
　　　　　　　　　　（タバコを吸いだす）あたし、怒《おこ》
　　　　　　　　　　ってなんかいません。ただね、若い者があ
　　　　　　　　　　んな退屈な暇つぶしをしているのが、歯が
　　　　　　　　　　ゆいだけですよ。あの子に恥をかかすつも
　　　　　　　　　　りはなかったの。

メドヴェージェンコ　何がなんでも、霊魂と物質を区別する根拠
　　　　　　　　　　はないです。そもそも霊魂にしてからが、
　　　　　　　　　　物質の原子の集合なのかも知れんですから
　　　　　　　　　　ね。（語気をつよめて、トリゴーリンに）
　　　　　　　　　　で一つ、どうでしょう、われわれ教員仲間
　　　　　　　　　　がどんな暮しをしているか——それをひと
　　　　　　　　　　つ戯曲に書いて、舞台で演じてみたら。辛
　　　　　　　　　　《つら》いです、じつに辛い生活です！

アルカージナ　　　　ごもっともね。でももう、戯曲や原子のは
　　　　　　　　　　なしは、やめにしましょうよ。こんな好《
　　　　　　　　　　い》い晩なんですもの！　聞えて、ほら、
　　　　　　　　　　歌ってるのが？　（耳をすます）いいわ、
　　　　　　　　　　とても！

ポリーナ　　　　　　向う岸ですわ。（間）

アルカージナ　　　　（トリゴーリンに）ここへお掛けなさいな
　　　　　　　　　　。十年か十五年まえ、この湖じゃ、音楽や
　　　　　　　　　　合唱がほとんど毎晩、ひっきりなしに聞え
　　　　　　　　　　たものですわ。この岸ぞいに、地主屋敷が
　　　　　　　　　　六つもあってね。忘れもしない、にぎやか
　　　　　　　　　　な笑い声、ざわめき、猟銃のひびき、それ
　　　　　　　　　　にしょっちゅう、ロマンスまたロマンスで
　　　　　　　　　　ね。……そのころ、その六つの屋敷の花形
　　　　　　　　　　《ジュヌ・プルミエ》で、人気の的だった
　　　　　　　　　　のは、そら、ご紹介しますわ（ドールンを
　　　　　　　　　　あごでしゃくって）——ドクトル・ドール
　　　　　　　　　　ンでしたの。今でもこのとおりの男前です
　　　　　　　　　　もの、そのころときたら、それこそ当るべ
　　　　　　　　　　からざる勢いでしたよ。それはそうと、そ
　　　　　　　　　　ろそろ気が咎《とが》めてきた。可哀《か
　　　　　　　　　　わい》そうに、なんだってわたし、うちの
　　　　　　　　　　坊やに恥をかかしたのかしら？　心配だわ
　　　　　　　　　　。（大声で）コースチャ！　せがれや！
　　　　　　　　　　コースチャ！

マーシャ　　　　　　あたし行って、捜してみましょう。

アルカージナ　　　　ええ、お願い。

マーシャ　　　　　　（左手へ行く）ほおい！　トレープレフさ
　　　　　　　　　　ん！……ほおい！　（退場）

ニーナ　　　　　　　（仮舞台のかげから出てきながら）もう続
　　　　　　　　　　きはないらしいから、あたし出て行っても
　　　　　　　　　　いいのね。今晩は！　（アルカージナおよ
　　　　　　　　　　びポリーナとキスを交す）

ソーリン　　　　　　ブラボー！　ブラボー！

アルカージナ　　　　ブラボー！　ブラボー！　みんなで、感心
　　　　　　　　　　していたんですよ。それだけの器量と、あ
　　　　　　　　　　んなすばらしい声をしながら、田舎に引っ
　　　　　　　　　　こんでらっしゃるなんて罪ですよ。きっと
　　　　　　　　　　天分がおありのはずよ。ね、いいこと？
　　　　　　　　　　舞台に立つのは、あなたの義務よ！

ニーナ　　　　　　　まあ、あたしの夢もそうなの！　（ため息
　　　　　　　　　　をついて）でも、実現しっこありませんわ
　　　　　　　　　　。

アルカージナ　　　　そんなことあるもんですか。さ、ご紹介し
　　　　　　　　　　ましょう——こちらはトリゴーリンさん、
　　　　　　　　　　ボリース・アレクセーエヴィチ。

ニーナ　　　　　　　まあ、うれしい……（どぎまぎして）いつ
　　　　　　　　　　もお作は……

アルカージナ　　　　（彼女を自分のそばに坐らせながら）そう
　　　　　　　　　　固くならないでもいいのよ。有名な人だけ
　　　　　　　　　　れど、気持のさっぱりしたかたですからね
　　　　　　　　　　。ほら、あちらが却《かえ》って、あがっ
　　　　　　　　　　てらっしゃるわ。

ドールン　　　　　　もう幕をあげてもいいでしょうな、どうも
　　　　　　　　　　気づまりでいかん。

シャムラーエフ　　　（大声で）ヤーコフ、ちょっくら一つ、幕
　　　　　　　　　　をあげてくれんか！　（幕あがる）

ニーナ　　　　　　　（トリゴーリンに）ね、いかが、妙な芝居
　　　　　　　　　　でしょう？

トリゴーリン　　　　さっぱりわからなかったです。しかし、面
　　　　　　　　　　白く拝見しました。あなたの演技は、じつ
　　　　　　　　　　に真剣でしたね。それに装置も、なかなか
　　　　　　　　　　結構で。（間）この湖には、魚がどっさり
　　　　　　　　　　いるでしょうな。

ニーナ　　　　　　　ええ。

トリゴーリン　　　　僕は釣りが好きでしてね。夕方、岸に坐り
　　　　　　　　　　こんで、じっと浮子《うき》を見てるほど
　　　　　　　　　　楽しいことは、ほかにありませんね。

ニーナ　　　　　　　でも、いったん創作の楽しみを味わった方
　　　　　　　　　　には、ほかの楽しみなんか無くなるんじゃ
　　　　　　　　　　ないかしら。

アルカージナ　　　　（笑い声を立てて）そんなこと言わないほ
　　　　　　　　　　うがいいわ。このかた、ひとから持ちあげ
　　　　　　　　　　られると、尻《しり》もちをつく癖がおあ
　　　　　　　　　　りなの。

シャムラーエフ　　　忘れもしませんが、いつぞやモスクワのオ
　　　　　　　　　　ペラ座でね、有名なあのシルヴァ（［＃割
　　　　　　　　　　り注］訳注　イタリアの歌手［＃割り注終
　　　　　　　　　　わり］）が、うんと低いドの音を出したん
　　　　　　　　　　です。ところがその時、折も折ですな、ク
　　　　　　　　　　レムリンの合唱隊のバスうたいが一人、天
　　　　　　　　　　井｜桟敷《さじき》に陣どって見物してた
　　　　　　　　　　んですが、とつぜん藪《やぶ》から棒に、
　　　　　　　　　　いやどうも驚くまいことか、その天井桟敷
　　　　　　　　　　から、「ブラボー、シルヴァ！」と、やっ
　　　　　　　　　　てのけた——それが完全に一オクターブ低
　　　　　　　　　　いやつでね。……まず、こんな具合、——
　　　　　　　　　　（低いバスで）ブラボー、シルヴァ。……
　　　　　　　　　　満場シーンとしてしまいましたよ。（間）

ドールン　　　　　　静寂《しじま》の天使とびすぎぬ。（［＃
　　　　　　　　　　割り注］訳注　一座が急にシーンとしたと
　　　　　　　　　　きに言うことば［＃割り注終わり］）

ニーナ　　　　　　　わたし、行かなくちゃ。さようなら。

アルカージナ　　　　どこへいらっしゃるの？　こんなに早くか
　　　　　　　　　　ら？　放しちゃあげませんよ。

ニーナ　　　　　　　パパが待ってますから。

アルカージナ　　　　なんてパパでしょうね、ほんとに……（キ
　　　　　　　　　　スを交す）じゃ、仕方がないわ。お帰しす
　　　　　　　　　　るの、ほんとに残念だけれど。

ニーナ　　　　　　　わたしだって、おいとまするの、どんなに
　　　　　　　　　　辛いかわかりませんわ！

アルカージナ　　　　誰かお送りするといいんだけれど、心配よ
　　　　　　　　　　。

ニーナ　　　　　　　（おどおどして）まあそんな、いいんです
　　　　　　　　　　の！

ソーリン　　　　　　（哀願するように彼女に）もっと、いてく
　　　　　　　　　　ださいよ！

ニーナ　　　　　　　駄目《だめ》なんですの、ソーリンさん。

ソーリン　　　　　　せめて一時間——とまあいった次第でね。
　　　　　　　　　　いいじゃありませんか、ほんとに……

ニーナ　　　　　　　（ちょっと考えて、涙声で）いけませんわ
　　　　　　　　　　！　（握手して、足早に退場）

アルカージナ　　　　気の毒な娘さんだこと、まったく。人の話
　　　　　　　　　　だと、あの子の母親が亡《な》くなる前、
　　　　　　　　　　莫大《ばくだい》な財産を一文のこらず、
　　　　　　　　　　すっかりご主人の名義に書きかえたんです
　　　　　　　　　　って。それを今度はあの父親が、後添いの
　　　　　　　　　　名義にしてしまったもので、今じゃあの子
　　　　　　　　　　、はだか同然の身の上なのよ。ひどい話で
　　　　　　　　　　すわ。

ドールン　　　　　　さよう、あの子の親父《おやじ》さんは相
　　　　　　　　　　当な人でなしでね、一言の弁解の余地もあ
　　　　　　　　　　りませんや。

ソーリン　　　　　　（冷えた両手をこすりながら）われわれも
　　　　　　　　　　もう行こうじゃありませんか、皆さん。だ
　　　　　　　　　　いぶじめじめしてきたわい。わたしゃ、脚
　　　　　　　　　　《あし》がずきずきする。

アルカージナ　　　　あんたの脚は、まるで木で作ったみたい。
　　　　　　　　　　歩くのもやっとなのね。さ、参りましょう
　　　　　　　　　　、みじめなお爺《じい》さん。（彼の腕を
　　　　　　　　　　ささえる）

シャムラーエフ　　　（妻に片手をさしのべて）マダーム？

ソーリン　　　　　　ほら、また犬が吠《ほ》えている。（シャ
　　　　　　　　　　ムラーエフに）お願いだが、なあシャムラ
　　　　　　　　　　ーエフさん、あの犬を放してやるように言
　　　　　　　　　　ってくださらんか。

シャムラーエフ　　　駄目ですな、ソーリンさん、穀倉に泥棒が
　　　　　　　　　　はいると困りますからな。なにしろわたし
　　　　　　　　　　のキビが納めてあるんでね。（並んで歩い
　　　　　　　　　　ているメドヴェージェンコに）完全に一オ
　　　　　　　　　　クターブ低いやつでね、「ブラボー、シル
　　　　　　　　　　ヴァ！」それが君、専門の歌手じゃなくて
　　　　　　　　　　、たかが教会の歌うたいなんですからね。

メドヴェージェンコ　給料はどれくらいでしょうかね、クレムリ
　　　　　　　　　　ンあたりの歌うたいだと？

［＃ここから３字下げ］

ドールンのほか一同退場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ドールン　　　　　　（ひとり）ひょっとすると、おれは何にも
　　　　　　　　　　わからんのか、それとも気がちがったのか
　　　　　　　　　　も知れんが、とにかくあの芝居は気に入っ
　　　　　　　　　　たよ。あれには、何かがある。あの娘が孤
　　　　　　　　　　独のことを言いだした時や、やがて悪魔の
　　　　　　　　　　紅《あか》い目玉があらわれた時にゃ、お
　　　　　　　　　　れは興奮して手がふるえたっけ。新鮮で、
　　　　　　　　　　素朴だ。……ほう、先生やって来たらしい
　　　　　　　　　　ぞ。なるべく気の引立つようなことを言っ
　　　　　　　　　　てやりたいものだ。

トレープレフ　　　　（登場）もう誰もいない。

ドールン　　　　　　僕がいます。

トレープレフ　　　　僕を庭じゅう捜しまわってるんだ、あのマ
　　　　　　　　　　ーシャのやつ。やりきれない女だ。

ドールン　　　　　　ねえトレープレフ君、僕は君の芝居が、す
　　　　　　　　　　っかり気に入っちまった。ちょいとこう風
　　　　　　　　　　変りで、しかも終りのほうは聞かなかった
　　　　　　　　　　けれど、とにかく印象は強烈ですね。君は
　　　　　　　　　　天分のある人だ、ずっと続けてやるんです
　　　　　　　　　　ね。

［＃ここから３字下げ］

トレープレフはぎゅっと相手の手を握り、いきなり抱きつく。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ドールン　　　　　　ひゅッ、なんて神経質な。涙をためたりし
　　　　　　　　　　てさ。……僕の言いたいのはね、いいです
　　　　　　　　　　か——君は抽象観念の世界にテーマを仰い
　　　　　　　　　　だですね。これは飽《あ》くまで正しい。
　　　　　　　　　　なぜなら、芸術上の作品というものは必ず
　　　　　　　　　　、何ものか大きな思想を表現すべきものだ
　　　　　　　　　　からです。真剣なものだけが美しい。なん
　　　　　　　　　　て蒼《あお》い顔をしてるの！

トレープレフ　　　　じゃあなたは——続けろと言うんですね？

ドールン　　　　　　そう。……しかしね、重要な、永遠性のあ
　　　　　　　　　　ることだけを書くんですな。君も知っての
　　　　　　　　　　とおり、僕はこれまでの生涯を、いろいろ
　　　　　　　　　　変化をつけて、風情《ふぜい》を失わずに
　　　　　　　　　　送ってきた。僕は満足ですよ。だが、まん
　　　　　　　　　　いち僕が、芸術家が創作にあたって味わう
　　　　　　　　　　ような精神の昂揚《こうよう》を、ひょっ
　　　　　　　　　　と一度でも味わうことができたとしたら、
　　　　　　　　　　僕はあえて自分をくるんでいる物質的な上
　　　　　　　　　　《うわ》っ面《つら》や、それにくっつい
　　　　　　　　　　ている一切を軽蔑《けいべつ》して、この
　　　　　　　　　　地上からスーッと舞いあがったに相違ない
　　　　　　　　　　な。

トレープレフ　　　　お話中ですが、ニーナさんはどこでしょう
　　　　　　　　　　？

ドールン　　　　　　それに、もう一つ大事なのは、作品には明
　　　　　　　　　　瞭《めいりょう》な、ある決った思想がな
　　　　　　　　　　ければならんということだ。なんのために
　　　　　　　　　　書くのか、それをちゃんと知っていなけれ
　　　　　　　　　　ばならん。でなくて、一定の目当てなしに
　　　　　　　　　　、風景でも賞しながら道を歩いて行ったら
　　　　　　　　　　、君は迷子になるし、われとわが才能で身
　　　　　　　　　　を滅ぼすことになる。

トレープレフ　　　　（じれったそうに）どこにいるんです。ニ
　　　　　　　　　　ーナさんは？

ドールン　　　　　　うちへ帰ったですよ。

トレープレフ　　　　（絶望的に）ああ、どうしよう？　僕はあ
　　　　　　　　　　の人に会いたいんだ。……ぜひ会わなくち
　　　　　　　　　　ゃ。これから行ってこよう……

［＃ここから３字下げ］

マーシャ登場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ドールン　　　　　　（トレープレフに）まあ落着きたまえ、君
　　　　　　　　　　。

トレープレフ　　　　とにかく行ってきます。行かなくちゃなら
　　　　　　　　　　んのです。

マーシャ　　　　　　うちへおはいりになって、ねトレープレフ
　　　　　　　　　　さん。お母さまがお待ちかねよ。心配して
　　　　　　　　　　らっしゃるわ。

トレープレフ　　　　そう言ってください、ぼくは出かけたって
　　　　　　　　　　。君たちみんなも、どうぞ僕をほっといて
　　　　　　　　　　くれたまえ！　ほっといて！　あとをつけ
　　　　　　　　　　回さないでさ！

ドールン　　　　　　まあまあまあ、君……そんな滅茶《めちゃ
　　　　　　　　　　》な。……いけないなあ。

トレープレフ　　　　（涙声で）さようなら、ドクトル。感謝し
　　　　　　　　　　ます……（退場）

ドールン　　　　　　（ため息をついて）若い、若いなあ！

マーシャ　　　　　　ほかに言いようがなくなると、みなさんお
　　　　　　　　　　っしゃるのね——若い、若いって……（か
　　　　　　　　　　ぎタバコをかぐ）

ドールン　　　　　　（タバコ入れを取上げて、茂みの中へ投げ
　　　　　　　　　　る）けがらわしい！　（間）うちの中では
　　　　　　　　　　、カルタをやってるらしい。どれ、行くと
　　　　　　　　　　するか。

マーシャ　　　　　　ちょっと待って。

ドールン　　　　　　なんです？

マーシャ　　　　　　もう一ぺん、あなたに聞いて頂きたいこと
　　　　　　　　　　があるの。ちょっと聞いて頂きたいの。…
　　　　　　　　　　…（興奮して）わたし、うちの父は好きじ
　　　　　　　　　　ゃないけれど……あなたには、おすがりし
　　　　　　　　　　ていますの。なぜだか知らないけれど、わ
　　　　　　　　　　たし心底から、あなたが親身《しんみ》な
　　　　　　　　　　かたのような気がしますの。……どうぞ助
　　　　　　　　　　けてください。ね、助けて。さもないとわ
　　　　　　　　　　たし、ばかなことをしたり、自分の生活を
　　　　　　　　　　おひゃらかして、滅茶々々にしちまうわ。
　　　　　　　　　　……もうこれ以上わたし……

ドールン　　　　　　どうしたんです？　何を助けろと言うんで
　　　　　　　　　　す？

マーシャ　　　　　　わたし辛《つら》いんです。誰も、誰ひと
　　　　　　　　　　り、この辛さがわかってくれないの！　（
　　　　　　　　　　相手の胸に頭を押しあて、小声で）わたし
　　　　　　　　　　、トレープレフを愛しています。

ドールン　　　　　　なんてみんな神経質なんだ！　なんて神経
　　　　　　　　　　質なんだ！　それに、どこもかしこも恋ば
　　　　　　　　　　かしだ。……おお、まどわしの湖よ、だ！
　　　　　　　　　　　（やさしく）だって、この僕に一体、何
　　　　　　　　　　がしてあげられます、ええ？　何が？　え
　　　　　　　　　　、何が？

［＃ここで字下げ終わり］

［＃地から２字上げ］——幕——

［＃改ページ］

［＃５字下げ］第二幕［＃「第二幕」は中見出し］

［＃ここから３字下げ］

クロケットのコート。右手奥に、大きなテラスのついた家。左手には湖が見え、太陽が反射してきらきらしている。そこここに花壇。まひる。炎暑。コートの横手、菩提樹《ぼだいじゅ》の老木のかげにベンチが一脚。それにアルカージナ、ドールン、マーシャがかけている。ドールンの膝《ひざ》には、本が開けてある。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

アルカージナ　　　　（マーシャに）じゃ、立ってみましょう。
　　　　　　　　　　（ふたり立ちあがる）こうして並んでね。
　　　　　　　　　　あんたは二十二、わたしはかれこれその倍
　　　　　　　　　　よ。ね、ドールンさん、どっちが若く見え
　　　　　　　　　　て？

ドールン　　　　　　あなたです、もちろん。

アルカージナ　　　　そうらね……で、なぜでしょう？　それは
　　　　　　　　　　ね、わたしが働くからよ、物事に感じるか
　　　　　　　　　　らよ、しょっちゅう気を使っているからよ
　　　　　　　　　　。ところがあんたときたら、いつも一つ所
　　　　　　　　　　にじっとして、てんで生きちゃいない。…
　　　　　　　　　　…それにわたしには、主義があるの——未
　　　　　　　　　　来を覗《のぞ》き見しない、というね。わ
　　　　　　　　　　たしは、年のことも死のことも、ついぞ考
　　　　　　　　　　えたことがないわ。どうせ、なるようにし
　　　　　　　　　　かならないんだもの。

マーシャ　　　　　　わたしは、こんな気がしますの——まるで
　　　　　　　　　　自分が、もうずっと昔から生れているみた
　　　　　　　　　　いな。お儀式用のあの長ったらしいスカー
　　　　　　　　　　トよろしく、自分の生活をずるずる引きず
　　　　　　　　　　ってるみたいな気がね。……生きようなん
　　　　　　　　　　て気持が、てんでなくなることだってよく
　　　　　　　　　　ありますわ。（腰をおろす）でも、くだら
　　　　　　　　　　ないわね、そんなこと。奮起一番、こんな
　　　　　　　　　　妄念《もうねん》は叩《たた》きださなく
　　　　　　　　　　ちゃいけないわ。

ドールン　　　　　　（小声で口ずさむ）「ことづてよ、おお、
　　　　　　　　　　花々」……（［＃割り注］訳注　グーノー
　　　　　　　　　　の歌劇『ファウスト』第三幕、ジーベルの
　　　　　　　　　　詠唱より［＃割り注終わり］）

［＃グーノー作『ファウスト』の楽譜（fig51860\_02.png、横481×縦99）入る］

アルカージナ　　　　それにわたしは、イギリス人みたいにキチ
　　　　　　　　　　ンとしているわ。わたしはね、いいこと、
　　　　　　　　　　いわばピンと張りつめた気持でね、身なり
　　　　　　　　　　だって髪かたちだって、いつも ｜Com
　　　　　　　　　　me il faut《しゃんとして》
　　　　　　　　　　いますよ。一あし家《うち》を出るにした
　　　　　　　　　　って、よしんば、ほら、こうして庭へ出る
　　　　　　　　　　時でも、——部屋着《ブルーズ》のまま髪
　　　　　　　　　　も結わずに、なんてことがあったかしら？
　　　　　　　　　　　とんでもない。わたしがこうしていつま
　　　　　　　　　　でも若くていられるのは、そこらの連中み
　　　　　　　　　　たいにぐうたらな真似《まね》をしたり、
　　　　　　　　　　自分を甘やかしたりしなかったおかげです
　　　　　　　　　　よ。……（両手を腰にあてて、コートを歩
　　　　　　　　　　きまわる）ほらね、——ピヨピヨ雛《ひよ
　　　　　　　　　　》っ子よ。十五の小娘にだってなって見せ
　　　　　　　　　　るわ。

ドールン　　　　　　まあまあ、それはそうとして、僕は先を続
　　　　　　　　　　けますよ。（本を手にとって）ええと、粉
　　　　　　　　　　屋と鼠《ねずみ》のとこでしたね。……

アルカージナ　　　　その鼠のところ。読んでちょうだい。（腰
　　　　　　　　　　かける）でも、貸してごらんなさい、わた
　　　　　　　　　　しが読むわ。こんどはわたし。（本をうけ
　　　　　　　　　　取って、眼でさがす）鼠と……ああここだ
　　　　　　　　　　。……（読む）「だからもちろん、社交界
　　　　　　　　　　の婦人たちが小説家をちやほやして、これ
　　　　　　　　　　を身辺へ近づけるがごときは、その危険な
　　　　　　　　　　ること、粉屋が鼠を納屋《なや》に飼って
　　　　　　　　　　おくのと一般である。にもかかわらず、小
　　　　　　　　　　説家は依然としてヒイキにされる。かくて
　　　　　　　　　　、女性がこれぞと思う作家に狙《ねら》い
　　　　　　　　　　をつけて、これをサロンに手なずけておこ
　　　　　　　　　　うという段になると、彼女はお世辞、お愛
　　　　　　　　　　想、お追従《ついしょう》の限りをつくし
　　　　　　　　　　て包囲攻撃を加える」……ふん、フランス
　　　　　　　　　　じゃそうかも知れないけれど、このロシア
　　　　　　　　　　じゃ、そんな目論見《もくろみ》もへった
　　　　　　　　　　くれもありゃしない。ロシアの女はまず大
　　　　　　　　　　抵、作家を手に入れる前に、自分のほうが
　　　　　　　　　　首ったけの大あつあつになっちまう。いや
　　　　　　　　　　はやだわ。手近なところで、たとえばこの
　　　　　　　　　　わたしとトリゴーリンだっても……

［＃ここから３字下げ］

ソーリンが杖《つえ》にたよりながら登場。ならんでニーナ。そのあとからメドヴェージェンコが、空っぽの肘《ひじ》かけ椅子《いす》（［＃割り注］訳注車のついた［＃割り注終わり］）を押して
　　　　　　　　　　くる。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ソーリン　　　　　　（子供をあやすような調子で）ああ、そう
　　　　　　　　　　なの？　嬉《うれ》しくって堪《たま》ら
　　　　　　　　　　ないの？　今日はみんな浮き浮きってわけ
　　　　　　　　　　かな、早い話が？　（妹に）嬉しいことが
　　　　　　　　　　あるんだよ！　お父さんと、ままおっ母《
　　　　　　　　　　か》さんが、トヴェーリへ行っちまったん
　　　　　　　　　　で、ぼくたちまる三日というもの、のうの
　　　　　　　　　　うと羽根がのばせるんだ。

ニーナ　　　　　　　（アルカージナの隣に腰かけ、彼女に抱き
　　　　　　　　　　つく）わたしほんとに幸福！　これでもう
　　　　　　　　　　わたし、あなた方のものですわ。

ソーリン　　　　　　（自分の肘かけ椅子にかける）今日はこの
　　　　　　　　　　人、じつにきれいだなあ。

アルカージナ　　　　おめかしして、ほれぼれするみたい。（ニ
　　　　　　　　　　ーナにキスする）でも、あんまり褒《ほ》
　　　　　　　　　　め立てちゃいけないわ、鬼が妬《や》きま
　　　　　　　　　　すからね。トリゴーリンさんはどこ？

ニーナ　　　　　　　水浴び場で、釣りをしてらっしゃるの。

アルカージナ　　　　よく飽きないものねえ！　（つづけて読も
　　　　　　　　　　うとする）

ニーナ　　　　　　　それ、なんですの？

アルカージナ　　　　モーパッサンの『水の上』よ。（二、三行
　　　　　　　　　　ほど黙読する）ふん、あとはつまらない嘘
　　　　　　　　　　《うそ》っぱちだ。（本を閉じる）わたし
　　　　　　　　　　、なんだか気持が落着かない。うちの子は
　　　　　　　　　　、一体どうしたんでしょうねえ？　どうし
　　　　　　　　　　てあんなつまらなそうな、けわしい顔つき
　　　　　　　　　　をしてるんだろう？　あの子はもう何日も
　　　　　　　　　　、ぶっ続けに湖へばかり行っていて、わた
　　　　　　　　　　しおちおち顔を見る時もないの。

マーシャ　　　　　　くさくさしてらっしゃるんですわ。（ニー
　　　　　　　　　　ナに向って、おずおずと）ねえ、あの人の
　　　　　　　　　　戯曲をどこか、読んでくださらない！

ニーナ　　　　　　　（肩をすくめて）あら、あれを？　とても
　　　　　　　　　　つまんないのよ！

マーシャ　　　　　　（感激をおさえながら）あの人が自分で何
　　　　　　　　　　か朗読なさると、眼が燃えるようにきらき
　　　　　　　　　　らして、顔が蒼《あお》ざめてくるんです
　　　　　　　　　　わ。憂《うれ》いをふくんだ、きれいな声
　　　　　　　　　　で、身のこなしは詩人そっくり。

［＃ここから３字下げ］

ソーリンのいびきが聞える。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ドールン　　　　　　ごゆるりと！

アルカージナ　　　　ねえ、ペトルーシャ！

ソーリン　　　　　　ああ？

アルカージナ　　　　寝てらっしゃるの？

ソーリン　　　　　　いいや、どうして。

［＃ここから３字下げ］

間。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

アルカージナ　　　　あなたは療治をなさらない、いけないわ、
　　　　　　　　　　兄さん。

ソーリン　　　　　　療治したいのは山々だが、このドクトルが
　　　　　　　　　　、してやろうとおっしゃらん。

ドールン　　　　　　六十の療治ですか！

ソーリン　　　　　　六十になったって、生きたいさ。

ドールン　　　　　　（吐き出すように）ええ！　じゃ、カノコ
　　　　　　　　　　草《そう》の水薬（［＃割り注］訳注　カ
　　　　　　　　　　ノコ草の根から製した鎮静剤［＃割り注終
　　　　　　　　　　わり］）でもやるですな。

アルカージナ　　　　どこか、温泉にでも行ったらいいんじゃな
　　　　　　　　　　いかしら。

ドールン　　　　　　ほほう？　行くのもよし、行かないのもま
　　　　　　　　　　たよしですな。

アルカージナ　　　　ややこしいわね。

ドールン　　　　　　ややこしいも何もない。はっきりしてます
　　　　　　　　　　よ。

［＃ここから３字下げ］

間。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

メドヴェージェンコ　ソーリンさんは、タバコをやめるべきでし
　　　　　　　　　　ょうな。

ソーリン　　　　　　くだらん。

ドールン　　　　　　いや、くだらんどころじゃない。酒とタバ
　　　　　　　　　　コは、個性を失わせますよ。シガー一本、
　　　　　　　　　　ウオトカ一杯やったあとのあなたは、もは
　　　　　　　　　　やソーリン氏ではなくて、ソーリン氏プラ
　　　　　　　　　　ス誰かしら、なんです。自我がだんだんぼ
　　　　　　　　　　やけて、あなたは自分に対して、あたかも
　　　　　　　　　　第三者——つまり“彼”に対するような態
　　　　　　　　　　度になるわけです。

ソーリン　　　　　　（笑って）あんたは勝手に理屈をならべる
　　　　　　　　　　がいいさ。人生の盛りを楽しんだ人だから
　　　　　　　　　　ね。ところが僕はどうだ？　司法省に二十
　　　　　　　　　　八年も勤めはしたが、まだ生活をしたこと
　　　　　　　　　　がない、何一つ味わったことがない、早い
　　　　　　　　　　話がね。だからさ、生きたくって堪らない
　　　　　　　　　　のは、わかりきった話じゃないですか。あ
　　　　　　　　　　んたは腹がいっぱいで、泰然と構えていな
　　　　　　　　　　さる。それで哲学に趣味をもちなさる。と
　　　　　　　　　　ころが僕は、生きたいものだから、夕食に
　　　　　　　　　　シェリー〔酒〕をやったり、シガーをふか
　　　　　　　　　　したり、とまあいった次第でさ。それだけ
　　　　　　　　　　の事ですよ。

ドールン　　　　　　命というものは、もっと大事に扱うもので
　　　　　　　　　　す。六十になって療治をしたり、若い時の
　　　　　　　　　　楽しみが足りなかったと悔んだりするのは
　　　　　　　　　　、失礼ながら軽率というものですよ。

マーシャ　　　　　　（立ちあがる）もう午食《おひる》の時間
　　　　　　　　　　よ、きっと。（だらけた気力のない歩き方
　　　　　　　　　　をする）足がしびれたわ。……（退場）

ドールン　　　　　　ああして行って、午食の前に〔ウオトカを
　　　　　　　　　　〕二杯ひっかけるんだ。

ソーリン　　　　　　わが身に仕合せのない娘《こ》だからね、
　　　　　　　　　　可哀《かわい》そうに。

ドールン　　　　　　つまらんことを、ええ閣下。

ソーリン　　　　　　そらそれが、腹いっぱい食った人の理屈さ
　　　　　　　　　　。

アルカージナ　　　　あーあ、およそ退屈といったら、この親愛
　　　　　　　　　　なる田舎《いなか》の退屈さに、まさるも
　　　　　　　　　　のなしだわね！　暑くて、静かで、誰もな
　　　　　　　　　　んにもせずに、哲学ばかりやって。……ね
　　　　　　　　　　え皆さん、こうしてごいっしょにいるのも
　　　　　　　　　　いいし、お話を伺ってるのも楽しいわ。だ
　　　　　　　　　　けど……ホテルの部屋に引っこもって、書
　　　　　　　　　　き抜きを詰めこむ時のほうが——どんなに
　　　　　　　　　　ましだか知れやしない！

ニーナ　　　　　　　（感激して）すばらしいわ！　わたし、わ
　　　　　　　　　　かりますわ。

ソーリン　　　　　　むろん、都会のほうがいいさ。書斎に引っ
　　　　　　　　　　こんでる。取次ぎなしには誰も通しはせん
　　　　　　　　　　。用事は電話……往来にゃ辻《つじ》馬車
　　　　　　　　　　が通る、とまあいった次第でな……

ドールン　　　　　　（口ずさむ）「ことづてよ、おお、花々」
　　　　　　　　　　……

［＃ここから３字下げ］

シャムラーエフ登場。つづいて、ポリーナ。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

シャムラーエフ　　　ほう、皆さんお揃《そろ》いだ。こんにち
　　　　　　　　　　は！　（アルカージナの手に、つづいてニ
　　　　　　　　　　ーナの手に接吻《せっぷん》する）ご機嫌
　　　　　　　　　　うるわしくて何よりです。家内の話では、
　　　　　　　　　　あなたのお伴《とも》をして今日、町へ出
　　　　　　　　　　かけるそうですが、ほんとでしょうか？

アルカージナ　　　　ええ、そのつもりなの。

シャムラーエフ　　　ふむ。……それも結構ですが、しかし何に
　　　　　　　　　　乗って行かれますかな、奥さま？　今日は
　　　　　　　　　　ライ麦を運ぶ日なので、男衆はみんな手が
　　　　　　　　　　ふさがっております。それに一体、どんな
　　　　　　　　　　馬を使うおつもりですな、ひとつ伺いたい
　　　　　　　　　　もんで。

アルカージナ　　　　どんな馬？　知るもんですか——そんなこ
　　　　　　　　　　と！

ソーリン　　　　　　うちには、よそ行きのやつがあるはずだが
　　　　　　　　　　。

シャムラーエフ　　　（興奮して）よそ行きの？　では、頸輪《
　　　　　　　　　　くびわ》はどうすればいいのです？　どこ
　　　　　　　　　　から持ってくればよろしいんです？　こり
　　　　　　　　　　ゃ驚いた！　さっぱりわからん！　ねえ奥
　　　　　　　　　　さん！　失礼ながら、わたしはあなたの才
　　　　　　　　　　能を崇拝して、あなたのためなら、十年の
　　　　　　　　　　命を投げだすのもいといませんが、しかし
　　　　　　　　　　馬は絶対ご用だてできません！

アルカージナ　　　　でも、わたしがどうしても出かけなけりゃ
　　　　　　　　　　ならないとしたらどう？　妙な話だこと！

シャムラーエフ　　　奥さん！　あなたはわかっておいでなさら
　　　　　　　　　　ん、農家の経営というものが！

アルカージナ　　　　（カッとして）また例の御託《ごたく》が
　　　　　　　　　　始まった！　そんならよござんす、わたし
　　　　　　　　　　今日すぐモスクワへ帰るから。村へ行って
　　　　　　　　　　、馬をやとってくるよう言いつけてくださ
　　　　　　　　　　い。それも駄目なら、駅まで歩いて行きま
　　　　　　　　　　す！

シャムラーエフ　　　（カッとして）そういうことなら、わたし
　　　　　　　　　　は辞職します！　べつの支配人をおさがし
　　　　　　　　　　なさい！　（退場）

アルカージナ　　　　毎とし夏になると、こうだわ。毎夏、わた
　　　　　　　　　　しはここへ来て厭《いや》な目にあわされ
　　　　　　　　　　るんだわ！　もうここへは足ぶみもしない
　　　　　　　　　　！　（左手へ退場。そこに水浴び場がある
　　　　　　　　　　気持。やがて、彼女が家に歩いて行くのが
　　　　　　　　　　見える。そのあとにトリゴーリンが、釣竿
　　　　　　　　　　《つりざお》と手桶《ておけ》をさげてつ
　　　　　　　　　　づく）

ソーリン　　　　　　（カッとして）理不尽にもほどがある！
　　　　　　　　　　一体なんたることだ！　つくづくもう厭に
　　　　　　　　　　なったよ、早い話がな。即刻ここへ、あり
　　　　　　　　　　ったけの馬を出させるがいい！

ニーナ　　　　　　　（ポリーナに）アルカージナさんのような
　　　　　　　　　　、有名な女優さんにさからうなんて！　そ
　　　　　　　　　　のお望みとあれば、たとえ気まぐれにした
　　　　　　　　　　って、お宅の経営よりか大切じゃありませ
　　　　　　　　　　んの？　呆《あき》れて物も言えないわ！

ポリーナ　　　　　　（身も世もあらず）どうしろとおっしゃる
　　　　　　　　　　の？　わたしの身にもなってちょうだい、
　　　　　　　　　　どうすればいいと仰しゃるの？

ソーリン　　　　　　（ニーナに）さ、妹のところへ行きましょ
　　　　　　　　　　う。……みんなで、あれが発《た》って行
　　　　　　　　　　かないように、頼んでみましょう。ね、ど
　　　　　　　　　　うです？　（シャムラーエフの去った方角
　　　　　　　　　　を見やって）まったくやりきれん男だ！
　　　　　　　　　　暴君だ！

ニーナ　　　　　　　（彼の立とうとするのを遮《さえぎ》りな
　　　　　　　　　　がら）坐《すわ》ってらっしゃい、坐って
　　　　　　　　　　。……わたしたちがお連れしますわ。……
　　　　　　　　　　（メドヴェージェンコと二人で椅子を押す
　　　　　　　　　　）ああ、ほんとに厭だこと！……

ソーリン　　　　　　そう、まったく厭なことだ。……でもね、
　　　　　　　　　　あの男は出て行きはしない。わたしが今す
　　　　　　　　　　ぐ、話をつけるからね。（三人退場。ドー
　　　　　　　　　　ルンとポリーナだけ残る）

ドールン　　　　　　厄介《やっかい》な連中だなあ。本来なら
　　　　　　　　　　、あんたのご亭主をポイとおっぽり出せば
　　　　　　　　　　いいものを、それがとどのつまりは、あの
　　　　　　　　　　年寄り婆《ばあ》さんみたいなソーリン先
　　　　　　　　　　生が、妹とふたりがかりで、詫《わ》びを
　　　　　　　　　　入れるのが落ちですよ。まあ見てらっしゃ
　　　　　　　　　　い！

ポリーナ　　　　　　あの人は、よそ行きの馬まで野良《のら》
　　　　　　　　　　へ出したんですの。それに、こんな行き違
　　　　　　　　　　いは毎日のことなのよ。そのためどれほど
　　　　　　　　　　わたしが苦労するか、わかってくだすった
　　　　　　　　　　らねえ！　これじゃ病気になってしまうわ
　　　　　　　　　　。ほらね、顫《ふる》えがついてるわ。…
　　　　　　　　　　…わたし、あの人のがさつさには愛想がつ
　　　　　　　　　　きた。（哀願するように）エヴゲーニイ、
　　　　　　　　　　ね、大事ないとしいエヴゲーニイ、わたし
　　　　　　　　　　を引取ってちょうだい。……わたしたちの
　　　　　　　　　　時は過ぎてゆくわ、おたがいもう若くはな
　　　　　　　　　　いわ。せめて一生のおしまいだけでも、か
　　　　　　　　　　くれたり、嘘《うそ》をついたりせずにい
　　　　　　　　　　たい……（間）

ドールン　　　　　　僕は五十五ですよ、今さら生活を変えよう
　　　　　　　　　　たってもう遅い。

ポリーナ　　　　　　わかってるわ、そう言って逃げをお打ちに
　　　　　　　　　　なるのも、わたしのほかに、身近な女の人
　　　　　　　　　　が、幾らもおありだからよ。みんな引取る
　　　　　　　　　　わけにはいきませんものね。わかってます
　　　　　　　　　　わ。こんなこと言ってご免なさい、もう飽
　　　　　　　　　　きられてしまったのにね。

［＃ここから３字下げ］

ニーナが家のほとりに現われる。彼女は花を摘む。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ドールン　　　　　　そんなばかなことが。

ポリーナ　　　　　　わたし、嫉妬《しっと》でくるしいのよ。
　　　　　　　　　　そりゃ、あなたはお医者さんだから、婦人
　　　　　　　　　　を避けるわけにはいかない。それはわかる
　　　　　　　　　　けれど……

ドールン　　　　　　（近づいて来たニーナに）どうです。あち
　　　　　　　　　　らの様子は？

ニーナ　　　　　　　アルカージナさんは泣いてらっしゃるし、
　　　　　　　　　　ソーリンさんはまた喘息《ぜんそく》よ。

ドールン　　　　　　（立ちあがる）どれ行って、カノコ草の水
　　　　　　　　　　薬でも、ふたりに飲ませるか。……

ニーナ　　　　　　　（彼に花をわたして）どうぞ！

ドールン　　　　　　こりゃどうも《メルシ・ビエン》。（家の
　　　　　　　　　　ほうへ行く）

ポリーナ　　　　　　（いっしょに行きながら）まあ、可愛《か
　　　　　　　　　　わい》らしい花だこと！　（家のほとりで
　　　　　　　　　　、声を押し殺して）その花をちょうだい！
　　　　　　　　　　　およこしなさいったら！　（花を受けと
　　　　　　　　　　り、それを引きむしって、わきへ捨てる。
　　　　　　　　　　ふたり家にはいる）

ニーナ　　　　　　　（ひとり）有名な女優さんが、それもあん
　　　　　　　　　　なつまらないことで泣くなんて、どう見て
　　　　　　　　　　も不思議だわねえ！　もう一つ不思議と言
　　　　　　　　　　えば、名高い小説家で、世間の人気者で、
　　　　　　　　　　わいわい新聞に書き立てられたり、写真が
　　　　　　　　　　売りだされたり、外国で翻訳まで出ている
　　　　　　　　　　人が、一日じゅう釣りばかりして、ダボハ
　　　　　　　　　　ゼが二匹釣れたってにこにこしてるなんて
　　　　　　　　　　、これも変てこだわ。わたし、有名な人っ
　　　　　　　　　　て、そばへも寄れないほどえばりくさって
　　　　　　　　　　、世間の人間を見くだしているものと思っ
　　　　　　　　　　ていた。家柄だの財産だのを、無上のもの
　　　　　　　　　　と崇《あが》め奉《たてまつ》る世間にた
　　　　　　　　　　いして、自分の名誉やぱりぱりの名声でも
　　　　　　　　　　って、仕返しをする気なのだろうと思って
　　　　　　　　　　いた。ところがどうでしょう、泣いたり、
　　　　　　　　　　釣りをしたり、カルタをやったり、笑った
　　　　　　　　　　り、一向みんなと違やしない。……

トレープレフ　　　　（無帽で登場。猟銃と、鴎《かもめ》の死
　　　　　　　　　　骸《しがい》を持つ）一人っきりなの？

ニーナ　　　　　　　ええ、そう。

［＃ここから３字下げ］

トレープレフ、鴎を彼女の足もとに置く。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ニーナ　　　　　　　どういうこと、これ？

トレープレフ　　　　今日ぼくは、この鴎を殺すような下劣な真
　　　　　　　　　　似《まね》をした。あなたの足もとに捧《
　　　　　　　　　　ささ》げます。

ニーナ　　　　　　　どうかなすったの？　（鴎を持ちあげて、
　　　　　　　　　　じっと見つめる）

トレープレフ　　　　（間をおいて）おっつけ僕も、こんなふう
　　　　　　　　　　に僕自身を殺すんです。

ニーナ　　　　　　　すっかり人が違ったみたい。

トレープレフ　　　　ええ、あなたが別人みたいになって以来。
　　　　　　　　　　あなたの態度は、がらり変ってしまいまし
　　　　　　　　　　たね。目つきまで冷たくなって、僕がいる
　　　　　　　　　　とさも窮屈そうだ。

ニーナ　　　　　　　近ごろあなたは怒りっぽくなって、何か言
　　　　　　　　　　うにもはっきりしない、へんな象徴みたい
　　　　　　　　　　なものを使うのね。現にこの鴎にしたって
　　　　　　　　　　、どうやら何かの象徴らしいけれど、ご免
　　　　　　　　　　なさい、わたしわからないの。……（鴎を
　　　　　　　　　　ベンチの上に置く）わたし単純すぎるもん
　　　　　　　　　　だから、あなたの考えがわからないの。

トレープレフ　　　　ことの起りはね、僕の脚本があんなぶざま
　　　　　　　　　　な羽目になった、あの晩からなんです。女
　　　　　　　　　　というものは、失敗を赦《ゆる》しません
　　　　　　　　　　からね。僕はすっかり焼いちまった、切れ
　　　　　　　　　　っぱし一つ残さずにね。僕がどんなにみじ
　　　　　　　　　　めだか、あなたにわかったらなあ！　あな
　　　　　　　　　　たが冷たくなったのが、僕は怖《おそ》ろ
　　　　　　　　　　しい、あり得べからざることのような気が
　　　　　　　　　　する。まるで目がさめてみると、この湖が
　　　　　　　　　　いきなり干あがっていたか、地面へ吸いこ
　　　　　　　　　　まれてしまっていたみたいだ。今しがたあ
　　　　　　　　　　なたは、単純すぎるもんだから僕の考えが
　　　　　　　　　　わからない、と言いましたね。ああ、なん
　　　　　　　　　　のわかることがいるもんですか※［＃疑問
　　　　　　　　　　符感嘆符、1-8-77］　あの脚本が気
　　　　　　　　　　にくわない、それで僕のインスピレーショ
　　　　　　　　　　ンを見くびって、あなたは僕を、そのへん
　　　　　　　　　　にうようよしている平凡なくだらん奴《や
　　　　　　　　　　つ》らといっしょにしてるんだ。……（と
　　　　　　　　　　んと足ぶみして）わかってるさ、ちゃんと
　　　　　　　　　　知ってるんだ！　僕は脳みそに、釘《くぎ
　　　　　　　　　　》をぶちこまれたような気持だ。そんなも
　　　　　　　　　　の、僕の血をまるで蛇《へび》みたいに吸
　　　　　　　　　　って吸って吸いつくす自尊心もろとも、呪
　　　　　　　　　　《のろ》われるがいいんだ。……（トリゴ
　　　　　　　　　　ーリンが手帳を読みながら来るのを見て）
　　　　　　　　　　そうら、ほんものの天才がやって来た。歩
　　　　　　　　　　きっぷりまでハムレットだ、やっぱり本を
　　　　　　　　　　持ってね。……（嘲弄《ちょうろう》口調
　　　　　　　　　　で）「言葉、ことば、ことば」か……まだ
　　　　　　　　　　あの太陽がそばへこないうちから、あなた
　　　　　　　　　　はもうにっこりして、目つきまであの光で
　　　　　　　　　　トロンとしてしまった。邪魔はしませんよ
　　　　　　　　　　。（足早に退場）

トリゴーリン　　　　（手帳に書きこみながら）かぎタバコを用
　　　　　　　　　　い、ウオトカを飲む。……いつも黒服と。
　　　　　　　　　　教師が恋する……

ニーナ　　　　　　　ご機嫌よう、トリゴーリンさん！

トリゴーリン　　　　ご機嫌よう。じつは思いがけない事情のた
　　　　　　　　　　め、われわれはどうやら今日｜発《た》つ
　　　　　　　　　　ことになりそうです。あなたとまたいつお
　　　　　　　　　　会いできるかどうか。いや、残念です。わ
　　　　　　　　　　たしは、ごくたまにしか若いお嬢さん——
　　　　　　　　　　若くてしかもきれいなお嬢さんに、会う機
　　　　　　　　　　会がないもので、十八、九の年ごろには一
　　　　　　　　　　体どんな気持でいるものか、とんと忘れて
　　　　　　　　　　しまって、どうもはっきり頭に浮ばんので
　　　　　　　　　　す。だから、わたしの作品に出てくる若い
　　　　　　　　　　娘たちは、大抵作りものですよ。わたしは
　　　　　　　　　　せめて一時間でもいいから、あなたと入れ
　　　　　　　　　　代りになって、あなたの物の考え方や、全
　　　　　　　　　　体あなたがどういう人かを、とっくり知り
　　　　　　　　　　たいと思いますよ。

ニーナ　　　　　　　わたしは、ちょいちょいあなたと入れ代り
　　　　　　　　　　になってみたいわ。

トリゴーリン　　　　なぜね？

ニーナ　　　　　　　有名な、りっぱな作家が、どんな気持でい
　　　　　　　　　　るものか、知りたいからですわ。有名って
　　　　　　　　　　、どんな気がするものかしら？　ご自分が
　　　　　　　　　　有名だということを、どうお感じになりま
　　　　　　　　　　して？

トリゴーリン　　　　どうって？　まあ別になんともないでしょ
　　　　　　　　　　うね。そんなこと、ついぞ考えたこともあ
　　　　　　　　　　りませんよ。（ちょっと考えて）二つのう
　　　　　　　　　　ち、どっちかですな——わたしの名声をあ
　　　　　　　　　　なたが大げさに考えているか、それとも、
　　　　　　　　　　名声というものがおよそ実感としてピンと
　　　　　　　　　　こないかね。

ニーナ　　　　　　　でも、自分のことが新聞に出ているのをご
　　　　　　　　　　覧になったら？

トリゴーリン　　　　褒《ほ》められればいい気持だし、やっつ
　　　　　　　　　　けられると、それから二日は不機嫌を感じ
　　　　　　　　　　ますね。

ニーナ　　　　　　　すばらしい世界だわ！　どんなにわたし羨
　　　　　　　　　　《うらや》ましいか、それがわかってくだ
　　　　　　　　　　すったらねえ！　人の運命って、さまざま
　　　　　　　　　　なのね。退屈な、人目につかない一生を、
　　　　　　　　　　やっとこさ曳《ひ》きずっている、みんな
　　　　　　　　　　似たりよったりの、不仕合せな人たちがい
　　　　　　　　　　るかと思うと、一方にはあなたのように、
　　　　　　　　　　——百万人に一人の、面白い、明るい、意
　　　　　　　　　　義にみちた生活を送るめぐり合せの人もあ
　　　　　　　　　　る。あなたはお仕合せですわ。……

トリゴーリン　　　　わたしがね？　（肩をすくめて）ふむ。…
　　　　　　　　　　…あなたは、名声だの幸福だの、何かこう
　　　　　　　　　　明るい面白い生活だのと仰しゃるが、わた
　　　　　　　　　　しにとっては、そんなありがたそうな言葉
　　　　　　　　　　はみんな、失礼ながら、わたしが食わず嫌
　　　　　　　　　　いで通しているマーマレードと同じですよ
　　　　　　　　　　。あなたはとても若くて、とても善良だ。

ニーナ　　　　　　　あなたの生活は、すてきな生活ですわ！

トリゴーリン　　　　べつにいいとこもありませんねえ。（時計
　　　　　　　　　　を出して見る）わたしは、これから行って
　　　　　　　　　　書かなければならん。ま赦《ゆる》してく
　　　　　　　　　　ださい、暇がないんです。……（笑う）あ
　　　　　　　　　　なたはね、世間で言う「人の痛い肉刺《ま
　　　　　　　　　　め》」を、ぐいと踏んづけなすった。そこ
　　　　　　　　　　でわたしは、このとおり興奮して、いささ
　　　　　　　　　　か向っ腹を立てているんです。だがまあ、
　　　　　　　　　　しばらくお話しましょうか。そのわたしの
　　　　　　　　　　、すばらしい、明るい生活のことをね。…
　　　　　　　　　　…さてと、何から始めたものか？　（やや
　　　　　　　　　　考えて）強迫観念というものがありますね
　　　　　　　　　　。人がたとえば月なら月のことを、夜も昼
　　　　　　　　　　ものべつ考えていると、それになるのだが
　　　　　　　　　　、わたしにもそんな月があるんです。夜も
　　　　　　　　　　昼も、一つの考えが、しつこく私にとっつ
　　　　　　　　　　いて離れない。それは、書かなくちゃなら
　　　　　　　　　　ん、書かなくちゃ、書かなくちゃ……とい
　　　　　　　　　　うやつです。やっと小説を一つ書きあげた
　　　　　　　　　　かと思うと、なぜか知らんがすぐもう次の
　　　　　　　　　　に掛からなければならん、それから三つ目
　　　　　　　　　　、三つ目のお次は四つ目……といった具合
　　　　　　　　　　。まるで駅逓《えきてい》馬車みたいに、
　　　　　　　　　　のべつ書きどおしで、ほかに打つ手がない
　　　　　　　　　　。そのどこがすばらしいか、明るいか、ひ
　　　　　　　　　　とつ伺いたいものだ。いやはや、野蛮きわ
　　　　　　　　　　まる生活ですよ！　今こうしてあなたとお
　　　　　　　　　　喋《しゃべ》りをして、興奮している。と
　　　　　　　　　　ころがその一方、書きかけの小説が向うで
　　　　　　　　　　待っていることを、一瞬たりとも忘れずに
　　　　　　　　　　いるんです。ほらあすこに、グランド・ピ
　　　　　　　　　　アノみたいな恰好《かっこう》の雲が見え
　　　　　　　　　　る。すると、こいつは一つ小説のどこかで
　　　　　　　　　　使ってやらなくちゃ、と考える。グランド
　　　　　　　　　　・ピアノのような雲がうかんでいた、とね
　　　　　　　　　　。ヘリオトロープの匂《にお》いがする。
　　　　　　　　　　また大急ぎで頭《ここ》へ書きこむ。甘っ
　　　　　　　　　　たるい匂《にお》い、後家さんの色、こい
　　　　　　　　　　つは夏の夕方の描写に使おう、とね。こう
　　　　　　　　　　して話をしていても、自分やあなたの一言
　　　　　　　　　　一句を片っぱしから捕《つか》まえて、い
　　　　　　　　　　そいで自分の手文庫のなかへほうりこむ。
　　　　　　　　　　こりゃ使えるかも知れんぞ！　というわけ
　　　　　　　　　　。一仕事すますと、芝居なり釣りなりに逃
　　　　　　　　　　げだす。そこでほっと一息ついて、忘我の
　　　　　　　　　　境にひたれるかと思うと、どっこい、そう
　　　　　　　　　　は行かない。頭のなかには、すでに新しい
　　　　　　　　　　題材という重たい鉄のタマがころげ回って
　　　　　　　　　　、早く机へもどれと呼んでいる。そこでま
　　　　　　　　　　たぞろ、大急ぎで書きまくることになる。
　　　　　　　　　　いつも、しょっちゅうこんなふうで、われ
　　　　　　　　　　とわが身に責め立てられて、心のやすまる
　　　　　　　　　　ひまもない。自分の命を、ぼりぼり食って
　　　　　　　　　　いるような気持です。何者か漠然《ばくぜ
　　　　　　　　　　ん》とした相手に蜜《みつ》を与えようと
　　　　　　　　　　して、僕は自分の選《え》り抜きの花から
　　　　　　　　　　花粉をかき集めたり、かんじんの花を引き
　　　　　　　　　　むしったり、その根を踏み荒したりしてい
　　　　　　　　　　るみたいなものです。それで正気と言える
　　　　　　　　　　だろうか？　身近な連中や知り合いが、果
　　　　　　　　　　してわたしをまともに扱ってくれてるだろ
　　　　　　　　　　うか？　「いま何を書いておいでです？
　　　　　　　　　　こんどはどんなものです？」聞くことと言
　　　　　　　　　　ったら同じことばかり。それでわたしは、
　　　　　　　　　　知り合いのそんな注目や、讃辞《さんじ》
　　　　　　　　　　や、随喜の涙が、みんな嘘っぱちで、寄っ
　　　　　　　　　　てたかってわたしを病人あつかいにして、
　　　　　　　　　　いい加減な気休めを言っているみたいな気
　　　　　　　　　　がする。うかうかしてると、誰かうしろか
　　　　　　　　　　ら忍び寄って来て、わたしをとっつかまえ
　　　　　　　　　　、あのポプリーシチン（［＃割り注］訳注
　　　　　　　　　　　ゴーゴリの『狂人日記』の主人公［＃割
　　　　　　　　　　り注終わり］）みたいに、気違い病院へぶ
　　　　　　　　　　ちこむんじゃないかと、こわくなることも
　　　　　　　　　　ある。それじゃ、わたしがやっと物を書き
　　　　　　　　　　だしたころ、まだ若くて、生気にあふれて
　　　　　　　　　　いた時代はどうかというと、これまたわた
　　　　　　　　　　しの文筆生活は、ただもう苦しみの連続で
　　　　　　　　　　したよ。駆けだしの文士というものは、殊
　　　　　　　　　　《こと》に不遇な時代がそうですが、われ
　　　　　　　　　　ながら間の抜けた、不細工な余計者みたい
　　　　　　　　　　な気のするものでしてね、神経ばかりやた
　　　　　　　　　　らに尖《とが》らせて、ただもう文学や美
　　　　　　　　　　術にたずさわっている人たちのまわりを、
　　　　　　　　　　ふらふらうろつき回らずにはいられない。
　　　　　　　　　　認めてももらえず、誰の目にもはいらず、
　　　　　　　　　　しかもこっちから相手の眼を、まともにぐ
　　　　　　　　　　いと見る勇気もなく——まあ言ってみれば
　　　　　　　　　　、一文なしのバクチきちがいといったざま
　　　　　　　　　　です。わたしは自分の読者に会ったことは
　　　　　　　　　　なかったけれど、なぜかわたしの想像では
　　　　　　　　　　、不愛想な疑ぐりぶかい人種のように思え
　　　　　　　　　　ましたね。わたしは世間というものが恐《
　　　　　　　　　　こわ》かった。ものすごい怪物のような気
　　　　　　　　　　がした。自分の新作物が上演されるような
　　　　　　　　　　ことになると、いつもきまって、黒い髪の
　　　　　　　　　　毛の人は敵意を抱《いだ》いている、明る
　　　　　　　　　　い髪の毛の人は冷淡な無関心派だと、そん
　　　　　　　　　　な気がしたものです。思いだしてもぞっと
　　　　　　　　　　する！　じつになんとも言えない苦しみで
　　　　　　　　　　した！

ニーナ　　　　　　　ちょっとお待ちになって。でも、感興が湧
　　　　　　　　　　《わ》いてきた時や、創作の筆がすすんで
　　　　　　　　　　いる時は、崇高な幸福の瞬間をお味わいに
　　　　　　　　　　なりません？

トリゴーリン　　　　それはそうです。書いているうちは愉快で
　　　　　　　　　　す。校正をするのも愉快だな。だが……い
　　　　　　　　　　ざ刷りあがってしまうと、もう我慢がなら
　　　　　　　　　　ない。こいつは見当が狂った、しくじった
　　　　　　　　　　、いっそ書かないほうがよかったのだと、
　　　　　　　　　　むしゃくしゃして、気が滅入《めい》るん
　　　　　　　　　　ですよ。……（笑う）ところが、世間は読
　　　　　　　　　　んでくれて、「なるほど、うまい、才筆だ
　　　　　　　　　　な」とか、「うまいが、トルストイには及
　　　　　　　　　　びもつかんね」とか、「よく書けてる、し
　　　　　　　　　　かしツルゲーネフの『父と子』のほうが上
　　　　　　　　　　だよ」とか、仰《おお》せになる。といっ
　　　　　　　　　　たわけで、結局、墓にはいるまでは、明け
　　　　　　　　　　ても暮れても「うまい、才筆だ」「うまい
　　　　　　　　　　、才筆だ」の一点ばりで、ほかに何にもあ
　　　　　　　　　　りゃしない。さて死んでしまうと、知り合
　　　　　　　　　　いの連中が墓のそばを通りかかって、こう
　　　　　　　　　　言うでしょうよ。「ここにトリゴーリンが
　　　　　　　　　　眠っている。いい作家だったが、ツルゲー
　　　　　　　　　　ネフには敵《かな》わなかったね」

ニーナ　　　　　　　でもちょっと。わたし、そんなお話は頂き
　　　　　　　　　　かねますわ。あなたは、成功に甘えてらっ
　　　　　　　　　　しゃるんだわ。

トリゴーリン　　　　どんな成功にね？　わたしはついぞ、自分
　　　　　　　　　　でいいと思ったことはありませんよ。わた
　　　　　　　　　　しは作家としての自分が好きじゃない。何
　　　　　　　　　　よりも悪いことに、わたしは頭がもやもや
　　　　　　　　　　していて、自分で何を書いているのかわか
　　　　　　　　　　らないんです。……わたしはほら、この水
　　　　　　　　　　が好きだ。木立や空が好きだ。わたしは自
　　　　　　　　　　然をしみじみ感じる。それはわたしの情熱
　　　　　　　　　　を、書かずにいられない欲望をよび起す。
　　　　　　　　　　ところがわたしは、単なる風景画家だけじ
　　　　　　　　　　ゃなくて、その上に社会人でもあるわけだ
　　　　　　　　　　。わたしは祖国を、民衆を愛する。わたし
　　　　　　　　　　は、もし自分が作家であるならば、民衆や
　　　　　　　　　　、その苦悩や、その将来について語り、科
　　　　　　　　　　学や、人間の権利や、その他いろんなこと
　　　　　　　　　　についても語る義務がある、と感じるわけ
　　　　　　　　　　です。そこでわたしは、何もかも喋《しゃ
　　　　　　　　　　べ》ろうとあせる。わたしは四方八方から
　　　　　　　　　　駆り立てられ、叱《しか》りとばされ、ま
　　　　　　　　　　るで猟犬に追いつめられた狐《きつね》さ
　　　　　　　　　　ながら、あっちへすっ飛び、こっちへすっ
　　　　　　　　　　飛びしているうちに、みるみる人生や科学
　　　　　　　　　　は前へ前へと進んで行ってしまい、わたし
　　　　　　　　　　は汽車に乗りおくれた百姓みたいに、ずん
　　　　　　　　　　ずんあとにとり残される。で、とどのつま
　　　　　　　　　　りは、自分にできるのは、自然描写だけだ
　　　　　　　　　　、ほかのことにかけては一切じぶんはニセ
　　　　　　　　　　物だ、骨の髄までニセ物だ、と思っちまう
　　　　　　　　　　んですよ。

ニーナ　　　　　　　あなたは過労のおかげで、自分の値打ちを
　　　　　　　　　　意識するひまも気持も、ないんですわ。た
　　　　　　　　　　とえご自分に不満だろうとなんだろうと、
　　　　　　　　　　ほかの人にとってはあなたは偉大でりっぱ
　　　　　　　　　　な方なのよ！　もしわたしが、あなたみた
　　　　　　　　　　いな作家だったら、自分の全生命を民衆に
　　　　　　　　　　捧《ささ》げてしまうわ。でも心のなかで
　　　　　　　　　　は、民衆の幸福はただ、わたしの所まで向
　　　　　　　　　　上してくることだと、はっきり自覚します
　　　　　　　　　　わ。すると民衆は、わたしを祭礼の馬車に
　　　　　　　　　　乗せて引きまわしてくれるわ。

トリゴーリン　　　　ほう、祭礼の馬車か。……アガメンノンで
　　　　　　　　　　すかね、このわたしが！　（ふたり微笑す
　　　　　　　　　　る）

ニーナ　　　　　　　女流作家とか女優とか、そんな幸福な身分
　　　　　　　　　　になれるものなら、わたしは周囲の者に憎
　　　　　　　　　　まれても、貧乏しても、幻滅しても、りっ
　　　　　　　　　　ぱに堪えてみせますわ。屋根うら住まいを
　　　　　　　　　　して、黒パンばかりかじって、自分への不
　　　　　　　　　　満だの、未熟さの意識だのに悩んだってか
　　　　　　　　　　まわない。その代り、わたしは要求するの
　　　　　　　　　　よ、名声を……ほんとうの、割れ返るよう
　　　　　　　　　　な名声を。……（両手で顔をおおう）頭が
　　　　　　　　　　くらくらする……ああ！

アルカージナの声　　（家の中から）トリゴーリンさん！

トリゴーリン　　　　わたしを呼んでいる。きっと荷づくりでし
　　　　　　　　　　ょう。だが、発《た》ちたくないなあ。（
　　　　　　　　　　湖の方を振返って）なんという自然の恩恵
　　　　　　　　　　だ！……すばらしい！

ニーナ　　　　　　　向う岸に、家と庭が見えるでしょう？

トリゴーリン　　　　ええ。

ニーナ　　　　　　　あれが、亡《な》くなった母の屋敷です。
　　　　　　　　　　わたし、あすこで生れたの。それからずっ
　　　　　　　　　　と、この湖のそばで暮しているものだから
　　　　　　　　　　、どんな小さな島でもみんな知っています
　　　　　　　　　　わ。

トリゴーリン　　　　ここはまったくすばらしい！　（鴎《かも
　　　　　　　　　　め》を見とめて）なんです、これは？

ニーナ　　　　　　　かもめよ。トレープレフさんが射《う》っ
　　　　　　　　　　たの。

トリゴーリン　　　　きれいな鳥だ。いや、どうも発ちたくない
　　　　　　　　　　なあ。ひとつアルカージナさんを説きつけ
　　　　　　　　　　て、もっといるようにしてください。（手
　　　　　　　　　　帳に書きこむ）

ニーナ　　　　　　　なに書いてらっしゃるの？

トリゴーリン　　　　ちょっと書きとめとくんです。……題材が
　　　　　　　　　　浮んだものでね。……（手帳をしまいなが
　　　　　　　　　　ら）ほんの短編ですがね、湖のほとりに、
　　　　　　　　　　ちょうどあなたみたいな若い娘が、子供の
　　　　　　　　　　時から住んでいる。鴎のように湖が好きで
　　　　　　　　　　、鴎のように幸福で自由だ。ところが、ふ
　　　　　　　　　　とやって来た男が、その娘を見て、退屈ま
　　　　　　　　　　ぎれに、娘を破滅させてしまう——ほら、
　　　　　　　　　　この鴎のようにね。

［＃ここから３字下げ］

間。——やがて窓にアルカージナが現われる。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

アルカージナ　　　　トリゴーリンさん、どこにいらっしゃるの
　　　　　　　　　　？

トリゴーリン　　　　今すぐ！　（行きかけて、ニーナを振返る
　　　　　　　　　　。窓のそばでアルカージナに）なんです？

アルカージナ　　　　わたしたち、このままいることにしますわ
　　　　　　　　　　。

［＃ここから３字下げ］

トリゴーリン、家へはいる。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ニーナ　　　　　　　（脚光ちかく歩みよる。やや沈思ののちに
　　　　　　　　　　）夢だわ！

［＃ここで字下げ終わり］

［＃地から２字上げ］——幕——

［＃改ページ］

［＃５字下げ］第三幕［＃「第三幕」は中見出し］

［＃ここから３字下げ］

ソーリン家の食堂。左右にドア。食器｜棚《だな》。薬品の戸棚。部屋の中央にテーブル。旅行カバンが一つ、帽子のボール箱が幾つか。出立《しゅったつ》の用意が見てとられる。トリゴーリンが朝食（［＃割り注］訳注だいたい早おひるの時刻［＃割り注終わり
　　　　　　　　　　］）をしたため、マーシャはテーブルのそ
　　　　　　　　　　ばに立っている。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

マーシャ　　　　　　これはみんな、作家としてのあなたにお話
　　　　　　　　　　しするんです。お使いになってもかまいま
　　　　　　　　　　せん。良心にかけて言いますけれど、あの
　　　　　　　　　　人の傷が重傷だったら、わたし一分間たり
　　　　　　　　　　と生きてはいなかったでしょう。でも、わ
　　　　　　　　　　たしはこれで勇気があります。だから、き
　　　　　　　　　　っぱり決心しました。この恋を胸《ここ》
　　　　　　　　　　から引っこ抜いてしまおうと。根ごと一思
　　　　　　　　　　いにね。

トリゴーリン　　　　どんな具合にね？

マーシャ　　　　　　嫁に行くんです。メドヴェージェンコのと
　　　　　　　　　　ころへ。

トリゴーリン　　　　あの教師《せんせい》のところへね？

マーシャ　　　　　　ええ。

トリゴーリン　　　　わからんな。なんの必要があって。

マーシャ　　　　　　望みもないのに恋をして、何年も何年も何
　　　　　　　　　　か待っているなんて……。いったん嫁に行
　　　　　　　　　　ってしまえば、もう恋どころじゃなくなっ
　　　　　　　　　　て、新しい苦労で古いことはみんな消され
　　　　　　　　　　てしまう。それだけでも、ね、変化じゃあ
　　　　　　　　　　りませんか。いかが、もう一つ？

トリゴーリン　　　　過ぎやしないかな？

マーシャ　　　　　　なあに、平気！　（一杯ずつつぐ）そんな
　　　　　　　　　　に人の顔を見ないでください。女というも
　　　　　　　　　　のは、あなたの考えてらっしゃるより、よ
　　　　　　　　　　く飲みますわよ。わたしみたいに大っぴら
　　　　　　　　　　にやるのは少ないけれど、こっそり飲むの
　　　　　　　　　　は大勢いますわ。そうよ。しかもきまって
　　　　　　　　　　、ウオトカかコニャックですわ。（杯を当
　　　　　　　　　　てて）プロジット！　あなたは、さっぱり
　　　　　　　　　　した方ね。お別れするの残念ですわ。（ふ
　　　　　　　　　　たり飲みほす）

トリゴーリン　　　　わたしだって、発《た》ちたくはないんだ
　　　　　　　　　　が。

マーシャ　　　　　　だからあの人に、もっといるようにお頼み
　　　　　　　　　　になったら。

トリゴーリン　　　　いや、もういるつもりはないでしょう。な
　　　　　　　　　　にしろあの息子《むすこ》が、でたらめば
　　　　　　　　　　かりやらかすんでね。ピストル自殺をやり
　　　　　　　　　　かけたと思えば、今度はこのわたしに、決
　　　　　　　　　　闘を申しこむとかなんとかいう話だ。一体
　　　　　　　　　　なんのためかな？　ふくれたり、鼻を鳴ら
　　　　　　　　　　したり、新形式論をまくし立てたり……。
　　　　　　　　　　いや、座席はまだたっぷりあいている。新
　　　　　　　　　　しいものにも古いものにもね、——何も押
　　　　　　　　　　し合うことはない。

マーシャ　　　　　　それに嫉妬《しっと》も手伝ってね。でも
　　　　　　　　　　、わたしの知った事じゃないわ。

［＃ここから３字下げ］

間。ヤーコフが左手から右手へ、トランクをさげて通る。ニーナが登場して、窓ぎわに立ちどまる。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

マーシャ　　　　　　わたしのあの教師《せんせい》は、大して
　　　　　　　　　　お利口さんじゃないけれど、なかなかいい
　　　　　　　　　　人だし、貧乏だし、それにとてもわたしを
　　　　　　　　　　愛してくれるの。いじらしくなりますわ。
　　　　　　　　　　年とったお母さんも、可哀《かわい》そう
　　　　　　　　　　だし、では、ご機嫌よろしゅう。わるくお
　　　　　　　　　　思いにならないでね。（かたく握手する）
　　　　　　　　　　ご親切にいろいろありがとうございました
　　　　　　　　　　。ご本が出たらお送りくださいね、きっと
　　　　　　　　　　署名なすってね。ただ、「わが敬愛する」
　　　　　　　　　　なんてしないで、ただあっさり、「身もと
　　　　　　　　　　も不明、なんのためこの世に生きるかも知
　　　　　　　　　　らぬマリヤへ」としてね。さようなら！
　　　　　　　　　　（退場）

ニーナ　　　　　　　（握り挙《こぶし》にした片手を、トリゴ
　　　　　　　　　　ーリンのほうへさしのべながら）偶数？
　　　　　　　　　　奇数？

トリゴーリン　　　　偶数。

ニーナ　　　　　　　（ため息をついて）いいえ。手の中には、
　　　　　　　　　　豆が一つしかないの。わたし占ってみたの
　　　　　　　　　　よ、女優になろうか、なるまいかって。誰
　　　　　　　　　　か、こうしたらと言ってくれるといいんだ
　　　　　　　　　　けれど。

トリゴーリン　　　　そんなこと、言える人があるものですか。
　　　　　　　　　　（間）

ニーナ　　　　　　　お別れですわね……多分もう二度とお目に
　　　　　　　　　　かかる時はないでしょう。どうぞ記念に、
　　　　　　　　　　この小さなロケットをお受けになって。あ
　　　　　　　　　　なたの頭文字《かしらもじ》を彫らせまし
　　　　　　　　　　たの……こちら側には『昼と夜』と、あな
　　　　　　　　　　たのご本の題をね。

トリゴーリン　　　　じつに優美だ！　（ロケットに接吻《せっ
　　　　　　　　　　ぷん》する）何よりの贈物です！

ニーナ　　　　　　　時にはわたしのことも思い出してね。

トリゴーリン　　　　思い出しますとも。その思い出すのは、あ
　　　　　　　　　　の晴れた日のあなたの姿でしょうよ——覚
　　　　　　　　　　えてますか？——一週間まえ、あなたが薄
　　　　　　　　　　色の服を着てらした時のことを……いろん
　　　　　　　　　　な話をしましたっけね……それにあの時、
　　　　　　　　　　ベンチに白い鴎《かもめ》がのせてあった
　　　　　　　　　　。

ニーナ　　　　　　　（物思わしげに）ええ、かもめが……（間
　　　　　　　　　　）もうお話してはいられません、人が来ま
　　　　　　　　　　す。……お発ちになる前、二分だけわたし
　　　　　　　　　　にくださいまし、お願い。……（左手へ退
　　　　　　　　　　場。同時に右手から、アルカージナ、燕尾
　　　　　　　　　　服《えんびふく》に星章をつけたソーリン
　　　　　　　　　　、それから荷作りに大童《おおわらわ》の
　　　　　　　　　　ヤーコフが登場）

アルカージナ　　　　お年寄りは、ここにじっとしてらっしゃい
　　　　　　　　　　よ。そんなリョーマチのくせに、お客に出
　　　　　　　　　　あるく法があるものですか？　（トリゴー
　　　　　　　　　　リンに）いま出て行ったのは誰？　ニーナ
　　　　　　　　　　ですの？

トリゴーリン　　　　ええ。

アルカージナ　　　　失礼《パルドン》、お邪魔しましたわね…
　　　　　　　　　　…（腰をおろす）さあ、どうにかすっかり
　　　　　　　　　　片づいた。へとへとよ。

トリゴーリン　　　　（ロケットの字を読む）『昼と夜』、百二
　　　　　　　　　　十一ページ、十一と二行。

ヤーコフ　　　　　　（テーブルの上を片づけながら）釣竿《つ
　　　　　　　　　　りざお》もやはり入れますんで？

トリゴーリン　　　　そう、あれはまだ要《い》るからね。本は
　　　　　　　　　　みな誰かにやってくれ。

ヤーコフ　　　　　　かしこまりました。

トリゴーリン　　　　（ひとりごと）百二十一ページ、十一と二
　　　　　　　　　　行。はて、あすこには何が書いてあったっ
　　　　　　　　　　け？　（アルカージナに）この家に、わた
　　　　　　　　　　しの本があったかしら？

アルカージナ　　　　兄の書斎の、隅《すみ》っこの棚にありま
　　　　　　　　　　すよ。

トリゴーリン　　　　百二十一ページと……（退場）

アルカージナ　　　　ね、ほんとにペトルーシャ、ここにじっと
　　　　　　　　　　していらっしゃいよ……

ソーリン　　　　　　お前たちが発《た》って行くと、あとにぽ
　　　　　　　　　　つねんとしてるのは辛《つら》くてな。

アルカージナ　　　　じゃ、町へ行けばどうなの？

ソーリン　　　　　　格別どうということもないが、だがやっぱ
　　　　　　　　　　りな……（笑う）県会の建物の建て前もあ
　　　　　　　　　　るし、とまあいった次第でな。……せめて
　　　　　　　　　　一時間でも二時間でも、この穴ごもりのカ
　　　　　　　　　　マス（［＃割り注］訳注　シチェドリーン
　　　　　　　　　　の童話『かしこいカマス』より［＃割り注
　　　　　　　　　　終わり］）みたいな生活から飛び出したい
　　　　　　　　　　んだよ。そうでもしないと、わたしは古パ
　　　　　　　　　　イプみたいに、棚のすみですっかり埃《ほ
　　　　　　　　　　こり》まみれだからな。一時に馬車を回す
　　　　　　　　　　ように言いつけたから、いっしょに出かけ
　　　　　　　　　　よう。

アルカージナ　　　　（間をおいて）じゃ、ここでお暮しなさい
　　　　　　　　　　ね、退屈がらずに、お風邪《かぜ》を召さ
　　　　　　　　　　ずにね。あの子の監督をおねがいしますよ
　　　　　　　　　　。よく気をつけてやってね。導いてやって
　　　　　　　　　　ね。（間）こうしてわたしが発ってゆけば
　　　　　　　　　　、なぜコンスタンチンがピストル自殺をし
　　　　　　　　　　ようとしたのか、それも知らずじまいにな
　　　　　　　　　　るのね。どうやらわたしには、おもな原因
　　　　　　　　　　は嫉妬《しっと》だったような気がする。
　　　　　　　　　　だから一刻も早くトリゴーリンを、ここか
　　　　　　　　　　ら連れ出したほうがいいのよ。

ソーリン　　　　　　さあ、なんと言ったものかな？　ほかにも
　　　　　　　　　　原因はあったろうさ。論より証拠——若盛
　　　　　　　　　　りの頭のある男が、草ぶかい田舎《いなか
　　　　　　　　　　》ぐらしをしていて、金もなければ地位も
　　　　　　　　　　なく、未来の望みもないときてるんだから
　　　　　　　　　　な。なんにもすることがない。そのぶらぶ
　　　　　　　　　　ら暮しが、恥ずかしくもあり空怖ろしくも
　　　　　　　　　　あるんだな。わたしはあの子が可愛《かわ
　　　　　　　　　　い》くてならんし、あれのほうでもわたし
　　　　　　　　　　に懐《なつ》いてくれるが、だがやっぱり
　　　　　　　　　　早い話が、あれは自分がこの家の余計もん
　　　　　　　　　　だ、居候《いそうろう》だ、食客だという
　　　　　　　　　　気がするんだ。論より証拠、だいいち自尊
　　　　　　　　　　心がな……

アルカージナ　　　　あの子には、ほんとに泣かされるわ！　（
　　　　　　　　　　考えこんで）勤めに出てみたらどうかしら
　　　　　　　　　　……

ソーリン　　　　　　（口笛を鳴らし、やがてためらいがちに）
　　　　　　　　　　わたしはね、いちばんの上策は、もしもお
　　　　　　　　　　前が……あの子に少しばかり金を持たして
　　　　　　　　　　やったらどうかと思うよ。何はさておき、
　　　　　　　　　　あの子も人並の身なりはせにゃならんし、
　　　　　　　　　　とまあいった次第でな。見てごらん、着た
　　　　　　　　　　きり雀《すずめ》のぼろフロックを、これ
　　　　　　　　　　でもう三年ごし引きずって、外套《がいと
　　　　　　　　　　う》も着てない始末じゃないか。……（笑
　　　　　　　　　　う）それに若い者にゃ、少し気晴らしをさ
　　　　　　　　　　せるもよかろうて。……ひとつ外国へでも
　　　　　　　　　　出してみるかな。……なあに、大して金も
　　　　　　　　　　かかるまい。

アルカージナ　　　　でもねえ。……まあ、服ぐらいは作ってや
　　　　　　　　　　れるでしょうけど、外国まではねえ。……
　　　　　　　　　　いいえ、今のところは、服だって駄目だわ
　　　　　　　　　　。（きっぱりと）わたし、お金がありませ
　　　　　　　　　　ん！

［＃ここから３字下げ］

ソーリン笑う。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

アルカージナ　　　　ないのよ！

ソーリン　　　　　　（口笛を鳴らす）なるほどな。いやご免ご
　　　　　　　　　　免、堪忍《かに》しておくれ。お前の言う
　　　　　　　　　　とおりだろうとも。……お前は気前のいい
　　　　　　　　　　、鷹揚《おうよう》な女だからな。

アルカージナ　　　　（涙ぐんで）わたし、お金がありません！

ソーリン　　　　　　わたしに金さえありゃ、論より証拠、ぽん
　　　　　　　　　　とあれに出してやるがな、あいにくとすっ
　　　　　　　　　　てけてん、五銭玉一つない。（笑う）わた
　　　　　　　　　　しの恩給は、のこらず支配人が取りあげお
　　　　　　　　　　って、農作だ牧畜だ蜜蜂《みつばち》だと
　　　　　　　　　　使いまわす。そこでわたしの金は、元も子
　　　　　　　　　　もなくなっちまう。蜂は死ぬ、牛もくたば
　　　　　　　　　　る。馬だって、ついぞわたしに出してくれ
　　　　　　　　　　たためしがない。……

アルカージナ　　　　それはわたしだって、お金のないことはな
　　　　　　　　　　いけれど、なにせ女優ですものね。衣裳《
　　　　　　　　　　いしょう》代だけでも身代かぎりしちまう
　　　　　　　　　　わ。

ソーリン　　　　　　お前はいい子だ、可愛い女だ。……わたし
　　　　　　　　　　は尊敬しているよ。……そうとも。……だ
　　　　　　　　　　が、わたしはまた、どうもなんだか……（
　　　　　　　　　　よろめく）目まいがする。（テーブルにつ
　　　　　　　　　　かまる）気持が悪い、とまあいった次第で
　　　　　　　　　　な。

アルカージナ　　　　（仰天して）ペトルーシャ！　（懸命に彼
　　　　　　　　　　をささえながら）ペトルーシャ、しっかり
　　　　　　　　　　して……（叫ぶ）誰か来て。誰か早く！…
　　　　　　　　　　…

［＃ここから３字下げ］

頭に包帯したトレープレフと、メドヴェージェンコ登場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

アルカージナ　　　　気持が悪くなったのよ！

ソーリン　　　　　　いやなに、なんでもない……（ほほえんで
　　　　　　　　　　、水を飲む）もう直った……とまあいった
　　　　　　　　　　次第でな。……

トレープレフ　　　　（母親に）びっくりしないで、ママ、べつ
　　　　　　　　　　に危険はないから。伯父さんは近ごろちょ
　　　　　　　　　　いちょい、これが起るんです。（伯父に）
　　　　　　　　　　伯父さん、少し横になるんですね。

ソーリン　　　　　　うん、ちょっぴりな。……だが、とにかく
　　　　　　　　　　町へは行くよ。……ひと休みして出かける
　　　　　　　　　　……論より証拠だ……（杖《つえ》にすが
　　　　　　　　　　りながら歩く）

メドヴェージェンコ　（腕を支えてやりながら）こんな謎々《な
　　　　　　　　　　ぞなぞ》がありますよ。朝は四つ足、昼は
　　　　　　　　　　二本足、夕方は三本足……

ソーリン　　　　　　（笑う）そのとおり。そして、夜にゃ仰向
　　　　　　　　　　けか。いやありがとう、もう一人で行けま
　　　　　　　　　　すよ……

メドヴェージェンコ　ほらまた、そんな遠慮を！……（彼とソー
　　　　　　　　　　リン退場）

アルカージナ　　　　ああ、びっくりした！

トレープレフ　　　　伯父さんには、田舎ぐらしが毒なんだ。く
　　　　　　　　　　さくさするんですよ。もしママが、気前よ
　　　　　　　　　　くポンと千五百か二千貸してあげたら、あ
　　　　　　　　　　の人まる一年は町で暮せるのになあ。

アルカージナ　　　　わたしにお金があるもんですか。わたしは
　　　　　　　　　　女優で、銀行家じゃないもの。

［＃ここから３字下げ］

間。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

トレープレフ　　　　ママ、包帯を換えてくれませんか。あなた
　　　　　　　　　　は上手《じょうず》だから。

アルカージナ　　　　（薬品戸棚からヨードホルムと包帯箱を取
　　　　　　　　　　り出す）ドクトルは遅いこと。

トレープレフ　　　　十時ごろって言ってたのに、もうお午《ひ
　　　　　　　　　　る》だ。

アルカージナ　　　　お坐《すわ》り。（彼の頭から包帯をとる
　　　　　　　　　　）まるでターバンをしてるみたいだねえ。
　　　　　　　　　　きのう、よそ者が台所へ来て、お前のこと
　　　　　　　　　　をなに人《じん》かと聞いていたっけ。で
　　　　　　　　　　も、ほとんどもう癒《なお》ったようだね
　　　　　　　　　　。あとはほんのちょっぴりだ。（彼の頭に
　　　　　　　　　　接吻《せっぷん》する）わたしがいなくな
　　　　　　　　　　ってから、またパチンとやりはしないだろ
　　　　　　　　　　うね？

トレープレフ　　　　やりゃしませんよ、ママ。あのとき僕、と
　　　　　　　　　　てつもなく絶望しちまって、つい自制でき
　　　　　　　　　　なかったんです。もう二度とやりはしませ
　　　　　　　　　　ん。（母の手に接吻する）ああ、この手—
　　　　　　　　　　—お母さんは、じつにまめな人ですね。お
　　　　　　　　　　ぼえてますよ、ずっと昔のこと、あなたが
　　　　　　　　　　まだ国立の劇場に出ていたころ、——僕は
　　　　　　　　　　ほんの子供だったけれど、——アパートの
　　　　　　　　　　中庭でけんかがあって、店子《たなこ》の
　　　　　　　　　　洗濯女がひどくなぐられたことがあったっ
　　　　　　　　　　け。ね、おぼえてますか？　気絶したその
　　　　　　　　　　女を、みんなで抱きあげて……それからお
　　　　　　　　　　母さんは、しじゅうその女を見舞いに行っ
　　　　　　　　　　て、薬を持ってってやったり、子供たちに
　　　　　　　　　　桶《おけ》で行水を使わしたりしましたね
　　　　　　　　　　。あれ、おぼえてないかしら？

アルカージナ　　　　忘れたわ。（新しい包帯を巻いてやる）

トレープレフ　　　　うちと同じアパートに、あのころバレリー
　　　　　　　　　　ナが二人住んでいて……よくお母さんのと
　　　　　　　　　　ころへ、コーヒーを飲みに来たっけ……

アルカージナ　　　　それは、おぼえていますよ。

トレープレフ　　　　ふたりとも、じつに信心ぶかい人でしたね
　　　　　　　　　　。（間）このごろ、あれ以来の幾日かとい
　　　　　　　　　　うもの、僕はまるで子供のころに返ったみ
　　　　　　　　　　たいに、甘えたいような気持で、ただもう
　　　　　　　　　　一すじに、お母さんを愛しています。あな
　　　　　　　　　　たのほかに、今じゃ僕には誰ひとりいない
　　　　　　　　　　んです。ただね、なんだってお母さんは、
　　　　　　　　　　あんな男に引きずり回されるんです、なぜ
　　　　　　　　　　です？

アルカージナ　　　　お前は、あの人がわからないんだよ。えコ
　　　　　　　　　　ンスタンチン。あの人は、人格の高いりっ
　　　　　　　　　　ぱな人ですよ……

トレープレフ　　　　ところが、僕が決闘を申しこもうとしてい
　　　　　　　　　　ると人から聞くと、人格者たちまち変じて
　　　　　　　　　　卑怯者《ひきょうもの》になっちまったっ
　　　　　　　　　　てね。いよいよ発《た》つんでしょう。見
　　　　　　　　　　ぐるしい脱走だ！

アルカージナ　　　　ばかをお言い！　ここを発つように頼んだ
　　　　　　　　　　のは、このわたしですよ。

トレープレフ　　　　人格の高いりっぱな人か！　やっこさんの
　　　　　　　　　　おかげで、このとおり母子《おやこ》げん
　　　　　　　　　　かになりかけてるというのに、今ごろご本
　　　　　　　　　　人は客間か庭のどこかで、われわれをせせ
　　　　　　　　　　ら笑っていることでしょうよ……ニーナを
　　　　　　　　　　大いに啓発して、彼こそ天才だということ
　　　　　　　　　　を、徹底的にあの子の胸に叩《たた》きこ
　　　　　　　　　　もうと、大童の最中でしょうよ。

アルカージナ　　　　お前は、わたしに厭《いや》がらせを言う
　　　　　　　　　　のが楽しみなんだね。わたしはあの人を尊
　　　　　　　　　　敬しているのだから、わたしの前じゃあの
　　　　　　　　　　人のことを悪く言わないでもらいたいね。

トレープレフ　　　　ところが僕は尊敬していない。お母さんは
　　　　　　　　　　、僕にまであの男を天才だと思わせたいん
　　　　　　　　　　でしょうが、僕は嘘《うそ》がつけないも
　　　　　　　　　　んで失礼——あいつの作品にゃ虫酸《むし
　　　　　　　　　　ず》が走りますよ。

アルカージナ　　　　それが妬《ねた》みというものよ。才能の
　　　　　　　　　　ないくせに野心ばかりある人にゃ、ほんも
　　　　　　　　　　のの天才をこきおろすほかに道はないから
　　　　　　　　　　ね。結構なお慰みですよ！

トレープレフ　　　　（皮肉に）ほんものの天才か！　（憤然と
　　　　　　　　　　して）こうなったらもう言っちまうが、僕
　　　　　　　　　　の才能は、あんたがたの誰よりも上なんだ
　　　　　　　　　　！　（頭の包帯をむしりとる）あんたがた
　　　　　　　　　　古い殻《から》をかぶった連中が、芸術の
　　　　　　　　　　王座にのしあがって、自分たちのすること
　　　　　　　　　　だけが正しい、本物だと極《き》めこんで
　　　　　　　　　　、あとのものを迫害し窒息させるんだ！
　　　　　　　　　　そんなもの、誰が認めてやるもんか！　断
　　　　　　　　　　じて認めないぞ、あんたも、あいつも！

アルカージナ　　　　デカダン……！

トレープレフ　　　　さっさと古巣の劇場《こや》へ行って、気
　　　　　　　　　　の抜けたやくざ芝居にでも出るがいいや！

アルカージナ　　　　憚《はばか》りながら、そんな芝居に出た
　　　　　　　　　　ことはありませんよ。わたしにはかまわな
　　　　　　　　　　いどくれ！　お前こそ、やくざな茶番《ボ
　　　　　　　　　　ードビル》ひとつ書けないくせに。キーエ
　　　　　　　　　　フの町人！　居候《いそろう》！

トレープレフ　　　　けちんぼ！

アルカージナ　　　　宿なし！

［＃ここから３字下げ］

トレープレフ腰をおろして、静かに泣く。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

アルカージナ　　　　いくじなし！　（興奮してふらふら歩きな
　　　　　　　　　　がら）泣くんじゃない。泣かないでもいい
　　　　　　　　　　の。……（泣く）いいんだよ。……（息子
　　　　　　　　　　《むすこ》の額や頬や頭にキスする）可愛
　　　　　　　　　　いわたしの子、堪忍《かに》しておくれ。
　　　　　　　　　　……罪ぶかいお母さんを赦《ゆる》してお
　　　　　　　　　　くれ。不仕合せなわたしを赦しておくれ。

トレープレフ　　　　（母親を抱いて）僕の気持がお母さんにわ
　　　　　　　　　　かったらなあ！　僕は何もかも、すっかり
　　　　　　　　　　失《な》くしてしまった。あの人は僕を愛
　　　　　　　　　　していない、僕はもう書く気がしない……
　　　　　　　　　　希望がみんな消えちまったんだ……

アルカージナ　　　　そう気を落すんじゃない。……みんなうま
　　　　　　　　　　く行きますよ。あの人は今すぐ発っていく
　　　　　　　　　　し、あの子もまたお前が好きになるよ。（
　　　　　　　　　　息子の涙を拭《ふ》いてやる）さ、もうい
　　　　　　　　　　い。これで仲直りよ。

トレープレフ　　　　（母親の手にキスして）ええ、ママ。

アルカージナ　　　　（やさしく）あの人とも仲直りしてね。決
　　　　　　　　　　闘なんぞいるものかね。……ね、そうだね
　　　　　　　　　　。

トレープレフ　　　　え、いいです。……ただね、ママ、あの男
　　　　　　　　　　と顔を合せないで済むようにしてください
　　　　　　　　　　。思っただけでも辛いんです……とても駄
　　　　　　　　　　目なんです……（トリゴーリン登場）ほら
　　　　　　　　　　来た。僕出ていきます。……（手早く薬品
　　　　　　　　　　を戸棚にしまう）包帯はいずれ、ドクトル
　　　　　　　　　　にしてもらいます……

トリゴーリン　　　　（本のページをさがしながら）百二十一ペ
　　　　　　　　　　ージ……十一と二行。……これだ。……（
　　　　　　　　　　読む）「もしいつか、わたしの命がお入り
　　　　　　　　　　用になったら、いらして、お取りになって
　　　　　　　　　　ね」

［＃ここから３字下げ］

トレープレフ、床の包帯をひろって退場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

アルカージナ　　　　（時計をちらと見て）そろそろ馬車が来ま
　　　　　　　　　　すよ。

トリゴーリン　　　　（ひとりごと）もしいつか、わたしの命が
　　　　　　　　　　お入り用になったら、いらして、お取りに
　　　　　　　　　　なってね。

アルカージナ　　　　あなたの荷づくりは、もうできたでしょう
　　　　　　　　　　ね？

トリゴーリン　　　　（もどかしげに）ええ、ええ……（考えこ
　　　　　　　　　　んで）この清らかな心の呼びかけのなかに
　　　　　　　　　　、なぜおれには悲哀の声が聞えるんだろう
　　　　　　　　　　。なぜおれの胸は、切ないほどに緊《し》
　　　　　　　　　　めつけられるんだろう？……もしいつか、
　　　　　　　　　　わたしの命がお入り用になったら、いらし
　　　　　　　　　　て、お取りになってね。（アルカージナに
　　　　　　　　　　）もう一日、いようじゃないか！

［＃ここから３字下げ］

アルカージナ、かぶりを振る。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

トリゴーリン　　　　ね、いようじゃないか！

アルカージナ　　　　あなた、何に後ろ髪を引かれてらっしゃる
　　　　　　　　　　か、わたしちゃんと知っていますよ。でも
　　　　　　　　　　、自制力がなくちゃ駄目。ちょっぴり酔っ
　　　　　　　　　　てらっしゃる、正気におなりなさい。

トリゴーリン　　　　君もひとつ正気になってもらいたいな。聡
　　　　　　　　　　明《そうめい》な、分別のある人間になっ
　　　　　　　　　　て、お願いだから、この問題をじっくり見
　　　　　　　　　　ておくれ、真実の友としてね。……（女の
　　　　　　　　　　手を握って）君は犠牲になれる人だ。……
　　　　　　　　　　僕の親友になってくれ、僕を行かせておく
　　　　　　　　　　れ……

アルカージナ　　　　（すっかり興奮して）そんなに夢中なの？

トリゴーリン　　　　どうしても惹《ひ》きつけられるんだ！
　　　　　　　　　　ひょっとすると、これこそ僕の求めていた
　　　　　　　　　　ものかも知れない。

アルカージナ　　　　たかが田舎娘の愛がね？　あなたはなんて
　　　　　　　　　　自分を知らないんでしょうね！

トリゴーリン　　　　時どき人間は、歩きながら眠ることがある
　　　　　　　　　　。まさにそのとおりこの僕も、こうして君
　　　　　　　　　　と話をしていながら、じつはうとうとして
　　　　　　　　　　、あの子の夢を見ているようなものだ。…
　　　　　　　　　　…なんともいえない甘い夢想の、とりこに
　　　　　　　　　　なってしまったんだ。……行かせておくれ
　　　　　　　　　　。

アルカージナ　　　　（ふるえながら）厭《いや》、厭。……わ
　　　　　　　　　　たしは平凡な女だから、そんな話は、お門
　　　　　　　　　　《かど》ちがいよ。……いじめないで、わ
　　　　　　　　　　たしを、ボリース。……わたし、こわい…
　　　　　　　　　　…

トリゴーリン　　　　その気になりさえすりゃ、非凡な女になれ
　　　　　　　　　　るんだ。幻の世界へ連れていってくれるよ
　　　　　　　　　　うな、若々しい、うっとりさせる、詩的な
　　　　　　　　　　愛——この世でただそれだけが、幸福を与
　　　　　　　　　　えてくれるのだ！　そんな愛を、僕はまだ
　　　　　　　　　　味わったことがない。……若いころは、雑
　　　　　　　　　　誌社へお百度をふんだり、貧乏と闘ったり
　　　　　　　　　　で、そんなひまがなかった。今やっとそれ
　　　　　　　　　　が、その愛が、ついにやってきて、手招き
　　　　　　　　　　しているんだ。……それを避けなければな
　　　　　　　　　　らん理由が、どこにある？

アルカージナ　　　　（憤然と）気がちがったのね！

トリゴーリン　　　　それでもかまわん。

アルカージナ　　　　あんたがたは今日、言い合せたように、寄
　　　　　　　　　　ってたかってわたしをいじめるのね！　（
　　　　　　　　　　泣く）

トリゴーリン　　　　（自分の頭をかかえて）わかってくれない
　　　　　　　　　　！　てんでわかろうとしないんだ！

アルカージナ　　　　ほんとにわたし、そんなに老《ふ》けて、
　　　　　　　　　　みっともなくなってしまったの？　わたし
　　　　　　　　　　の前で、ほかの女の話を大っぴらにやれる
　　　　　　　　　　なんて！　（男を抱いてキスする）ああ、
　　　　　　　　　　あなたは正気じゃないのよ！　わたしの大
　　　　　　　　　　事な、いとしいひと……。あなたこそ——
　　　　　　　　　　わたしの一生の最後のページよ！　（ひざ
　　　　　　　　　　まずく）わたしの悦《よろこ》び、わたし
　　　　　　　　　　の誇り、わたしの無量の幸福……（彼の膝
　　　　　　　　　　《ひざ》を抱く）たとえ一時間でもあなた
　　　　　　　　　　に棄《す》てられたら、わたしは生きちゃ
　　　　　　　　　　いない、気がちがってしまう。わたしのす
　　　　　　　　　　ばらしい、輝かしい人、わたしの王さま…
　　　　　　　　　　…

トリゴーリン　　　　人が来ますよ。（女をたすけ起す）

アルカージナ　　　　いいじゃないの。あなたを愛しているこの
　　　　　　　　　　気持が、誰に恥ずかしいものですか。（男
　　　　　　　　　　の両手にキスする）わたしの大事な宝もの
　　　　　　　　　　、向う見ずな悪いひと、あなたはばかなま
　　　　　　　　　　ねがしたいんでしょうけれど、わたしは厭
　　　　　　　　　　《いや》です、放しません。……（笑う）
　　　　　　　　　　あなたは、わたしのものなの、わたしのも
　　　　　　　　　　のよ。この額《ひたい》もわたしのもの。
　　　　　　　　　　この眼もわたしのもの。このきれいな、絹
　　　　　　　　　　のような髪の毛も、やっぱりわたしのもの
　　　　　　　　　　。……あなたはすっかり、わたしのもの。
　　　　　　　　　　あなたは本当に天才で、聡明で、今のどの
　　　　　　　　　　作家よりもりっぱで、ロシアのただ一つの
　　　　　　　　　　希望なのよ。……あなたの筆には、まごこ
　　　　　　　　　　ろがこもって、じつにすっきりして、新鮮
　　　　　　　　　　で、おまけに健康なユーモアがあるわ。…
　　　　　　　　　　…あなたはほんの一｜刷毛《はけ》で、人
　　　　　　　　　　物や風景のカン所が出せるのね。あなたの
　　　　　　　　　　人物は生きているわ。あなたのものを読ん
　　　　　　　　　　で、夢中になれずにいられるものですか！
　　　　　　　　　　　これがお世辞だと思うの？　わたしのお
　　　　　　　　　　べっかなの？　さ、わたしの眼を見てちょ
　　　　　　　　　　うだい……よく見て……。わたしが嘘《う
　　　　　　　　　　そ》つきに見えて？　そらごらんなさい、
　　　　　　　　　　あなたの偉さのわかるのは、わたしだけよ
　　　　　　　　　　。本当のことをあなたに言うのも、わたし
　　　　　　　　　　だけよ、ね、大事な、可愛《かわい》いひ
　　　　　　　　　　と。……発《た》つでしょうね？　そうで
　　　　　　　　　　しょ？　わたしを棄てはしないことね？

トリゴーリン　　　　おれには自分の意志というものがない。…
　　　　　　　　　　…おれはついぞ、自分の意志をもった例《
　　　　　　　　　　ため》しがないのだ。……気の抜けた、し
　　　　　　　　　　んのない、いつも従順な男——一体これで
　　　　　　　　　　女にもてるものだろうか？　さ、つかまえ
　　　　　　　　　　て、どこへなり連れて行ってくれ。ただね
　　　　　　　　　　、一足もそばから放すんじゃないぞ……

アルカージナ　　　　（ひとりごと）これで、わたしのものだ。
　　　　　　　　　　（けろりと、どこを風が吹くといった調子
　　　　　　　　　　で）でもね、もしお望みなら、お残りにな
　　　　　　　　　　ってもいいことよ。わたしは一人で発つか
　　　　　　　　　　ら、あなたはあとで、一週間もしたら帰っ
　　　　　　　　　　てらっしゃい。あなたはべつに、急ぐ用も
　　　　　　　　　　ないんですものね。

トリゴーリン　　　　いや、こうなったらいっしょに発とう。

アルカージナ　　　　お好きなように。いっしょならいっしょで
　　　　　　　　　　いいわ。……（間）

［＃ここから３字下げ］

トリゴーリン、手帳に書きこむ。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

アルカージナ　　　　なんですの、それ？

トリゴーリン　　　　けさ、うまい言い方を聞いたもんでね。「
　　　　　　　　　　処女の林……」だとさ。これは使える。（
　　　　　　　　　　伸びをする）じゃ、出かけるんだね？　ま
　　　　　　　　　　た汽車か、停車場、食堂、カツレツ、おし
　　　　　　　　　　ゃべり……

シャムラーエフ　　　（登場）まことに残念ながら、申しあげま
　　　　　　　　　　す、馬車をお回ししました。どうぞ奥さま
　　　　　　　　　　、停車場へお出かけの時刻です。汽車は二
　　　　　　　　　　時五分に着きます。それではアルカージナ
　　　　　　　　　　さま、おそれいりますが、役者のスズダー
　　　　　　　　　　リツェフが今どこにいますか、お忘れなく
　　　　　　　　　　お調べねがいますよ。生きているかな？
　　　　　　　　　　達者ですかな？　むかしはいっしょに飲ん
　　　　　　　　　　だものでしたっけ。あの『郵便強盗』（［
　　　　　　　　　　＃割り注］訳注　十九世紀末のメロドラマ
　　　　　　　　　　の題［＃割り注終わり］）なんかやらせる
　　　　　　　　　　と、天下一品でしたな。……あれといっし
　　　　　　　　　　ょに、さよう、エリサヴェトグラードで悲
　　　　　　　　　　劇役者のイズマイロフが出ておりましたが
　　　　　　　　　　、これまたなかなかの傑物《えらぶつ》で
　　　　　　　　　　してな。……いや奥さま、そうお急ぎにな
　　　　　　　　　　ることはありません、まだ五分は大丈夫で
　　　　　　　　　　す。あるメロドラマでね、連中が謀叛人《
　　　　　　　　　　むほんにん》をやった時でしたが、不意に
　　　　　　　　　　捕《と》り手が踏みこむところで「残念、
　　　　　　　　　　ワナにかかったか」と言うべきところを、
　　　　　　　　　　イズマイロフは——「残念、ナワにかかっ
　　　　　　　　　　たか」とやってね……（哄笑《こうしょう
　　　　　　　　　　》する）ナワにかかったか！

［＃ここから３字下げ］

彼がしゃべっている間に、ヤーコフは旅行カバンの世話をやき、小間使は帽子やマントやコウモリや手袋を、アルカージナに持ってくる。皆々アルカージナの身支度を手伝う。左手のドアから料理人がのぞきこみ、しばらくためらった後、おずおずとはいってくる。ポリーナ、やがてソーリン、メドヴェージェンコ登場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ポリーナ　　　　　　（手かごを持って）このスモモを、どうぞ
　　　　　　　　　　道中めしあがって……。大そう甘うござい
　　　　　　　　　　ますよ。何か変ったものも、欲しくおなり
　　　　　　　　　　かも知れませんから……

アルカージナ　　　　まあ御《ご》親切にね。ポリーナさん。

ポリーナ　　　　　　ご機嫌よろしゅう、奥さま！　不行届きの
　　　　　　　　　　ことがありましたら、お赦しくださいまし
　　　　　　　　　　。（泣く）

アルカージナ　　　　（彼女を抱いて）みんな結構でしたよ、結
　　　　　　　　　　構でしたよ。ただその、泣くのがいけない
　　　　　　　　　　わ。

ポリーナ　　　　　　わたくしたちの時は過ぎて行きますもの！

アルカージナ　　　　仕方のないことよ！

ソーリン　　　　　　（トンビに中折れ帽をかぶり、ステッキを
　　　　　　　　　　持って左手のドアから登場。部屋を横ぎり
　　　　　　　　　　ながら）お前、もう時間だよ。おくれたら
　　　　　　　　　　事だからな、早い話が。わたしは行って乗
　　　　　　　　　　りこんでるよ。（退場）

メドヴェージェンコ　僕は停車場まで歩いて行きます……お見送
　　　　　　　　　　りにね。ひとつ急いで……（退場）

アルカージナ　　　　さようなら、皆さん。……おたがい無事で
　　　　　　　　　　達者だったら、また夏お目にかかりましょ
　　　　　　　　　　うね。……（小間使、ヤーコフ、料理人、
　　　　　　　　　　それぞれ彼女の手にキスする）わたしを忘
　　　　　　　　　　れないでね。（料理人に一ルーブリやって
　　　　　　　　　　）この一ルーブリ、三人でお分け。

料理人　　　　　　　どうもありがとうございます、奥さま。道
　　　　　　　　　　中ごぶじで！　何かとよくして頂きまして
　　　　　　　　　　！

ヤーコフ　　　　　　どうぞ、ご息災で！

シャムラーエフ　　　ちょいと一筆お手紙を頂きたいもので！
　　　　　　　　　　ご機嫌よう、トリゴーリンさん！

アルカージナ　　　　どこだろう、コンスタンチンは？　わたし
　　　　　　　　　　は発《た》ちますって、あの子に言ってお
　　　　　　　　　　くれ。お別れをしなくては。じゃ皆さん、
　　　　　　　　　　悪く思わないでね。（ヤーコフに）コック
　　　　　　　　　　さん一ルーブリ渡しましたよ。あれは三人
　　　　　　　　　　分だからね。

［＃ここから３字下げ］

一同右手へ退場。舞台空虚。舞台うらで、見送りによくあるざわめき。小間使がもどってきて、テーブルからスモモの籠《かご》をとり、ふたたび退場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

トリゴーリン　　　　（もどってくる）ステッキを忘れたぞ。た
　　　　　　　　　　しかテラスにあるはずだが。（行きかけて
　　　　　　　　　　、左手のドアのところで、はいってくるニ
　　　　　　　　　　ーナに出あう）ああ、あなたか？　われわ
　　　　　　　　　　れはもう発ちます。

ニーナ　　　　　　　まだお目にかかれるような気が、していま
　　　　　　　　　　したわ。（興奮して）トリゴーリンさん、
　　　　　　　　　　わたしきっぱり決心しました。賽《さい》
　　　　　　　　　　は投げられたんです、わたし舞台に立ちま
　　　　　　　　　　す。あしたはもう、ここにはいません。父
　　　　　　　　　　のところを出て、一切をすてて、新しい生
　　　　　　　　　　活を始めます。……わたしも、あなたと同
　　　　　　　　　　じに……モスクワへ発ちます。あちらでお
　　　　　　　　　　目にかかりましょう。

トリゴーリン　　　　（ちらと後ろを振返って）宿は、「スラヴ
　　　　　　　　　　ャンスキイ・バザール」（［＃割り注］訳
　　　　　　　　　　注　モスクワの有名なホテル［＃割り注終
　　　　　　　　　　わり］）になさい。……そしてすぐ僕に知
　　　　　　　　　　らせて……モルチャーノフカ、グロホーリ
　　　　　　　　　　スキイ館。……いまは急ぐから……（間）

ニーナ　　　　　　　もう一分だけ……

トリゴーリン　　　　（小声で）あなたは、なんてすばらしい…
　　　　　　　　　　…。ああ、またすぐ会えるかと思うと、じ
　　　　　　　　　　つに幸福だ！　（彼女は男の胸にもたれか
　　　　　　　　　　かる）僕はまた見られるのだ——この魅す
　　　　　　　　　　るような眼を、なんとも言えぬ美しい優し
　　　　　　　　　　い微笑を……この柔和な顔だちを、天使の
　　　　　　　　　　ように清らかな表情を。……僕の大事な…
　　　　　　　　　　…（長いキス）

［＃ここで字下げ終わり］

［＃地から２字上げ］——幕——

［＃１字下げ］◯第三幕と第四幕のあいだに二年経過。

［＃改ページ］

［＃５字下げ］第四幕［＃「第四幕」は中見出し］

［＃ここから３字下げ］

ソーリン家の客間の一つ。今はトレープレフが仕事部屋に使っている。右手と左手にドアがあって、それぞれ奥の間へ通じる。正面はテラスへ出るガラス戸。ふつうの客間用の調度のほかに、右手の隅《すみ》に書きものデスク、左手ドア寄りにトルコ風の長椅子《ながいす》、書棚。窓や椅子のそこここに本。——宵《よい》。笠《かさ》つきのランプが一つともっている。薄暗い。木立のざわめきや、煙突のなかで風のうなる音がする。夜番の拍子木《ひょうしぎ》の音。メドヴェージェンコとマーシャ登場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

マーシャ　　　　　　（呼ぶ）トレープレフさん！　トレープレ
　　　　　　　　　　フさん！　（見まわしながら）だあれもい
　　　　　　　　　　ない。爺《じい》さんたら、のべつ幕なし
　　　　　　　　　　に聞きどおしなんだもの、コースチャはど
　　　　　　　　　　こにいる、コースチャはどこにいるって。
　　　　　　　　　　……あの人がいないじゃ、生きてられない
　　　　　　　　　　のね……

メドヴェージェンコ　孤独がこわいんだ。（耳をすます）なんて
　　　　　　　　　　凄《すご》い天気だ！　これでもう二昼夜
　　　　　　　　　　だからな。

マーシャ　　　　　　（ランプの火を大きくして）湖には波が立
　　　　　　　　　　ってるわ。大きな波が。

メドヴェージェンコ　庭はまっ暗だ。ひとつ毀《こわ》すように
　　　　　　　　　　言わなけりゃいかんな、庭のあの小劇場は
　　　　　　　　　　ね。むき出しで、醜く立っているざまは、
　　　　　　　　　　まるで骸骨《がいこつ》だ。幕は風でばた
　　　　　　　　　　ついているし。ゆうべ僕があのそばを通り
　　　　　　　　　　かかったら、誰かなかで泣いてるような気
　　　　　　　　　　がしたよ。

マーシャ　　　　　　また、あんなことを……（間）

メドヴェージェンコ　うちへ帰ろう、マーシャ！

マーシャ　　　　　　（かぶりを振る）わたし、ここに泊るの。

メドヴェージェンコ　（哀願するように）マーシャ、帰ろうよ！
　　　　　　　　　　　赤んぼがきっと、腹をすかしてるよ。

マーシャ　　　　　　平気よ。マトリョーナが飲ませてくれるわ
　　　　　　　　　　。（間）

メドヴェージェンコ　可哀《かわい》そうだ。もうこれで三晩、
　　　　　　　　　　おっ母《か》さんの顔を見ないんだからな
　　　　　　　　　　。

マーシャ　　　　　　あんたも、退屈な人になったものね。以前
　　　　　　　　　　は、哲学の一つも並べたものだけれど、今
　　　　　　　　　　じゃのべつ、赤んぼ、帰ろう、赤んぼ、帰
　　　　　　　　　　ろう、なんだもの、——ばかの一つ覚えみ
　　　　　　　　　　たい。

メドヴェージェンコ　帰ろうよ、マーシャ！

マーシャ　　　　　　ひとりで帰ったらいいわ。

メドヴェージェンコ　お前のお父さん、僕にゃ馬を出してくれな
　　　　　　　　　　いよ。

マーシャ　　　　　　出してくれてよ。願いますと言や、出して
　　　　　　　　　　くれるわ。

メドヴェージェンコ　まあ、頼んでみよう。じゃあすは帰るだろ
　　　　　　　　　　うね？

マーシャ　　　　　　（かぎタバコをかぐ）ええ、あしたはね。
　　　　　　　　　　うるさいわねえ……

［＃ここから３字下げ］

トレープレフとポリーナ登場。トレープレフは枕《まくら》と毛布を、ポリーナはシーツを持ちこみ、トルコ風の長椅子の上に置く。それからトレープレフは自分のデスクに行って、腰をおろす。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

マーシャ　　　　　　それ、どうするの、ママ？

ポリーナ　　　　　　ソーリンさんが、コースチャの部屋に床《
　　　　　　　　　　とこ》をとってくれとおっしゃるんだよ。

マーシャ　　　　　　わたしがするわ……（寝床をつくる）

ポリーナ　　　　　　（ため息をついて）年をとると、子供も同
　　　　　　　　　　じだねえ……（デスクに近寄り、肘《ひじ
　　　　　　　　　　》をついて原稿をながめる。間）

メドヴェージェンコ　じゃ、僕は行こう。おやすみ、マーシャ。
　　　　　　　　　　（妻の手にキスする）おやすみなさい、お
　　　　　　　　　　母さん。（しゅうとの手にキスしようとす
　　　　　　　　　　る）

ポリーナ　　　　　　（腹だたしげに）いいからさ！　さっさと
　　　　　　　　　　お帰り。

メドヴェージェンコ　おやすみ、トレープレフさん。

［＃ここから３字下げ］

トレープレフ黙って手を出す。メドヴェージェンコ退場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ポリーナ　　　　　　（原稿をながめながら）ねえ、コースチャ
　　　　　　　　　　、あなたが本当の文士になるなんて、誰ひ
　　　　　　　　　　とり夢にも思いませんでしたよ。それが今
　　　　　　　　　　じゃ、ありがたいことに、方々の雑誌から
　　　　　　　　　　お金がくるようになりましたものね。（彼
　　　　　　　　　　の髪を撫《な》でる）それに、男前も一段
　　　　　　　　　　とあがって、……ねえ、可愛《かわい》い
　　　　　　　　　　コースチャ、いい子だから、うちのマーシ
　　　　　　　　　　ャに、もう少し優しくしてやってください
　　　　　　　　　　ね！……

マーシャ　　　　　　（床をのべながら）そっとしておいたげて
　　　　　　　　　　よ、ママ。

ポリーナ　　　　　　（トレープレフに）これで、なかなか好い
　　　　　　　　　　子さんですよ。（間）女というものはね、
　　　　　　　　　　コースチャ、優しい目で見てもらいさえす
　　　　　　　　　　りゃ、ほかになんにも要《い》らないもの
　　　　　　　　　　よ。わたしも身に覚えがあるけど。

［＃ここから３字下げ］

トレープレフ、デスクから立ちあがり、黙って退場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

マーシャ　　　　　　ほら、怒らしちまった。うるさくするから
　　　　　　　　　　よ！

ポリーナ　　　　　　わたしはお前が不憫《ふびん》なんだよ、
　　　　　　　　　　マーシェンカ。

マーシャ　　　　　　ありがたい仕合せだわ！

ポリーナ　　　　　　お前のことで、わたしは胸を痛めつづけて
　　　　　　　　　　きたよ。すっかり見てるんだものね、みん
　　　　　　　　　　なわかってるんだものね。

マーシャ　　　　　　みんな、ばかげたことよ。望みなき恋なん
　　　　　　　　　　て、小説にあるだけだわ。くだらない。た
　　　　　　　　　　だ、よせばいいのよ——甘ったれた気持に
　　　　　　　　　　なって、待てば海路の日和《ひより》だか
　　　　　　　　　　なんだか、ぽかんと何かを待っている、そ
　　　　　　　　　　んな態度をね。……心に恋が芽を出したら
　　　　　　　　　　、摘んで捨てるまでのことよ。うちの人を
　　　　　　　　　　、ほかの郡へ転任させてくれるって話にな
　　　　　　　　　　ってるの。そこへ移ってしまえば、——き
　　　　　　　　　　れいに忘れるわ……胸から根こぎにしてし
　　　　　　　　　　まうわ。

［＃ここから３字下げ］

ふた部屋ほど向うで、メランコリックなワルツが聞える。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ポリーナ　　　　　　コースチャが弾いている。気がふさぐんだ
　　　　　　　　　　ね。

マーシャ　　　　　　（音を立てずに、二回り三回りワルツを舞
　　　　　　　　　　う）肝心なのはね、ママ、目の前に見えな
　　　　　　　　　　いということなのよ。うちのセミョーンが
　　　　　　　　　　転任になりさえすりゃ、あっちへ行って、
　　　　　　　　　　ひと月で忘れてみせるわ。みんな、くだら
　　　　　　　　　　ないことよ。

［＃ここから３字下げ］

左手のドアがあいて、ドールンとメドヴェージェンコが、車椅子のソーリンを押しながら登場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

メドヴェージェンコ　僕のところは、今じゃ六人家族でしてね。
　　　　　　　　　　ところが粉は一プード（［＃割り注］訳注
　　　　　　　　　　　十六キロ余［＃割り注終わり］）七十コ
　　　　　　　　　　ペイカもするんで。

ドールン　　　　　　そこでキリキリ舞いになる。

メドヴェージェンコ　あなたは笑っていればいいでしょう。お金
　　　　　　　　　　のうなってる人はね。

ドールン　　　　　　お金が？　開業して以来三十年、いいかね
　　　　　　　　　　君、しかも昼も夜《よ》も自分が自分のも
　　　　　　　　　　のでない、落ちつかぬ生活をしてきて、蓄
　　　　　　　　　　《た》めた金がやっと二千だぜ。それもこ
　　　　　　　　　　のあいだ、外国旅行で使ってしまった。僕
　　　　　　　　　　は一文なしさ。

マーシャ　　　　　　（夫に）まだ帰らなかったの？

メドヴェージェンコ　（済まなそうに）どうしたらいいのさ？
　　　　　　　　　　馬を出してくれないもの！

マーシャ　　　　　　（さも忌々《いまいま》しそうに、小声で
　　　　　　　　　　）あんたみたいな人、見たくもないわ！

［＃ここから３字下げ］

車椅子は、室内左手の中央でとまる。ポリーナ、マーシャ、ドールン、そのそばに腰をおろす。メドヴェージェンコは悄気《しょげ》て、わきへしりぞく。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ドールン　　　　　　しかし、ここも変ったものですなあ！　客
　　　　　　　　　　間が書斎になってしまった。

マーシャ　　　　　　トレープレフさんには、ここのほうがお仕
　　　　　　　　　　事には都合がいいの。好きな時に庭へ出て
　　　　　　　　　　、ものが考えられますものね。

［＃ここから３字下げ］

夜番の拍子木の音。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ソーリン　　　　　　妹はどこかな？

ドールン　　　　　　トリゴーリンを迎えに、停車場へね。もう
　　　　　　　　　　じきお帰りでしょう。

ソーリン　　　　　　あんたが妹をわざわざ呼び寄せられたとこ
　　　　　　　　　　ろをみると、わたしの病気は危ないという
　　　　　　　　　　わけですな。（ちょっと黙って）どうも妙
　　　　　　　　　　な話だ、病気が危ないというのに、薬一服
　　　　　　　　　　くれないんだからね。

ドールン　　　　　　じゃ、何がお望みなんです？　カノコ草の
　　　　　　　　　　水薬ですか？　ソーダですか！　キニーネ
　　　　　　　　　　ですか？

ソーリン　　　　　　ほらまた哲学だ。ああ、なんの因果だろう
　　　　　　　　　　！　（長椅子をあごでしゃくって）それ、
　　　　　　　　　　わたしの寝床かね？

ポリーナ　　　　　　あなたのですわ、ソーリンさま。

ソーリン　　　　　　それは忝《かたじけ》ない。

ドールン　　　　　　（口ずさむ）「月は夜ぞらを渡りゆく」…
　　　　　　　　　　…

ソーリン　　　　　　わしはコースチャに、ひとつ小説の題材を
　　　　　　　　　　やりたいよ。題は、こうつけるんだな——
　　　　　　　　　　『なりたかった男』。つまり『ロンム・キ
　　　　　　　　　　・ア・ヴーリュ』さ。若いころ、わたしは
　　　　　　　　　　文学者になりたかった——が、なれなかっ
　　　　　　　　　　た。弁舌さわやかになりたかった——が、
　　　　　　　　　　わたしの話しぶりときたら、いやはやひど
　　　　　　　　　　いものだった。（自嘲《じちょう》的に）
　　　　　　　　　　「とまあいった次第で、つまりそのありま
　　　　　　　　　　して、そのう、ええと……」といったざま
　　　　　　　　　　でな、なんとか締めくくりをつけよう、つ
　　　　　　　　　　けようとして、大汗かいたものさ。家庭も
　　　　　　　　　　持ちたかった——が、持てなかった。いつ
　　　　　　　　　　も都会で暮したかった——が、それこうし
　　　　　　　　　　て、田舎《いなか》で生涯を終ろうとして
　　　　　　　　　　いる、とまあいった次第でな。

ドールン　　　　　　四等官になりたかった——それは、なれた
　　　　　　　　　　。

ソーリン　　　　　　（笑う）それは別に望んだわけじゃないが
　　　　　　　　　　、ひとりでにそうなった。

ドールン　　　　　　六十二にもなって人生に文句をつけるなん
　　　　　　　　　　て、失礼ながら、——褒《ほ》めた話じゃ
　　　　　　　　　　ないですよ。

ソーリン　　　　　　なんという、わからず屋だ。生きたいと言
　　　　　　　　　　っているのに！

ドールン　　　　　　それが浅はかというものです。自然律によ
　　　　　　　　　　って、一切の生は終りなからざるべからず
　　　　　　　　　　ですからね。

ソーリン　　　　　　それ、それが、腹いっぱい食った人の理屈
　　　　　　　　　　さ。君はおなかがくちいものだから、人生
　　　　　　　　　　に冷淡で、どうなろうと平気なんだ。だが
　　　　　　　　　　、いざ死ぬときにゃ、君だって怖《こわ》
　　　　　　　　　　くなろうさ。

ドールン　　　　　　死の恐怖は——動物的恐怖ですよ。……そ
　　　　　　　　　　れを抑《おさ》えなければね。死を意識的
　　　　　　　　　　に怖《おそ》れるのは、永遠の生命を信じ
　　　　　　　　　　る人だけです。自分の罪ぶかさが怖くなる
　　　　　　　　　　のです。ところがあなたは、まず第一に、
　　　　　　　　　　不信心者ですね。第二に——どんな罪がお
　　　　　　　　　　ありですかな？　あなたは二十五年、司法
　　　　　　　　　　省に勤続された——だけのことでね。

ソーリン　　　　　　（笑う）二十八年……

［＃ここから３字下げ］

トレープレフ登場して、ソーリンの足もとの小さな腰掛にかける。マーシャは終始彼から眼をはなさない。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ドールン　　　　　　われわれがこうしていちゃ、トレープレフ
　　　　　　　　　　君の仕事の邪魔ですな。

トレープレフ　　　　いや、かまいません。

［＃ここから３字下げ］

間。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

メドヴェージェンコ　ちょっとお尋ねしますが、ドクトル、外国
　　　　　　　　　　の町のうち、どこが一等お気に入りました
　　　　　　　　　　？

ドールン　　　　　　ジェノアですね。

トレープレフ　　　　なぜジェノアなんです？

ドールン　　　　　　あすこの街を歩いている群衆がすてきなん
　　　　　　　　　　です。夕方、ホテルを出てみると、街いっ
　　　　　　　　　　ぱい人波で埋まっている。その群衆にまじ
　　　　　　　　　　りこんで、なんとなくあちらこちらとふら
　　　　　　　　　　ついて、彼らと生活を共にし、彼らと心理
　　　　　　　　　　的に融《と》け合ううちに、まさしく世界
　　　　　　　　　　に遍在する一つの霊魂といったものが、あ
　　　　　　　　　　り得ると信じるようになってきますね。つ
　　　　　　　　　　まりほら、いつか君の芝居でニーナさんが
　　　　　　　　　　演じたあれみたいなね。ところで、ニーナ
　　　　　　　　　　さんは今どこでしょうね？　どこに、どう
　　　　　　　　　　しているでしょうね？

トレープレフ　　　　たぶん健在でしょう。

ドールン　　　　　　僕の聞いたところでは、あの人は何か曰《
　　　　　　　　　　いわ》くのある生活をしたそうだが、どう
　　　　　　　　　　いうことなのかな？

トレープレフ　　　　それは、ドクトル、長い話ですよ。

ドールン　　　　　　それを君、てみじかにさ。（間）

トレープレフ　　　　あの人は家出をして、トリゴーリンといっ
　　　　　　　　　　しょになりました。これはご存じですね？

ドールン　　　　　　知っています。

トレープレフ　　　　赤んぼができる。その子が死ぬ。トリゴー
　　　　　　　　　　リンはあの人に飽きて、もとのキズナへ帰
　　　　　　　　　　ってゆく——とまあ、当然の経路をたどっ
　　　　　　　　　　たわけです。もっとも、あの男はこれまで
　　　　　　　　　　も、ついぞ元の女を棄《す》てた例《ため
　　　　　　　　　　》しはないんで、ただ持ち前のぐらぐらな
　　　　　　　　　　性格から、そこここでちょいと引っかける
　　　　　　　　　　だけでね。僕の耳にはいったところから判
　　　　　　　　　　断すると、ニーナの私生活は全然失敗でし
　　　　　　　　　　たよ。

ドールン　　　　　　舞台のほうは？

トレープレフ　　　　どうやら、もっとひどいらしい。モスクワ
　　　　　　　　　　郊外の別荘地の小屋で初舞台をふんで、そ
　　　　　　　　　　れから地方へ回りました。そのころ僕は、
　　　　　　　　　　いつもあの人から目を放さないでいて、し
　　　　　　　　　　ばらくは行く先々へついて回ったものです
　　　　　　　　　　。大きな役ばかり引受けていましたが、演
　　　　　　　　　　技はがさつで、味もそっけもなく、やたら
　　　　　　　　　　に吼《ほ》え立てる、大仰《おおぎょう》
　　　　　　　　　　な見得を切る、といった調子でした。時た
　　　　　　　　　　ま、なかなか巧《うま》い悲鳴をあげたり
　　　　　　　　　　、上手な死に方を見せたりしましたが、そ
　　　　　　　　　　れも瞬間だけのことでね。

ドールン　　　　　　すると、とにかく才能はあるんだな？

トレープレフ　　　　そこはよくわかりませんでした。まあ、あ
　　　　　　　　　　るんでしょう。こっちじゃ顔を見てるんで
　　　　　　　　　　すが、向うでは僕に会いたがらず、宿へ訪
　　　　　　　　　　ねてゆくと女中が通してくれないんです。
　　　　　　　　　　あの人の気持はわかるので、僕もむりに会
　　　　　　　　　　おうとはしませんでした。（間）さてと、
　　　　　　　　　　まだ何を話したらいいのかな？　やがて僕
　　　　　　　　　　がうちへ帰ってから、手紙が何通か来まし
　　　　　　　　　　たっけ。聡明《そうめい》な、あたたかい
　　　　　　　　　　、なかなかいい手紙でした。べつに愚痴《
　　　　　　　　　　ぐち》をこぼしてはないのですが、これは
　　　　　　　　　　並大抵の不仕合せじゃないなと感じられる
　　　　　　　　　　ほど、一行一行、病的な神経が張りつめて
　　　　　　　　　　いました。頭の向きようも、ちょっと変な
　　　　　　　　　　んです。何しろ署名が、「かもめ」という
　　　　　　　　　　のですからね。『ルサールカ』（［＃割り
　　　　　　　　　　注］訳注　『水の精』——プーシキンの物
　　　　　　　　　　語詩。ダルゴムージスキイのオペラがある
　　　　　　　　　　［＃割り注終わり］）の水車屋のおやじは
　　　　　　　　　　、自分は大鴉《おおがらす》だと言い言い
　　　　　　　　　　しますが、あの人の手紙にも、自分は「か
　　　　　　　　　　もめ」だと、のべつに書いてある。今あの
　　　　　　　　　　人は、ここに来てますよ。

ドールン　　　　　　来てるって、そりゃまたどうして？

トレープレフ　　　　町のね、はたご屋にいるんです。もう五日
　　　　　　　　　　ほど、そこに泊ってる。僕も行ってみよう
　　　　　　　　　　と思ったんですが、このマーシャさんが訪
　　　　　　　　　　ねてみたら、いっさい誰にも会わないとい
　　　　　　　　　　うことでした。メドヴェージェンコ君の話
　　　　　　　　　　では、きのう夕方ちかく、ここから二キロ
　　　　　　　　　　ほどの原っぱで、あの人に出あったそうで
　　　　　　　　　　す。

メドヴェージェンコ　ええ、出あいました。あっち、つまり町の
　　　　　　　　　　ほうへ、歩いて行くところでした。僕が挨
　　　　　　　　　　拶《あいさつ》して、なぜ遊びに来ないの
　　　　　　　　　　ですと聞くと、そのうち行きますという返
　　　　　　　　　　事でした。

トレープレフ　　　　来るもんか。（間）親父《おやじ》さんも
　　　　　　　　　　、まま母も、てんから知らん顔で通してい
　　　　　　　　　　ます。それどころか、方々に見張りをおい
　　　　　　　　　　て、一歩も屋敷へ近づけない算段なんです
　　　　　　　　　　。（ドクトルといっしょに、デスクのほう
　　　　　　　　　　へ歩を移す）ねえドクトル、紙の上で哲学
　　　　　　　　　　者になるのは易《やさ》しいが、実際とな
　　　　　　　　　　るとじつに難《むずか》しいですね！

ソーリン　　　　　　チャーミングな娘だったがな。

ドールン　　　　　　え、なんです？

ソーリン　　　　　　チャーミングな子だった、と言うのさ。四
　　　　　　　　　　等官ソーリン閣下までが、ひところあの子
　　　　　　　　　　に惚《ほ》れていたものな。

ドールン　　　　　　老いたる｜女たらし《ロヴレス》（［＃割
　　　　　　　　　　り注］訳注　リチャードソンの小説『クラ
　　　　　　　　　　リッサ・ハーロウ』の人物の名から［＃割
　　　　　　　　　　り注終わり］）か。

［＃ここから３字下げ］

シャムラーエフの笑い声が聞える。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ポリーナ　　　　　　皆さん停車場からお帰りのようですよ……

トレープレフ　　　　そう、ママの声もする。

［＃ここから３字下げ］

アルカージナ、トリゴーリン、つづいてシャムラーエフ登場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

シャムラーエフ　　　（はいりながら）われわれはみな、自然の
　　　　　　　　　　暴威のもとに老いさらばえていきますが、
　　　　　　　　　　奥さんは相変らず、じつにお若いですなあ
　　　　　　　　　　。……薄色の〔短〕上衣《うわぎ》を召し
　　　　　　　　　　て、颯爽《さっそう》としてらっしゃる。
　　　　　　　　　　……典雅ですなあ……

アルカージナ　　　　ほらまた褒め立てて、鬼に妬《や》かせよ
　　　　　　　　　　うとなさる、相変らずねえ！

トリゴーリン　　　　（ソーリンに）ご機嫌よう、ソーリンさん
　　　　　　　　　　！　また何かご病気ですか？　いけません
　　　　　　　　　　なあ！　（マーシャを見て、嬉《うれ》し
　　　　　　　　　　そうに）やあ、マーシャさん！

マーシャ　　　　　　おわかりになって？　（彼の手を握る）

トリゴーリン　　　　結婚しましたか？

マーシャ　　　　　　もうとっくに。

トリゴーリン　　　　幸福ですか？　（ドールンやメドヴェージ
　　　　　　　　　　ェンコと会釈《えしゃく》をかわしたのち
　　　　　　　　　　、ためらいがちにトレープレフのほうへ歩
　　　　　　　　　　み寄る）アルカージナさんのお話だと、あ
　　　　　　　　　　なたはもう昔のことは水に流して、ご立腹
　　　　　　　　　　もとけたそうですが。

［＃ここから３字下げ］

トレープレフ、彼に手をさし出す。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

アルカージナ　　　　（息子に）ほら、トリゴーリンさんは、お
　　　　　　　　　　前の新作の載っている雑誌を持ってきてく
　　　　　　　　　　だすったんだよ。

トレープレフ　　　　（雑誌を受けながら、トリゴーリンに）お
　　　　　　　　　　それいります、ご親切に。（腰をおろす）

トリゴーリン　　　　あんたの崇拝者たちから、宜《よろ》しく
　　　　　　　　　　とのことです。……ペテルブルグでもモス
　　　　　　　　　　クワでも、概してあなたに興味をもってい
　　　　　　　　　　て、僕はしょっちゅう、あんたのことを訊
　　　　　　　　　　《き》かれますよ。どんな人だの、年は幾
　　　　　　　　　　つだの、ブリュネットかブロンドかだの、
　　　　　　　　　　といったふうにね。みんな、どうしたわけ
　　　　　　　　　　か、あなたを年配の人のように思っている
　　　　　　　　　　。それに誰ひとり、あんたの本名を知る者
　　　　　　　　　　がない。なにしろあんたは、いつもペンネ
　　　　　　　　　　ームで発表するものだから。あんたは、あ
　　　　　　　　　　の『鉄仮面』（［＃割り注］訳注　ルイ十
　　　　　　　　　　四世の代にバスチーユで獄死した謎の人物
　　　　　　　　　　。父デュマの小説などで有名［＃割り注終
　　　　　　　　　　わり］）みたいに、神秘の人ですよ。

トレープレフ　　　　ずっとご逗留《とうりゅう》ですか？

トリゴーリン　　　　いや、あすはモスクワへ発《た》とうと思
　　　　　　　　　　っています。やむを得ません。中編ものを
　　　　　　　　　　一つ急いで書きあげなければならんし、ほ
　　　　　　　　　　かにまだ、ある選集にも何かやる約束にな
　　　　　　　　　　っているので、一口で言えば——相も変ら
　　　　　　　　　　ず、ですよ。

［＃ここから３字下げ］

彼らが話している間に、アルカージナとポリーナは部屋の中央にカルタ机をすえ、左右の翼《よく》を上げる。シャムラーエフは蝋燭《ろうそく》（［＃割り注］訳注複数［＃割り注終わり］）をともしたり、
　　　　　　　　　　椅子《いす》を並べたりする。戸棚からロ
　　　　　　　　　　トー（［＃割り注］訳注　Loto 数字
　　　　　　　　　　あわせの遊び。一から九〇までの数字を飛
　　　　　　　　　　び飛びに記した盤を配っておき、一人が袋
　　　　　　　　　　または筒から賽を一つずつ取出しながらそ
　　　　　　　　　　こに刻まれた数字を言う。盤上の数字が先
　　　　　　　　　　に埋まった人が勝ち［＃割り注終わり］）
　　　　　　　　　　の箱が取出される。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

トリゴーリン　　　　せっかく来たのに、わるい天気にぶつかっ
　　　　　　　　　　たものだ。すさまじい風ですな。あす朝も
　　　　　　　　　　しおさまったら、湖へ釣りに出ますよ。つ
　　　　　　　　　　いでにお庭と、そらあの場所——ね、覚え
　　　　　　　　　　てますか——あんたの芝居をやったあすこ
　　　　　　　　　　を、検分しなければならない。モチーフは
　　　　　　　　　　熟しているんですが、ただ現場の記憶を新
　　　　　　　　　　たにする必要があるんで。

マーシャ　　　　　　（父親に）パパ、うちの人に馬を出してや
　　　　　　　　　　ってちょうだい！　うちへ帰らなくちゃな
　　　　　　　　　　らないんだから。

シャムラーエフ　　　（口まねをして）馬を……帰らなくちゃ…
　　　　　　　　　　…（厳格に）その眼で見たろう——今しが
　　　　　　　　　　た停車場へ行って来たばかりだ。そうそう
　　　　　　　　　　こき使うわけにはいかん。

マーシャ　　　　　　ほかの馬だってあるじゃないの。（父親が
　　　　　　　　　　黙っているのを見て、片手を振る）またけ
　　　　　　　　　　んかのたねね……

メドヴェージェンコ　マーシャ、ぼく歩いて帰るよ。いいからさ
　　　　　　　　　　……

ポリーナ　　　　　　（ため息をついて）歩いて、こんな天気に
　　　　　　　　　　……（カルタ机に向って腰をおろす）さ、
　　　　　　　　　　どうぞ、皆さん。

メドヴェージェンコ　たかが六キロですからね。……（妻の手に
　　　　　　　　　　キスをする）おやすみなさい、おっ母さん
　　　　　　　　　　。（しゅうとはキスを受けるため渋々手を
　　　　　　　　　　出す）僕はだれにも心配はかけたくないん
　　　　　　　　　　ですが、ただ赤んぼが……（一同に頭をさ
　　　　　　　　　　げる）おやすみなさい。……（退場。さも
　　　　　　　　　　申し訳なさそうな物腰）

シャムラーエフ　　　なんとか帰れるさ。将軍じゃあるまいし。

ポリーナ　　　　　　（机をたたく）さ、いかが、皆さん。時間
　　　　　　　　　　が無駄ですよ、ぐずぐずしてると、お夜食
　　　　　　　　　　をしらせに来ますわ。

［＃ここから３字下げ］

シャムラーエフ、マーシャ、ドールン、カルタ机につく。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

アルカージナ　　　　（トリゴーリンに）秋の夜ながになると、
　　　　　　　　　　ここではロトーをして遊ぶんですよ。ほら
　　　　　　　　　　ね、ずいぶん古いロトーでしょう。なにし
　　　　　　　　　　ろわたしたちが子供だったころ、亡くなっ
　　　　　　　　　　た母がいっしょに遊んでくれた道具ですも
　　　　　　　　　　のねえ。お夜食まで、いっしょに一勝負な
　　　　　　　　　　さらない？　（トリゴーリンとともに席に
　　　　　　　　　　つく）つまらない遊びだけど、馴《な》れ
　　　　　　　　　　るとこれで、悪くないものよ。（一同に三
　　　　　　　　　　枚ずつ紙の盤をくばる）

トレープレフ　　　　（雑誌をめくりながら）自分の小説は読ん
　　　　　　　　　　でるくせに、僕のはページも切ってやしな
　　　　　　　　　　い。（雑誌をデスクに置き、左手のドアへ
　　　　　　　　　　行きかける。母親のそばを通りかかって、
　　　　　　　　　　その頭にキスする）

アルカージナ　　　　どう、お前も、コースチャ？

トレープレフ　　　　ご免なさい、なんだかしたくないんです。
　　　　　　　　　　……ちょっと歩いてきます。（退場）

アルカージナ　　　　賭《か》け金は十コペイカよ。ドクトル、
　　　　　　　　　　わたしの分、たて替えておいてちょうだい
　　　　　　　　　　。

ドールン　　　　　　承知しました。

マーシャ　　　　　　みなさん、お賭けになった？　じゃ始め。
　　　　　　　　　　……二十二！

アルカージナ　　　　はい。

マーシャ　　　　　　三！

ドールン　　　　　　はあい。

マーシャ　　　　　　三をお置きになって？　八！　八十一！
　　　　　　　　　　十！

シャムラーエフ　　　まあそう急ぐな。

アルカージナ　　　　わたし、ハリコフで受けた歓迎ぶりを思い
　　　　　　　　　　出すと、今でも頭がくらくらするわ、皆さ
　　　　　　　　　　ん！

マーシャ　　　　　　三十四！

［＃ここから３字下げ］

舞台うらで、メランコリックなワルツのひびき。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

アルカージナ　　　　大学生が、お祭さわぎをしてくれてね……
　　　　　　　　　　花籠《はなかご》が三つ、花束が二つ、そ
　　　　　　　　　　れからほら……（胸からブローチをはずし
　　　　　　　　　　て、机上に投げだす）

シャムラーエフ　　　なるほど、こりゃ大したものだ……

マーシャ　　　　　　五十！……

ドールン　　　　　　五十きっかり？

アルカージナ　　　　わたしの舞台｜衣裳《いしょう》ときたら
　　　　　　　　　　、豪勢なものでしたよ。……なんといって
　　　　　　　　　　も、着付けにかけちゃ、わたしゃ負けませ
　　　　　　　　　　んからね。

ポリーナ　　　　　　コースチャが弾《ひ》いている。気がふさ
　　　　　　　　　　ぐのね。可哀《かわい》そうに。

シャムラーエフ　　　新聞でひどく叩《たた》かれてるね。

マーシャ　　　　　　七十七！

アルカージナ　　　　気にしないでもいいのに。

トリゴーリン　　　　あの人はどうも運が向かない。未《いま》
　　　　　　　　　　だに、ほんとの調子が出ないんですな。何
　　　　　　　　　　かこう変てこで、あいまいで、時によると
　　　　　　　　　　ウワ言みたいなところさえある。人物がさ
　　　　　　　　　　っぱり生きてない。

マーシャ　　　　　　十一。

アルカージナ　　　　（ソーリンをふり返って）ペトルーシャ、
　　　　　　　　　　あなた退屈？　（間）寝てるわ。

ドールン　　　　　　四等官殿はおねんねだ。

マーシャ　　　　　　七！　九十！

トリゴーリン　　　　わたしがもし、こんな湖畔の屋敷に住んだ
　　　　　　　　　　としたら、とても物を書く気にはなります
　　　　　　　　　　まいな。そんな欲望はうっちゃりにして、
　　　　　　　　　　魚ばかり釣ってるでしょうよ。

マーシャ　　　　　　二十八！

トリゴーリン　　　　ボラやマスを釣りあげるのは——なんとも
　　　　　　　　　　言えんいい気持だ！

ドールン　　　　　　しかし僕は、トレープレフ君を信じていま
　　　　　　　　　　すよ。何かがある！　何かがね！　あの人
　　　　　　　　　　はイメージでもって思索する。だから小説
　　　　　　　　　　が絵画的で、鮮明で、僕は強烈な感じを受
　　　　　　　　　　けますね。ただ惜しむらくは、あの人には
　　　　　　　　　　、はっきりきまった問題がない。印象を生
　　　　　　　　　　みはするが、それ以上に出ない。なにせ印
　　　　　　　　　　象だけじゃ、大したことにはなりませんか
　　　　　　　　　　らね。アルカージナさん、作家の息子さん
　　　　　　　　　　を持って、嬉しいでしょうな？

アルカージナ　　　　それがね、あなた、まだ読んだことがない
　　　　　　　　　　の。ひまがなくてね。

マーシャ　　　　　　二十六！

［＃ここから３字下げ］

トレープレフ静かに登場。自分のデスクへ行く。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

シャムラーエフ　　　（トリゴーリンに）そうそう、トリゴーリ
　　　　　　　　　　ンさん、あなたの物が残っていましたっけ
　　　　　　　　　　。

トリゴーリン　　　　はてな？

シャムラーエフ　　　いつぞやトレープレフさんが射落した鴎《
　　　　　　　　　　かもめ》ね。あれを剥製《はくせい》にし
　　　　　　　　　　てくれって、ご注文でしたが。

トリゴーリン　　　　覚えがない。（しきりに考えながら）覚え
　　　　　　　　　　がないなあ！

マーシャ　　　　　　六十六！　一！

トレープレフ　　　　（窓をパッとあけて、耳をすます）なんて
　　　　　　　　　　暗いんだ！　なぜこう胸さわぎがするのか
　　　　　　　　　　、どうもわからん。

アルカージナ　　　　コースチャ、窓をおしめ、吹きこむじゃな
　　　　　　　　　　いの。

［＃ここから３字下げ］

トレープレフ、窓をしめる。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

マーシャ　　　　　　八十八！

トリゴーリン　　　　はい、揃《そろ》いました。

アルカージナ　　　　（うきうきして）うまい、うまい！

シャムラーエフ　　　ブラボー！

アルカージナ　　　　この人はね、いつどこへ行っても運がいい
　　　　　　　　　　のよ。（立ちあがる）じゃあちらで、何か
　　　　　　　　　　ちょっと頂きましょう。うちの有名な先生
　　　　　　　　　　は、今日は夕飯ぬきでしたからね。お夜食
　　　　　　　　　　のあとで、またやりましょう。（息子に）
　　　　　　　　　　コースチャ、原稿はやめて、食堂へ行きま
　　　　　　　　　　しょう。

トレープレフ　　　　欲しくないよ、ママ、おなかがいっぱいだ
　　　　　　　　　　から。

アルカージナ　　　　ご勝手に。（ソーリンをおこす）ペトルー
　　　　　　　　　　シャ、お夜食ですよ！　（シャムラーエフ
　　　　　　　　　　と腕を組む）話してあげるわね、ハリコフ
　　　　　　　　　　でどんなに歓迎されたか……

［＃ここから３字下げ］

ポリーナ、カルタ机の上の蝋燭を消してから、ドールンといっしょに椅子を押して行く。一同左手のドアから退場。舞台には、デスクに向ったトレープレフだけ残る。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

トレープレフ　　　　（書きつづけようとして、今まで書いたと
　　　　　　　　　　ころに目を走らせる）おれは口ぐせみたい
　　　　　　　　　　に、新形式、新形式と言ってきたが、今じ
　　　　　　　　　　ゃそろそろ自分が、古い型へ落ちこんでゆ
　　　　　　　　　　くような気がする。（読む）「塀《へい》
　　　　　　　　　　のポスターに曰《いわ》く……。蒼白《あ
　　　　　　　　　　おじろ》い顔が、黒い髪の毛にふちどられ
　　　　　　　　　　て……」曰く、ふちどられて……。ふん、
　　　　　　　　　　なっちゃいない。（消す）いっそ主人公が
　　　　　　　　　　、雨の音で目をさますところから始めて、
　　　　　　　　　　あとはみんな切っちまおう。月夜の描写が
　　　　　　　　　　長たらしく、凝りすぎている。トリゴーリ
　　　　　　　　　　ンは、ちゃんと手がきまっているから、楽
　　　　　　　　　　なもんだ。……あいつなら、土手の上に割
　　　　　　　　　　れた瓶《びん》のくびがきらきらして、水
　　　　　　　　　　車の影が黒く落ちている——それでもう月
　　　　　　　　　　夜ができあがってしまう。ところがおれは
　　　　　　　　　　、ふるえがちの光だとか、静かな星のまた
　　　　　　　　　　たきだとか、しんとした匂《にお》やかな
　　　　　　　　　　空気のなかに消えてゆくピアノの遠音だと
　　　　　　　　　　か……いや、こいつは堪《たま》らん。（
　　　　　　　　　　間）そう、おれはだんだんわかりかけてき
　　　　　　　　　　たが、問題は形式が古いの新しいのという
　　　　　　　　　　ことじゃなくて、形式なんか念頭におかず
　　　　　　　　　　に人間が書く、それなんだ。魂のなかから
　　　　　　　　　　自由に流れ出すからこそ書く、ということ
　　　　　　　　　　なんだ。（デスクに最寄《もよ》りの窓を
　　　　　　　　　　、誰かが叩《たた》く）なんだろう？　（
　　　　　　　　　　窓を覗《のぞ》く）なんにも見えない。…
　　　　　　　　　　…（ガラス戸をあけて、庭を見る）誰か石
　　　　　　　　　　段を駆けおりたな。（呼びかける）誰だ、
　　　　　　　　　　そこにいるのは？　（出てゆく。彼がテラ
　　　　　　　　　　スを足早に歩く音がする。半分間ほどして
　　　　　　　　　　、ニーナを連れもどってくる）ニーナ！
　　　　　　　　　　ニーナ！

［＃ここから３字下げ］

ニーナは頭を彼の胸におし当て、忍び音にむせび泣く。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

トレープレフ　　　　（感動して）ニーナ！　ニーナ！　君か…
　　　　　　　　　　…君だったのか……。僕は虫が知らしたの
　　　　　　　　　　か、朝からずっと、胸がきりきりしてなら
　　　　　　　　　　なかった。（彼女の帽子と長｜外套《がい
　　　　　　　　　　とう》をとってやる）ああ、僕の可愛《か
　　　　　　　　　　わい》い、大事なひとが帰ってきた！　泣
　　　　　　　　　　くのはよそう、泣くのは。

ニーナ　　　　　　　誰かいるわ。

トレープレフ　　　　誰もいやしない。

ニーナ　　　　　　　ドアの錠をおろして。はいってくると困る
　　　　　　　　　　わ。

トレープレフ　　　　誰も来やしない。

ニーナ　　　　　　　知ってるわ、アルカージナさんが来てるこ
　　　　　　　　　　と。だから閉めて……

トレープレフ　　　　（右手のドアの鍵《かぎ》をかけ、左手の
　　　　　　　　　　ドアに歩み寄る）ここには錠前がない。椅
　　　　　　　　　　子《いす》でふさいでおこう。（ドアの前
　　　　　　　　　　に肘《ひじ》かけ椅子を据える）さ、もう
　　　　　　　　　　心配しないで、誰も来ないから。

ニーナ　　　　　　　（彼の顔をじっと見つめる）ちょっと、お
　　　　　　　　　　顔を見させて。（あたりを見回して）暖か
　　　　　　　　　　くて、いい気持。……あのころ、ここは客
　　　　　　　　　　間だったのね。わたし、ひどく変ったかし
　　　　　　　　　　ら？

トレープレフ　　　　そう……だいぶ痩《や》せて、眼が大きく
　　　　　　　　　　なったな。ニーナ、こうして君を見ている
　　　　　　　　　　と、なんだか不思議な気がする。どうして
　　　　　　　　　　あんなに、僕を寄せつけなかったの？　ど
　　　　　　　　　　うして今まで来なかったの？　僕は知って
　　　　　　　　　　ますよ、君がもう一週間ちかく、この土地
　　　　　　　　　　にいることは。……僕は毎日、なんべんも
　　　　　　　　　　君の宿まで行っては、君の窓の下に立って
　　　　　　　　　　いた。乞食《こじき》みたいにね。

ニーナ　　　　　　　あなたがさぞ、わたしを憎んでらっしゃる
　　　　　　　　　　だろうと、それが怖《こわ》かったの。毎
　　　　　　　　　　晩おなじ夢を見るのよ——それは、あなた
　　　　　　　　　　がわたしを見ているくせに、わたしとは気
　　　　　　　　　　がつかないの。この気持、知ってくだすっ
　　　　　　　　　　たらねえ！　ここへ着いたその日から、わ
　　　　　　　　　　たしはあすこ……湖のへんを歩いていたの
　　　　　　　　　　。お宅の近くにもたびたび来たけれど、は
　　　　　　　　　　いる勇気がなかったわ。さ、坐《すわ》り
　　　　　　　　　　ましょう。（ふたり腰をおろす）坐って、
　　　　　　　　　　思いっきり話しましょう。ここはいいわ、
　　　　　　　　　　ぽかぽかして、居心地がよくって……。あ
　　　　　　　　　　の音は……風ね？　ツルゲーネフに、こう
　　　　　　　　　　いうところがあるわ、——「こんな晩に、
　　　　　　　　　　うちの屋根の下にいる人は仕合せだ、暖か
　　　　　　　　　　い片隅《かたすみ》を持つ人は」わたしは
　　　　　　　　　　、かもめ。……いいえ、それじゃない。（
　　　　　　　　　　額をこする）何を言ってたんだっけ？　そ
　　　　　　　　　　う……ツルゲーネフね……「主《しゅ》よ
　　　　　　　　　　、ねがわくは、すべての寄辺《よるべ》な
　　　　　　　　　　き漂泊《さすらい》びとを助けたまえ」…
　　　　　　　　　　…いいの、なんでもないの。（むせび泣く
　　　　　　　　　　）

トレープレフ　　　　ニーナ、君はまた……ニーナ！

ニーナ　　　　　　　いいの、これで楽になるわ。……わたし、
　　　　　　　　　　もう二年も泣かなかった。ゆうべおそく、
　　　　　　　　　　こっそりお庭へはいって、あのわたしたち
　　　　　　　　　　の劇場が無事かどうか、見に行きました。
　　　　　　　　　　あれは、まだ立っていますわね。それを見
　　　　　　　　　　たとき、二年ぶりで初めて泣いたの。する
　　　　　　　　　　と胸が軽くなって、心の霧が晴れました。
　　　　　　　　　　ほらね、わたしもう泣いていないわ。（彼
　　　　　　　　　　の手をとる）で、こうして、あなたはもう
　　　　　　　　　　作家なのね。……あなたは作家、わたしは
　　　　　　　　　　——女優。お互いに、渦巻《うずまき》の
　　　　　　　　　　なかへ巻きこまれてしまったのね。……あ
　　　　　　　　　　のころのわたしは、子供みたいにはしゃい
　　　　　　　　　　で暮していたわ——あさ目がさめると、歌
　　　　　　　　　　をうたいだす。あなたを恋してたり、名声
　　　　　　　　　　を夢みたり。それが今じゃどう？　あした
　　　　　　　　　　は朝早く、三等に乗ってエレーツへ行くの
　　　　　　　　　　よ……お百姓さんたちと合乗りでね。そし
　　　　　　　　　　てエレーツじゃ、教育のある商人連中が、
　　　　　　　　　　ちやほや付きまとってくれるでしょうよ。
　　　　　　　　　　むごいものだわ、生活って。

トレープレフ　　　　なんだってエレーツへなんか？

ニーナ　　　　　　　この一冬、契約をしたの。もう帰らなけれ
　　　　　　　　　　ば。

トレープレフ　　　　ニーナ、僕は君を呪《のろ》いもし憎みも
　　　　　　　　　　して、君の手紙や写真を破いてしまった。
　　　　　　　　　　それでいて、僕の心は永久に君と結びつい
　　　　　　　　　　ていると、毎分毎秒、意識していました。
　　　　　　　　　　あなたへの恋が冷《さ》めるなんて、僕に
　　　　　　　　　　はできないことだ、ニーナ。あなたという
　　　　　　　　　　ものを失い、作品がぼつぼつ雑誌に載りだ
　　　　　　　　　　してからこっち、人生は僕にとって堪えが
　　　　　　　　　　たいものになった——受難の道になった。
　　　　　　　　　　……自分の若さが急につみとられて、僕は
　　　　　　　　　　この世にもう九十年も生きてきたような気
　　　　　　　　　　がします。僕はあなたの名を呼んだり、あ
　　　　　　　　　　なたの歩いた地面に接吻《せっぷん》した
　　　　　　　　　　りしている。どこを向いても、きっとあな
　　　　　　　　　　たの顔が見えるんだ。ぼくの生涯の一ばん
　　　　　　　　　　楽しかった時代を照らしてくれた、あの優
　　　　　　　　　　しい微笑がね。……

ニーナ　　　　　　　（当惑して）なぜあんなことを言いだすの
　　　　　　　　　　かしら。なぜあんなことを？

トレープレフ　　　　僕はひとりぽっちだ。暖めてくれる誰の愛
　　　　　　　　　　情もなく、まるで穴倉のなかのように寒い
　　　　　　　　　　んです。だから何を書いても、みんなカサ
　　　　　　　　　　カサで、コチコチで、陰気くさい。ニーナ
　　　　　　　　　　、お願いだ、このままいてください。でな
　　　　　　　　　　けりゃ、僕もいっしょに行かせてください
　　　　　　　　　　！

［＃ここから３字下げ］

ニーナは手早く帽子と長外套を着ける。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

トレープレフ　　　　どうして君は、ええニーナ？　後生だ、ニ
　　　　　　　　　　ーナ……（彼女が身じたくするのを眺める
　　　　　　　　　　。間）

ニーナ　　　　　　　馬車が裏木戸のところに待たせてあるの。
　　　　　　　　　　送ってこないで、わたし一人で行けるから
　　　　　　　　　　……（涙声で）水をちょうだいな……

トレープレフ　　　　（コップの水を与える）今からどこへ行く
　　　　　　　　　　の？

ニーナ　　　　　　　町へ。（間）アルカージナさん、来てらっ
　　　　　　　　　　しゃるの？

トレープレフ　　　　そう。……この木曜、伯父さんの工合が変
　　　　　　　　　　だったので、僕たちが電報で呼び寄せたん
　　　　　　　　　　です。

ニーナ　　　　　　　わたしの歩いた地面に接吻したなんて、な
　　　　　　　　　　ぜあんなことをおっしゃるの？　わたしな
　　　　　　　　　　んか、殺されても文句はないのに。（テー
　　　　　　　　　　ブルにかがみこむ）すっかり、へとへとだ
　　　　　　　　　　わ！　一息つきたいわ、一息！　（首をあ
　　　　　　　　　　げて）わたしは——かもめ。……いいえ、
　　　　　　　　　　そうじゃない。わたしは——女優。そ、そ
　　　　　　　　　　うよ！　（アルカージナとトリゴーリンの
　　　　　　　　　　笑い声を聞きつけて、じっと耳をすまし、
　　　　　　　　　　それから左手のドアへ走り寄って、鍵穴か
　　　　　　　　　　らのぞく）あの人も来ている……（トレー
　　　　　　　　　　プレフのそばへ戻りながら）ふん、そう。
　　　　　　　　　　……かまやしない。……そうよ。あの人は
　　　　　　　　　　芝居というものを信用しないで、いつもわ
　　　　　　　　　　たしの夢を嘲笑《ちょうしょう》してばか
　　　　　　　　　　りいた。それでわたしも、だんだん信念が
　　　　　　　　　　失《う》せて、気落ちがしてしまったの。
　　　　　　　　　　……そのうえ、恋の苦労だの、嫉妬《しっ
　　　　　　　　　　と》だの、赤ちゃんのことでしょっちゅう
　　　　　　　　　　びくびくしたりで……わたしはこせついた
　　　　　　　　　　、つまらない女になってしまって、でたら
　　　　　　　　　　めな演技をしていたの。両手のもて扱い方
　　　　　　　　　　も知らず、舞台で立っていることもできず
　　　　　　　　　　、声も思うようにならなかった。ひどい演
　　　　　　　　　　技をやってるなと自分で感じるときの心も
　　　　　　　　　　ち、とてもあなたにはわからないわ。わた
　　　　　　　　　　しは——かもめ。いいえ、そうじゃない…
　　　　　　　　　　…。おぼえてらして、あなたは鴎《かもめ
　　　　　　　　　　》を射落《うちおと》したわね？　ふとや
　　　　　　　　　　って来た男が、その娘を見て、退屈まぎれ
　　　　　　　　　　に、破滅させてしまった。……ちょっとし
　　　　　　　　　　た短編の題材……。これでもないわ。……
　　　　　　　　　　（額をこする）何を話してたんだっけ？…
　　　　　　　　　　…そう、舞台のことだったわ。今じゃもう
　　　　　　　　　　わたし、そんなふうじゃないの。……わた
　　　　　　　　　　しはもう本物の女優なの。……わたしは楽
　　　　　　　　　　しく、喜び勇んで役を演じて、舞台に出る
　　　　　　　　　　と酔ったみたいになって、自分はすばらし
　　　　　　　　　　いと感じるの。今、こうしてここにいるあ
　　　　　　　　　　いだ、わたしはしょっちゅう歩き回って、
　　　　　　　　　　歩きながら考えるの。考えながら、わたし
　　　　　　　　　　の精神力が日ましに伸びてゆくのを感じる
　　　　　　　　　　の。……今じゃ、コースチャ、舞台に立つ
　　　　　　　　　　にしろ物を書くにしろ同じこと。わたした
　　　　　　　　　　ちの仕事で大事なものは、名声とか光栄と
　　　　　　　　　　か、わたしが空想していたものではなくっ
　　　　　　　　　　て、じつは忍耐力だということが、わたし
　　　　　　　　　　にはわかったの、得心が行ったの。おのれ
　　　　　　　　　　の十字架を負うすべを知り、ただ信ぜよ—
　　　　　　　　　　—だわ。わたしは信じているから、そう辛
　　　　　　　　　　《つら》いこともないし、自分の使命を思
　　　　　　　　　　うと、人生もこわくないわ。

トレープレフ　　　　（悲しそうに）君は自分の道を発見して、
　　　　　　　　　　ちゃんと行く先を知っている。だが僕は相
　　　　　　　　　　変らず、妄想《もうそう》と幻影の混沌《
　　　　　　　　　　こんとん》のなかをふらついて、一体それ
　　　　　　　　　　が誰に、なんのために必要なのかわからず
　　　　　　　　　　にいる。僕は信念がもてず、何が自分の使
　　　　　　　　　　命かということも、知らずにいるのだ。

ニーナ　　　　　　　（きき耳を立てて）シッ。……わたし行く
　　　　　　　　　　わ。ご機嫌よう。わたしが大女優になった
　　　　　　　　　　ら、見にいらしてちょうだいね。約束して
　　　　　　　　　　くださる？　では今日は……（彼の手を握
　　　　　　　　　　る）もう夜がふけたわ。わたしやっとこさ
　　　　　　　　　　で、立っているのよ。精も根も尽きてしま
　　　　　　　　　　った、何か食べたいわ……

トレープレフ　　　　ゆっくりして行って、夜食ぐらい出すから
　　　　　　　　　　……

ニーナ　　　　　　　いいえ、駄目……。送ってこないでね、ひ
　　　　　　　　　　とりで行けるから。……馬車はついそこな
　　　　　　　　　　んですもの。……じゃ、アルカージナさん
　　　　　　　　　　はあの人を連れていらしたのね？　なあに
　　　　　　　　　　、どうせ同じことだわ。……トリゴーリン
　　　　　　　　　　に会っても、なんにも言わないでね。……
　　　　　　　　　　わたし、あの人が好き。前よりももっと愛
　　　　　　　　　　しているくらい。……ちょっとした短編の
　　　　　　　　　　題材か。……好きだわ、愛してるわ、やる
　　　　　　　　　　せないほど愛してるわ。もとはよかったわ
　　　　　　　　　　ねえ、コースチャ！　なんという晴れやか
　　　　　　　　　　な、暖かい、よろこばしい、清らかな生活
　　　　　　　　　　だったでしょう。なんという感情だったで
　　　　　　　　　　しょう——優しい、すっきりした花のよう
　　　　　　　　　　な感情。……おぼえてらっしゃる？……（
　　　　　　　　　　暗誦《あんしょう》する）「人も、ライオ
　　　　　　　　　　ンも、鷲《わし》も、雷鳥も、角を生《は
　　　　　　　　　　》やした鹿《しか》も、鵞鳥《がちょう》
　　　　　　　　　　も、蜘蛛《くも》も、水に棲《す》む無言
　　　　　　　　　　の魚も、海に棲むヒトデも、人の眼に見え
　　　　　　　　　　なかった微生物も、——つまりは一切の生
　　　　　　　　　　き物、生きとし生けるものは、悲しい循環
　　　　　　　　　　《めぐり》をおえて、消え失《う》せた。
　　　　　　　　　　……もう、何千世紀というもの、地球は一
　　　　　　　　　　つとして生き物を乗せず、あの哀れな月だ
　　　　　　　　　　けが、むなしく灯火《あかり》をともして
　　　　　　　　　　いる。今は牧場《まきば》に、寝ざめの鶴
　　　　　　　　　　《つる》の啼《な》く音《ね》も絶えた。
　　　　　　　　　　菩提樹《ぼだいじゅ》の林に、こがね虫の
　　　　　　　　　　音ずれもない」……（発作的にトレープレ
　　　　　　　　　　フを抱いて、ガラス戸から走り出る）

トレープレフ　　　　（間をおいて）まずいな、誰かが庭でぶつ
　　　　　　　　　　かって、あとでママに言いつけると。ママ
　　　　　　　　　　は辛いだろうからな。……

［＃ここから３字下げ］

二分間ほど、無言のまま原稿を全部やぶいて、デスクの下へほうりこむ。それから右手のドアをあけて退場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

ドールン　　　　　　（左手のドアを、うんうん押しあけながら
　　　　　　　　　　）おかしいぞ。錠がおりてるのかな……（
　　　　　　　　　　はいって、肘かけ椅子を元の場所におく）
　　　　　　　　　　障碍物《しょうがいぶつ》競走だ。

［＃ここから３字下げ］

アルカージナ、ポリーナ、つづいてヤーコフは酒瓶《さかびん》（［＃割り注］訳注複数［＃割り注終わり］）をもち、それに
　　　　　　　　　　マーシャ、あとからシャムラーエフ、トリ
　　　　　　　　　　ゴーリン、それぞれ登場。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

アルカージナ　　　　赤ブドウと、トリゴーリンさんのあがるビ
　　　　　　　　　　ールは、このテーブルに置いてちょうだい
　　　　　　　　　　な。ロトーをしながら飲むんだからね。さ
　　　　　　　　　　、坐りましょう、皆さん。

ポリーナ　　　　　　（ヤーコフに）すぐお茶を出しておくれ。
　　　　　　　　　　（蝋燭《ろうそく》（［＃割り注］訳注
　　　　　　　　　　複数［＃割り注終わり］）をともし、カル
　　　　　　　　　　タ机に着席する）

シャムラーエフ　　　（トリゴーリンを戸棚のほうへひっぱって
　　　　　　　　　　行く）そらこれが、さっきお話しした品で
　　　　　　　　　　すよ……（戸棚から鴎の剥製《はくせい》
　　　　　　　　　　をとり出す）あなたのご注文で。

トリゴーリン　　　　（鴎を眺めながら）覚えがない！　（小首
　　　　　　　　　　をかしげて）覚えがないなあ！

［＃ここから３字下げ］

右手の舞台うらで銃声。一同どきりとなる。

［＃ここから改行天付き、折り返して１字下げ］

アルカージナ　　　　（おびえて）なんだろう？

ドールン　　　　　　なあに、なんでもない。きっと僕の薬カバ
　　　　　　　　　　ンのなかで何か破裂したんでしょう。心配
　　　　　　　　　　ありません。（右手のドアから退場して、
　　　　　　　　　　半分間ほどで戻ってくる）やっぱりそうで
　　　　　　　　　　した。エーテルの壜《びん》が破裂したん
　　　　　　　　　　です。（口ずさむ）「われふたたび、おん
　　　　　　　　　　みの前に、恍惚《こうこつ》として立つ」
　　　　　　　　　　……

アルカージナ　　　　（テーブルに向ってかけながら）ふっ、び
　　　　　　　　　　っくりした。あの時のことを、つい思い出
　　　　　　　　　　して……（両手で顔をおおう）眼のなかが
　　　　　　　　　　、暗くなっちゃった……

ドールン　　　　　　（雑誌をめくりながら、トリゴーリンに）
　　　　　　　　　　これに二カ月ほど前、ある記事が載りまし
　　　　　　　　　　てね……アメリカ通信なんですが、ちょっ
　　　　　　　　　　とあなたに伺いたいと思っていたのは、な
　　　　　　　　　　かでもその……（トリゴーリンの胴に手を
　　　　　　　　　　かけ、フットライトのほうへ連れてくる）
　　　　　　　　　　……なにしろ僕は、その問題にすこぶる興
　　　　　　　　　　味があるもので……（調子を低めて、小声
　　　　　　　　　　で）どこかへアルカージナさんを連れて行
　　　　　　　　　　ってください。じつは、トレープレフ君が
　　　　　　　　　　、ピストル自殺をしたんです。……

［＃ここで字下げ終わり］

［＃地から２字上げ］——幕——

底本：「かもめ・ワーニャ伯父さん」新潮文庫、新潮社

　　　　　　　　　　　　1967（昭和42）年9月25日発
　　　　　　　　　　行

　　　　　　　　　　　　2004（平成16）年11月25日
　　　　　　　　　　46刷改版

※楽譜は「世界文学大系46チェーホフ」筑摩書房、1958（昭和3
　　　　　　　　　　3）年12月5日からとりました。

入力：米田

校正：阿部哲也

2010年11月6日作成

2012年10月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。